

第2節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土器を主体として石器・土製品・石製品など、段ボール箱で約200箱分出土している。

これら遺物の大部分は、調査区南端の谷地形に形成された遺物密集地点（以下、谷と記す）からの出土である。この部分は表土から地山直上の層（Ⅰ～Ⅳ層）まで攪乱を受けており、縄文時代及び弥生時代の土器も混在して出土している。このため、本来、捨て場が形成されていたものか、また後世に他の場所から遺物が運ばれてきたものかは判然としない。このような出土状態のために遺物を層位的に把握することは不可能である。

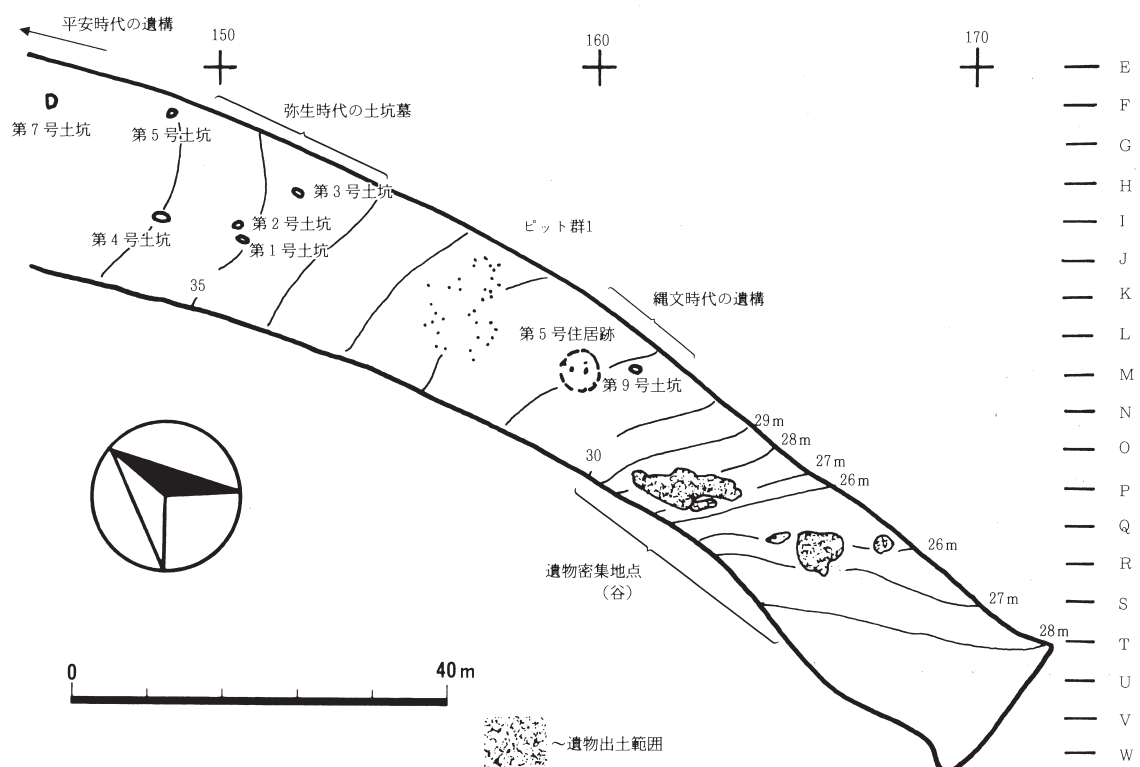
谷以外では、主に表土や平安時代の遺構の堆積土中から遺物が出土しているが、多くは農地造成の際の削平によって細片化している。また、石器などは散発的に出土する程度である。

1 土器

土器の総量は、段ボール箱で約150箱相当で、前述のとおりほとんどが谷からの出土である。また、本遺跡出土の全ての時期の土器を含んでいる。これに対し、谷以外からの出土土器は少量かつ細片化していた。これらのことから、本項は、谷から出土の土器を主体として述べ、このほかの土器については特殊なものを除き、参考資料程度にとどめることとする。

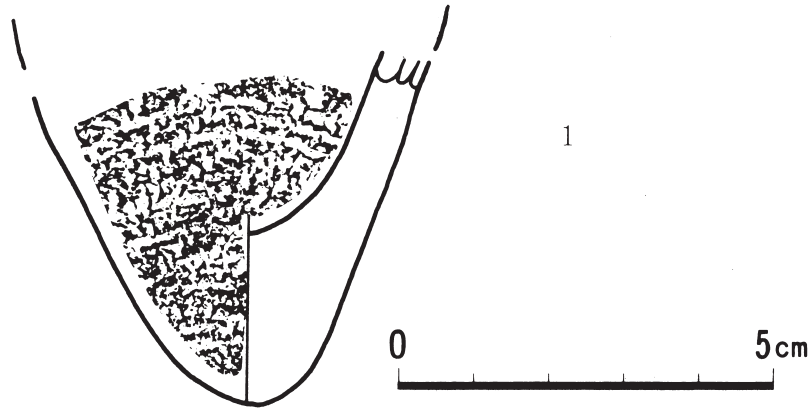
出土土器は、縄文時代早期から平安時代までと多岐にわたるが、縄文時代前期中葉と晩期終末期～弥生時代前期の2時期の土器が大半を占める。

本項では、各時期の土器型式ごとに分類基準を設定しながら記載していくこととする。



縄文時代早期の土器

縄文時代早期の土器は、1点のみの出土である。尖底深鉢の底部片で、表面に貝殻条痕を施した後に、撚糸文を施している。(図50—1)



図版番号	整理番号	出土地区	施文文様	胎土	外面色調
図50—1	280	Q—163	貝殻条痕文、単軸絡条体	雑(小石1mm大を含む)	10YR 6/2

図50 谷出土土器 1

縄文時代前期中葉～中期中葉の土器

A 円筒下層 a 式土器 (図51～図59—1～69)

昨今、下層 a 式後半と b 式前半の分類が混乱しているため、ここでは a 式として分類を行う。

(文様原体と隆帯による分類)

- A 1 隆帯を施さず、単一原体により施文するもの (1～6)
- A 2 隆帯を施し、単一原体により施文するもの (7～18)
- A 3 隆帯を施さず、口頸部に結節回転を施すもの (19～23)
- A 4 隆帯を施し、口頸部に結節回転を施すもの (30～39・41～45)
- A 5 沈線を施すもの (24～29)
- A 6 口頸部に条痕文を施すもの (40)

A 1～A 6 の胎土には全て植物繊維を含む。

B 円筒上層 a 式土器 (図60—70・71)

C 円筒上層 c 式土器 (図60—72)

D 円筒上層 d 式土器 (図60—73～78)

上記の詳細は観察表に記載する。

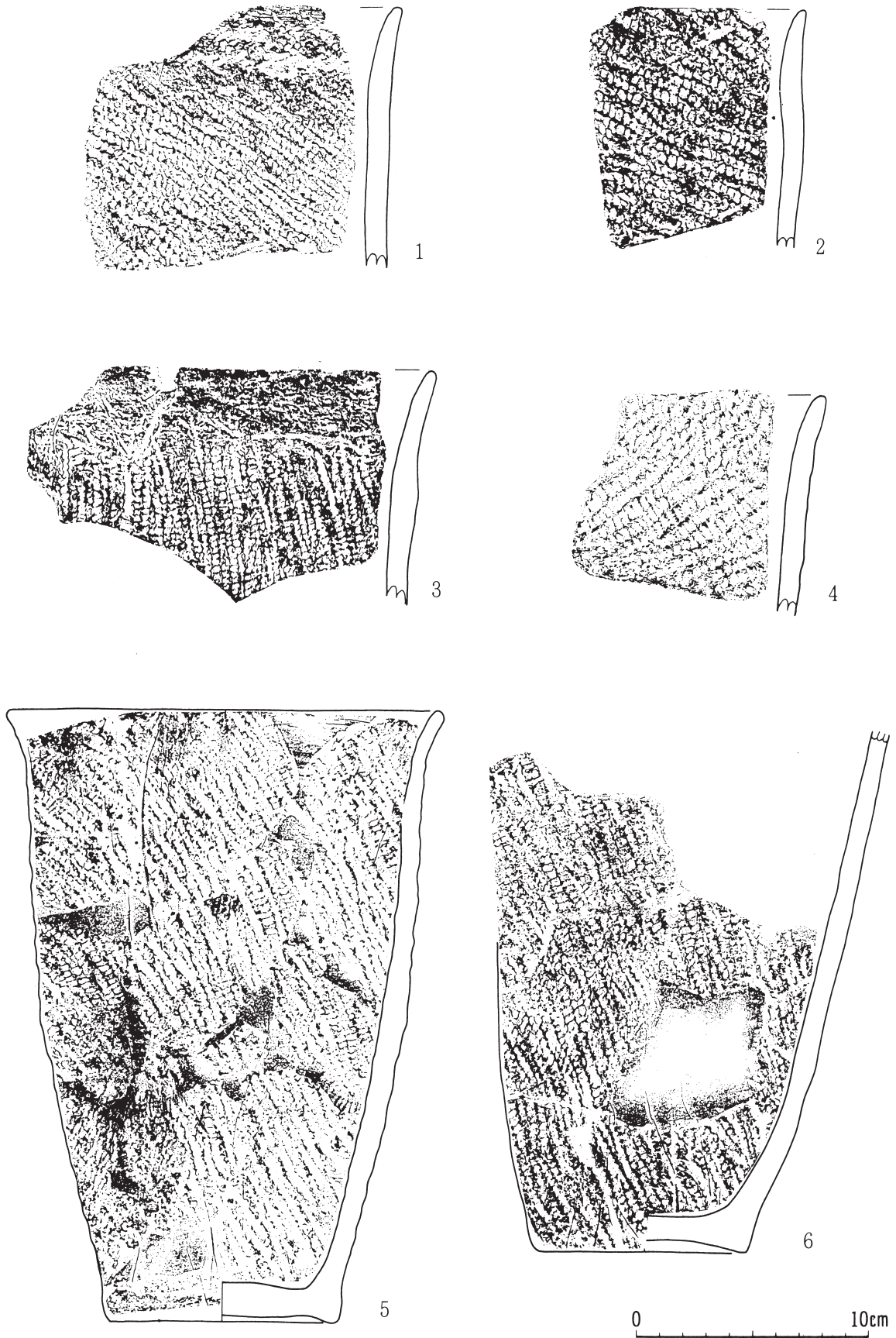


図51 谷出土土器 2

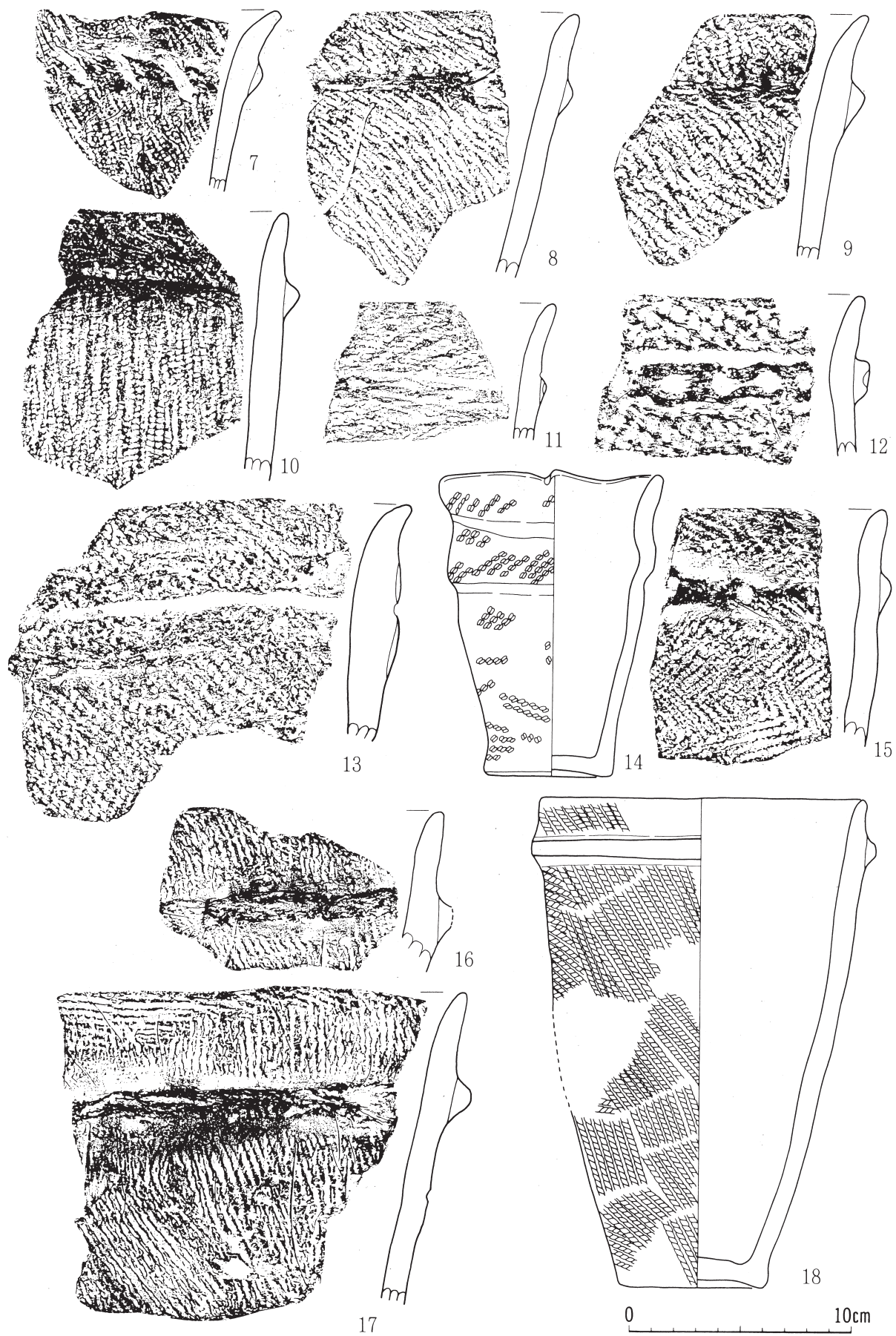


图52 谷出土土器 3

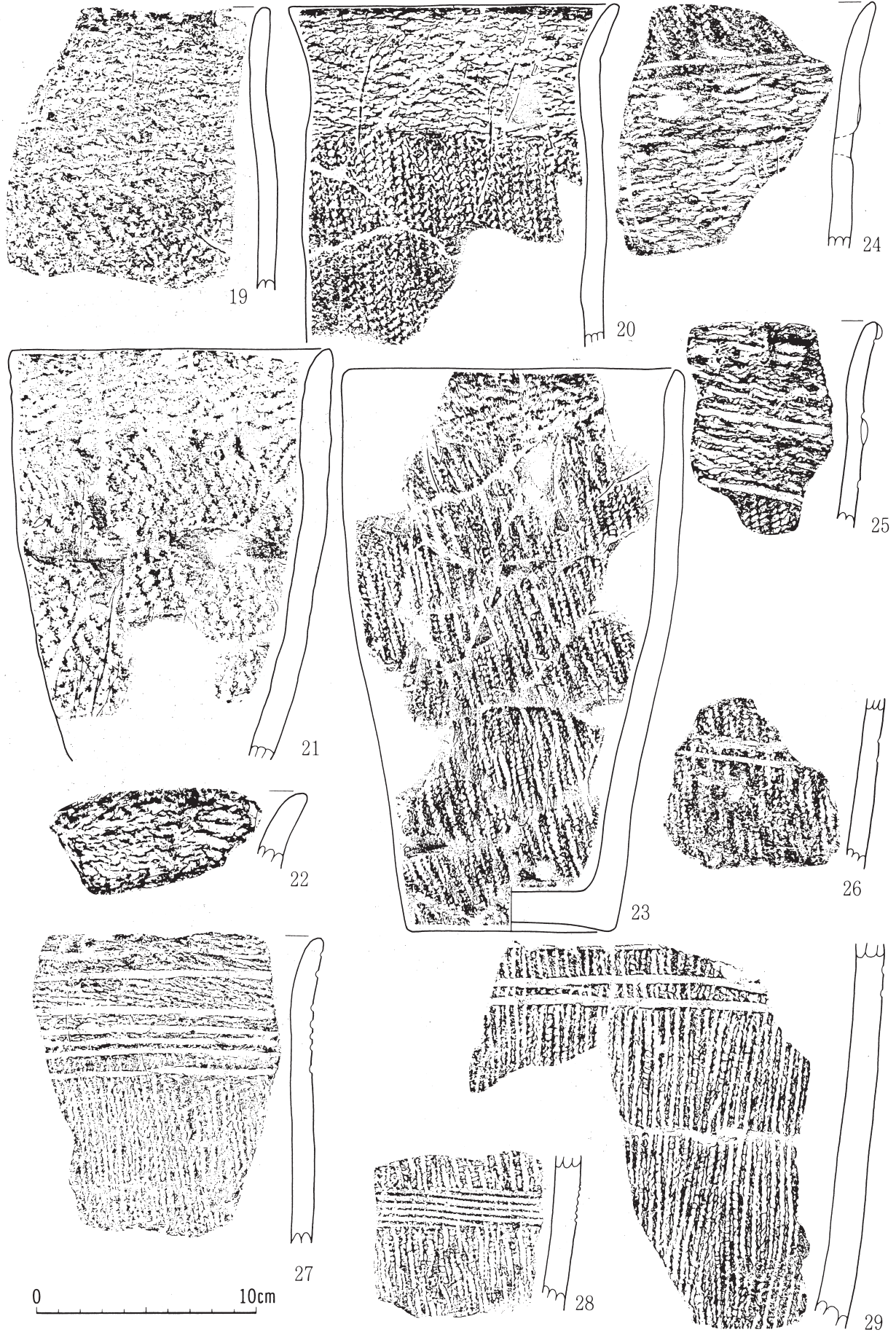


図53 谷出土土器 4

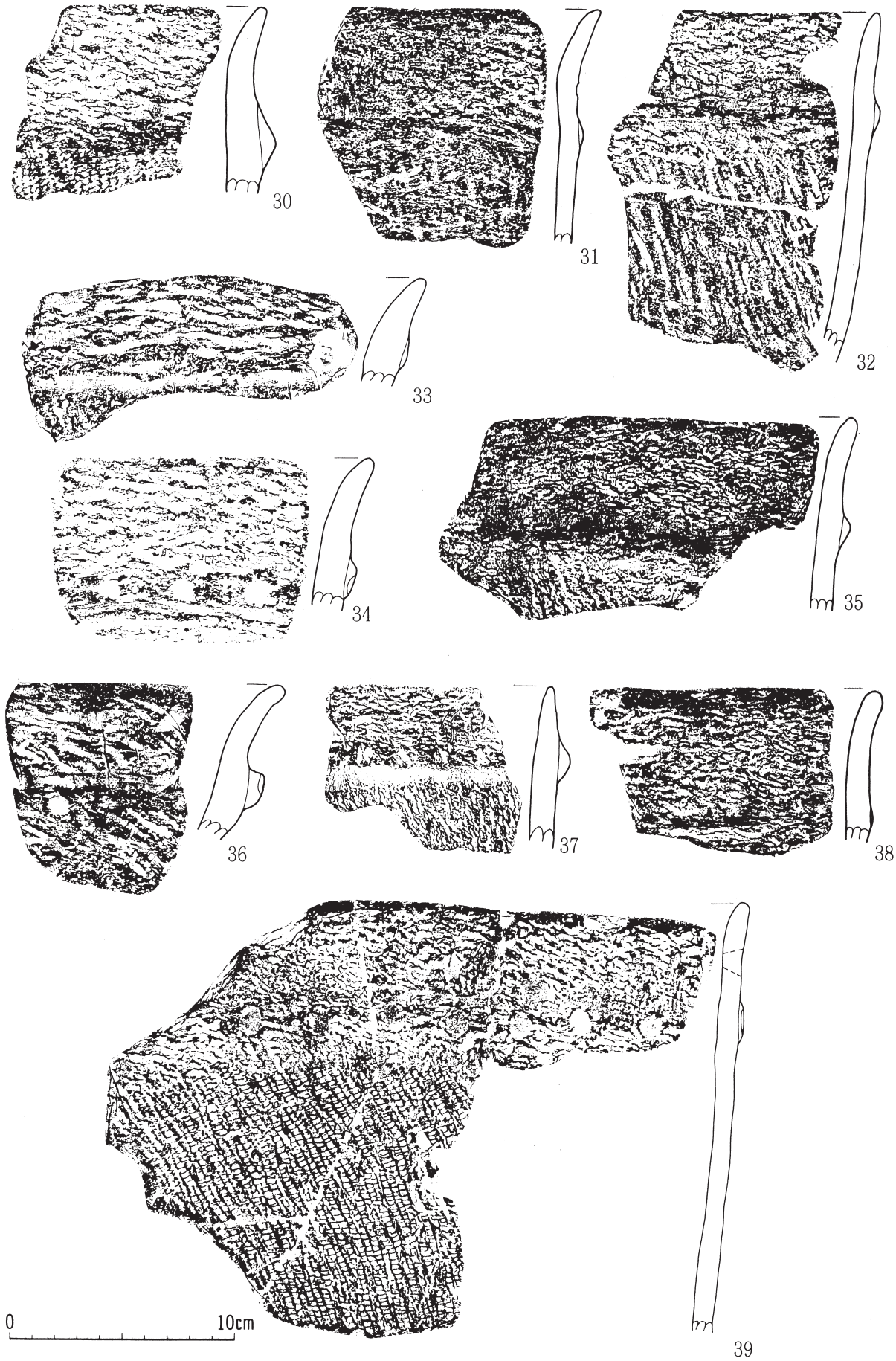


图54 谷出土土器 5

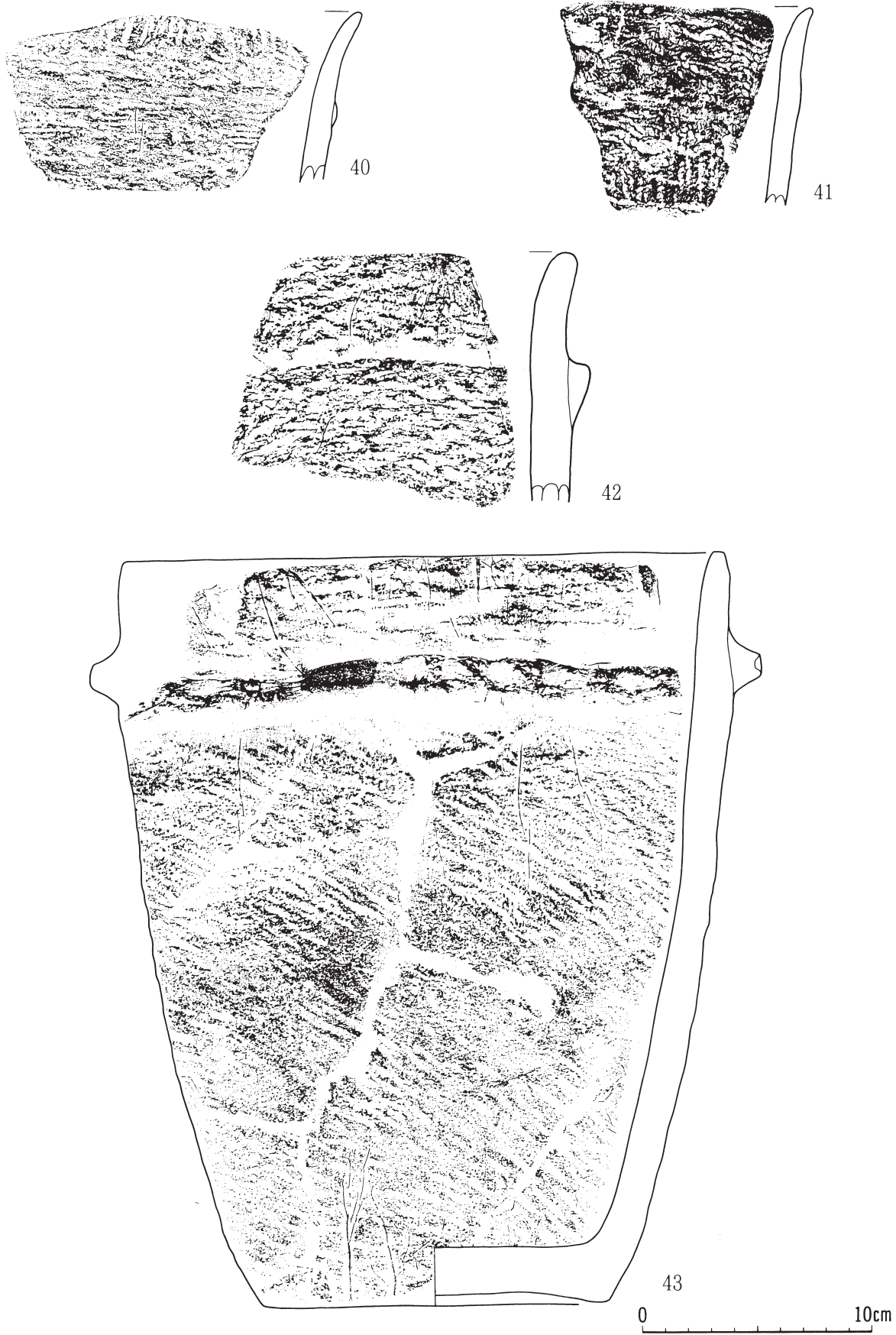
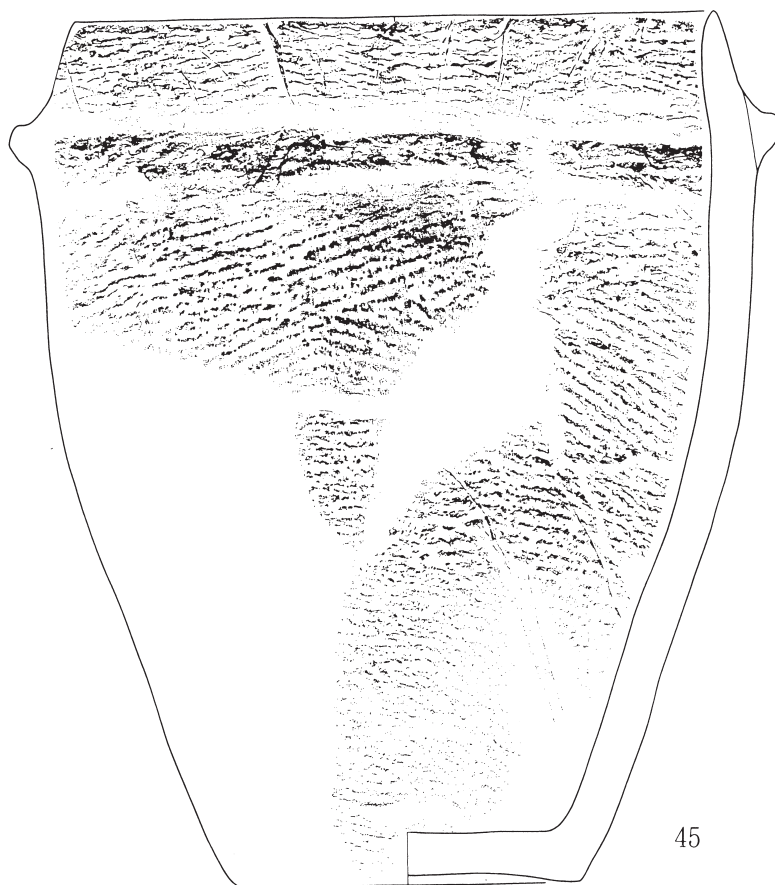


図55 谷出土土器 6



44



45

0 10cm

图56 谷出土土器 7

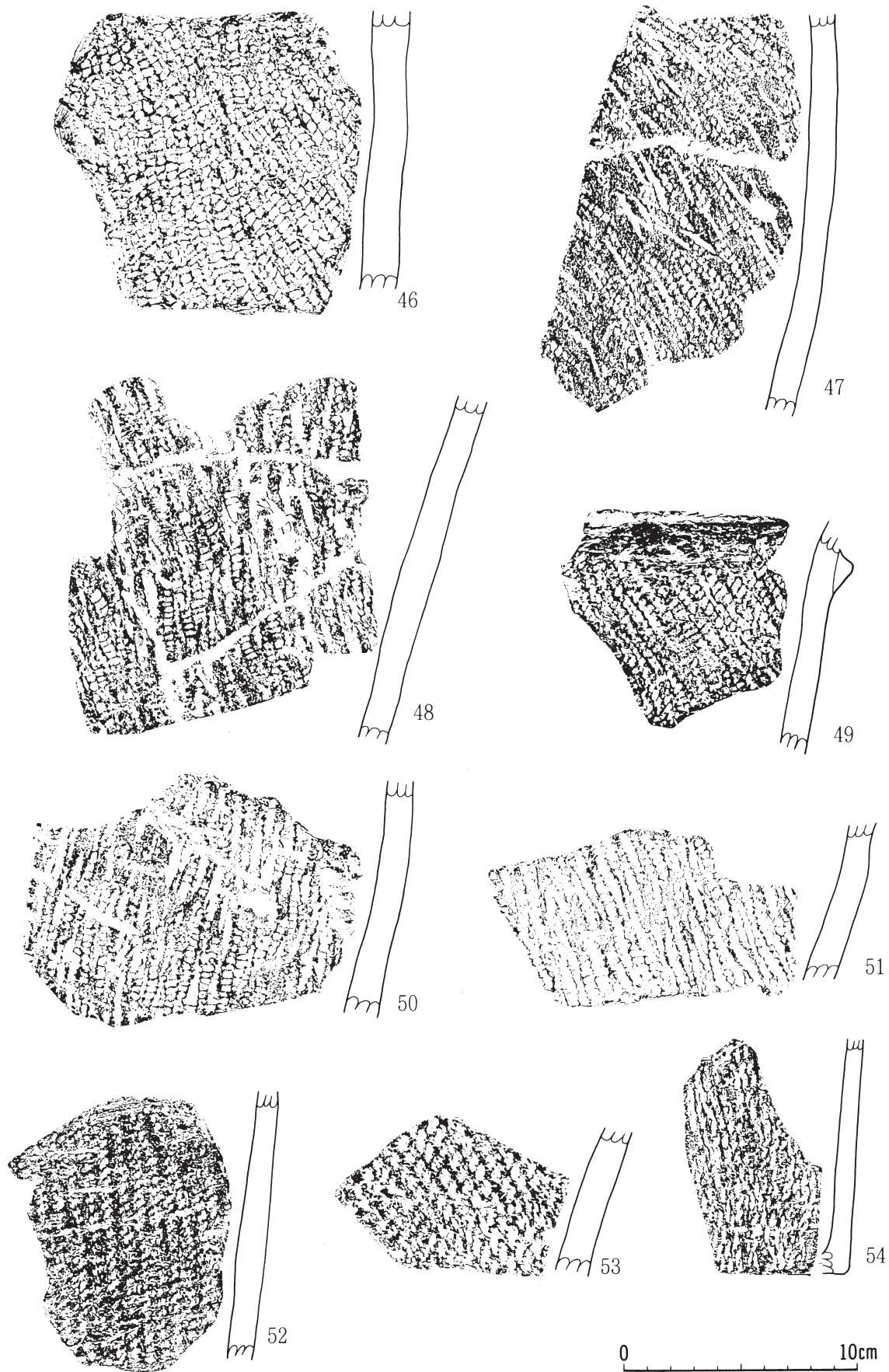


图57 出土土器 8

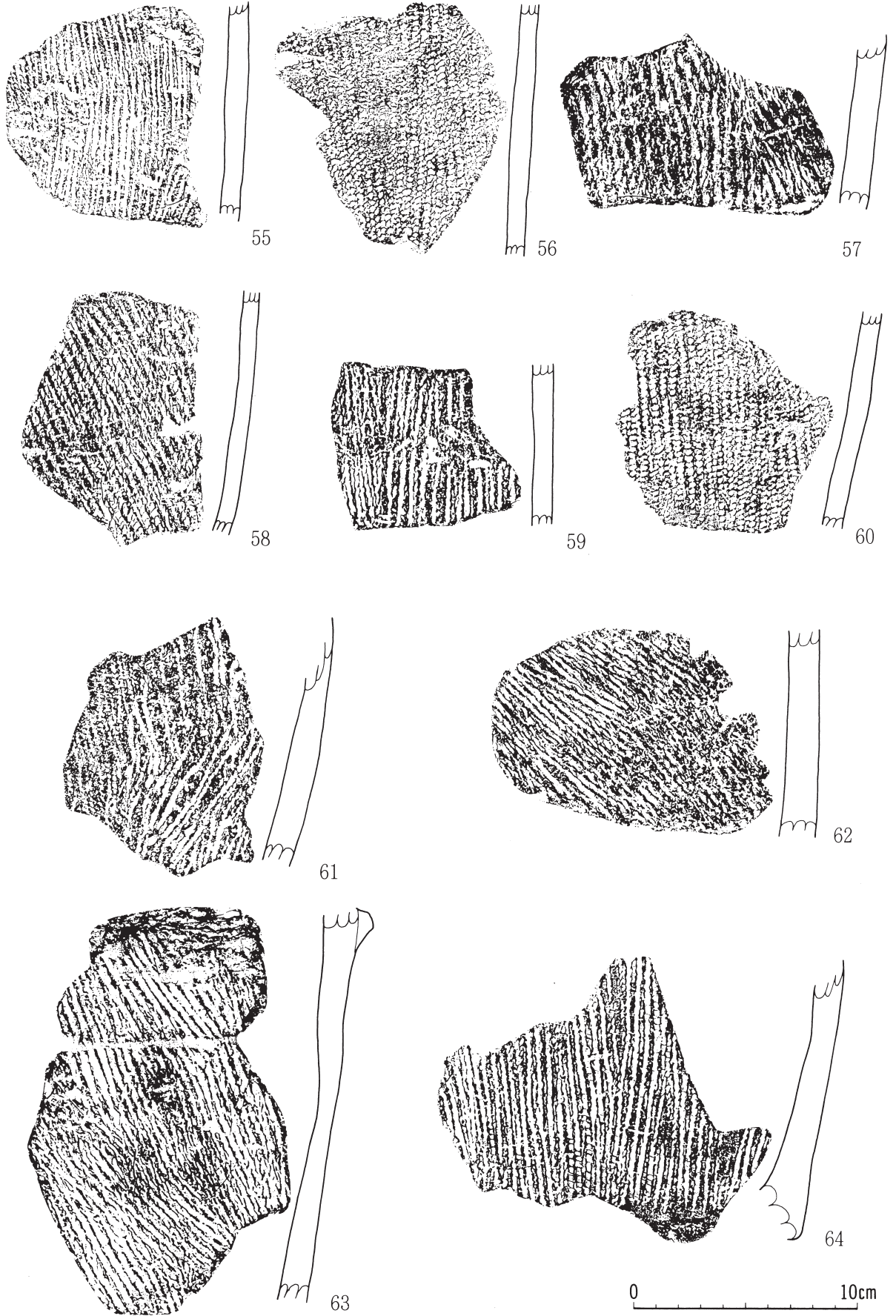
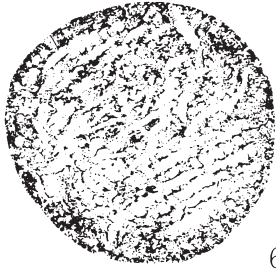
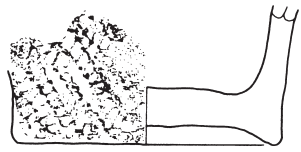
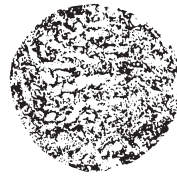
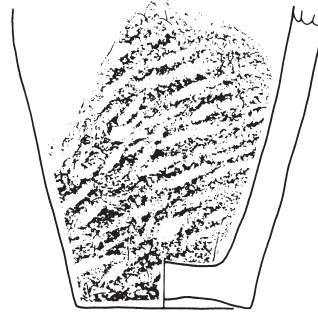


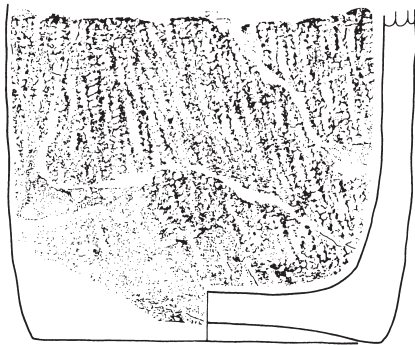
图58 谷出土土器 9



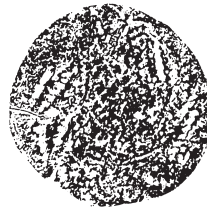
65



66



67



68



69



図59 谷出土土器10

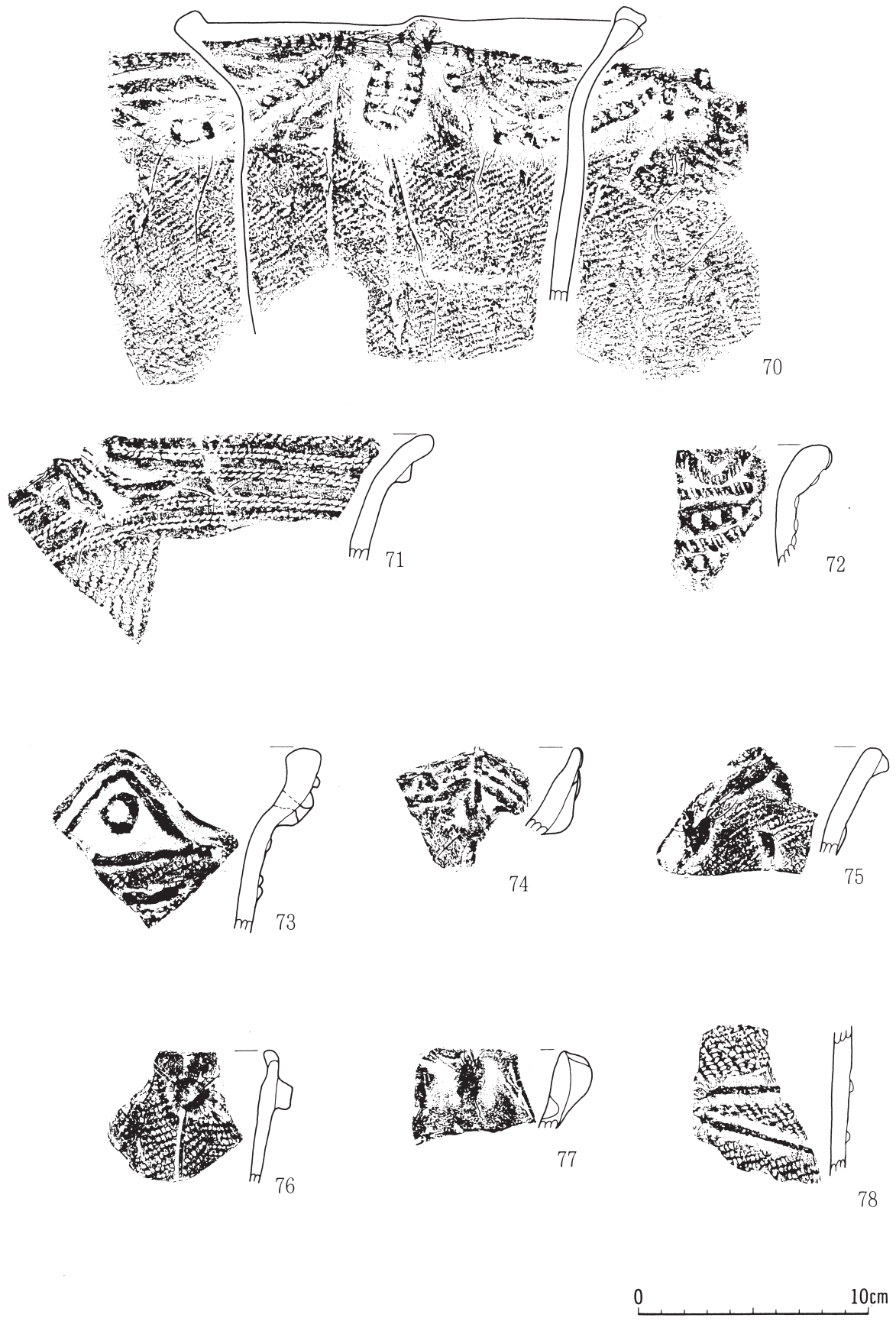


图60 谷出土土器11

縄文時代晩期終末～弥生時代の土器

ここでは縄文時代晩期終末～弥生時代の土器を一括してとらえて分類を行う。その中心は縄文時代晩期終末～弥生時代初頭に位置付けられる砂沢式（芹沢 1960）である。確認できる器種として、浅鉢・台付浅鉢・高坏・鉢・壺・深鉢・甕・注口土器がある。台付浅鉢と高坏の分類は復元資料が少ないため、一括する。また深鉢と甕も一括して分類を行うが、亀ヶ岡式の系譜を持つものを深鉢・持たないものを甕として考える。分類は施文文様による分類を行った後に、形態や調整による細分・細々分を行う。

（施文文様）

本遺跡出土土器の施文文様として、工字文・変形工字文・波状工字文・入り組文などがある。ここでは工字文と変形工字文を模式図化して分類する。但し、変遷過程は無視し施文パターンによる分類のみとする。工字文は数点のみの出土であるが、I～III型に分類する。（図61）変形工字文は砂沢式の特徴とも言える施文文様である。本遺跡では主に浅鉢・台付浅鉢にみられ、主要文様を構成する。ここでは、沈線間に形成される三角形と瘤状の貼り付けに着目し、I～X型に分類する。（図62）

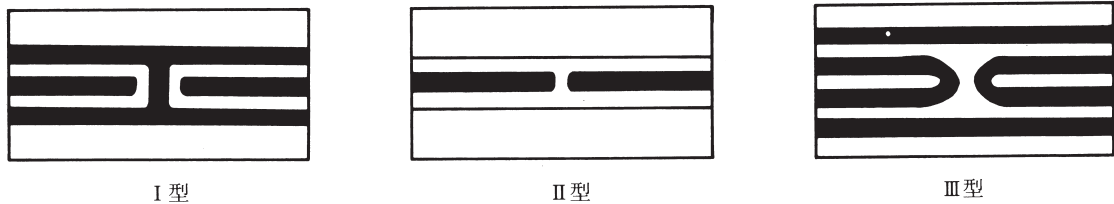


図61 工字文分類範式図

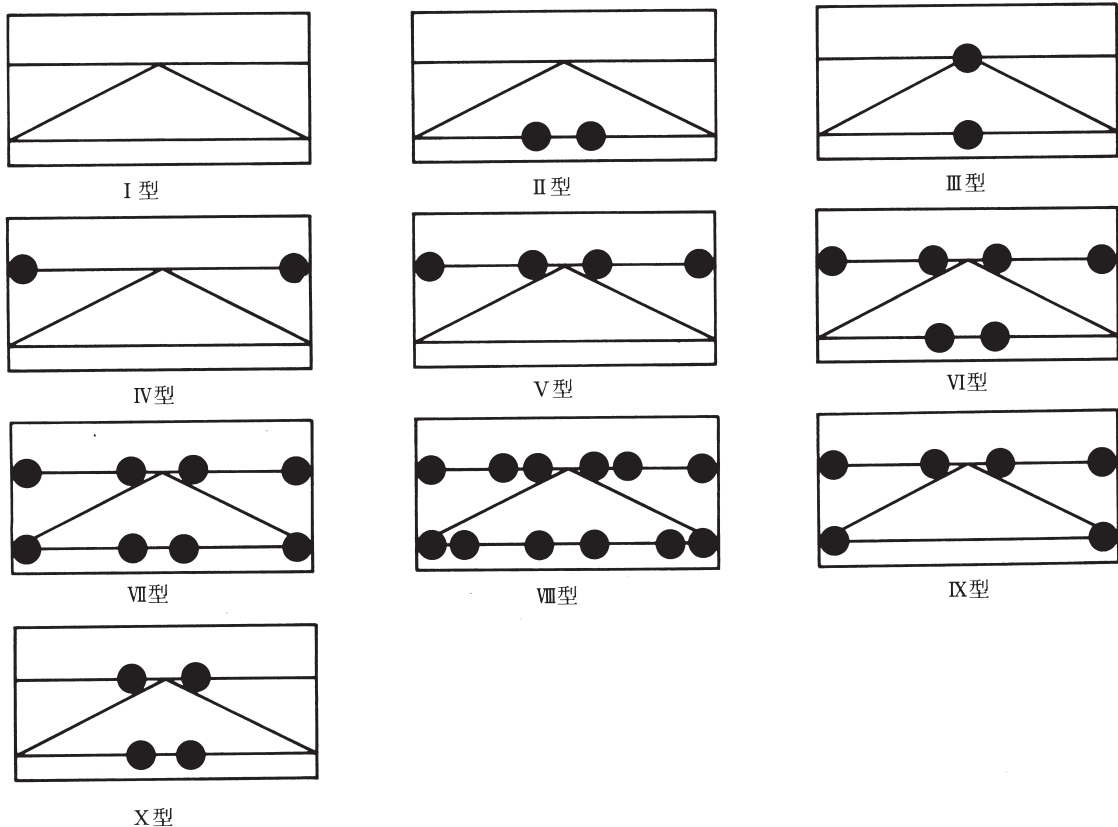


図62 変形工字文分類範式図

装飾突起 (図63)

本遺跡出土土器は、波状口縁頂部に様々な装飾突起をもつ。その主体は浅鉢・台付浅鉢である。これを模式図化して、1～14類に分類する。

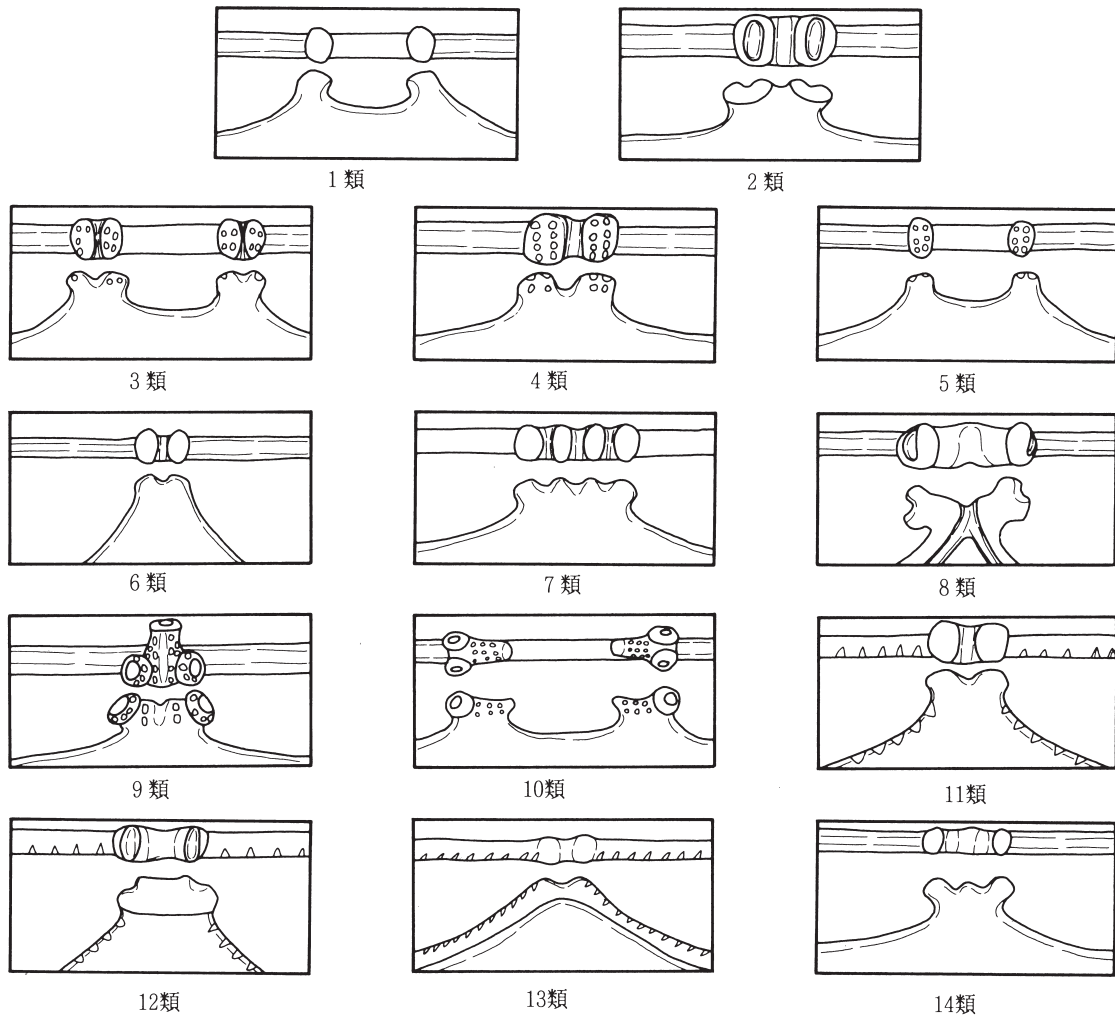


図63 装飾突起分類範式図

I 浅鉢形土器

(施文文様による分類)

- A 工字文を施文するもの
- B 変形工字文を施文するもの
- C 横位沈線を施文するもの
- D 波状工字文を施文するもの

I A 工字文の種類により2類に細分する。

I A 1 I型を施文する。(図64—1) 口縁部は直線的に開き、内面に一条の沈線を施す。

I A 2 III型を施文する。(図64—2～6) 2は口縁部が緩やかな波状をなし、体部から直線的に開く。内面に一条の沈線を施す。6は体部が若干の膨らみをもって開き、内面に一条の沈線を施す。工字

文は二段に重層化する。3は体部が直線的に開き、内面に一条の沈線を施す。4は底部にも文様帯をもつ。5は体部下半にLR斜行縄文を施す。

I B 変形工字文の種類により9類に細分する。

I B 1 I型を施文するもの。(図64—7~11)形態により4類に細々分する。a体部が直線的に開くもの。(7・8)内面に一条の沈線を施す。b体部が膨らみをもって開くもの。(9)内面に一条の沈線を施す。c体部が膨らみをもって開き、口縁部が直上するもの。(11)体部にLR斜行縄文を施し、内面に一条の沈線を施す。d体部上半で内湾し、口縁部が外反するもの。(10)口縁部は緩やかな波状をなし、内面に二条の沈線を施す。

I B 2 II型を施文するもの。(図64—12~14)形態により2類に細々分する。a体部が膨らみをもって開くもの。(12・14)12はLR斜行縄文を施す。14はLR横位縄文を施す。b体部が直線的に開き、口縁部が外反するもの。(13)内面に一条の沈線を施す。

I B 3 III型を施文するもの。(図64—15)体部は直線的に開き、内面に一条の沈線を施す。文様帯は二段に重層化する。中段の貼り付けは欠損する。

I B 4 IV型を施文するもの。(図64—16・17)体部は膨らみをもって開く。口縁部は16が外反し、17は直上する。内面に一条の沈線を施す。16はLR斜行縄文を施す。

I B 5 V型を施文するもの。(図64—18)体部から口縁部が直線的に開く。頂部に1+4類の突起をもつ。内面に一条の沈線を施す。

I B 6 VI型を施文するもの。(図65—19~22)形態により3類に細々分する。a体部が直線的に開くもの。(19・20)20は内面に一条の沈線を施す。b体部が膨らみをもって開くもの。(22)c体部が膨らみをもって開き、肩部で屈曲し、口縁部が直上するもの。(21)内面に一条の沈線を施し、体部下半にRL横位縄文を施す。

I B 7 VII型を施文するもの。(図65—23~29)形態により3類に細々分する。a体部が直線的に開き、口縁部が外反するもの。(25・26)25は頂部に1+4類の突起をもつ6単位の波状口縁をなす。内面に二条の沈線を施す。26は頂部に2+5類の突起をもつ波状口縁をなし、内面に一条の沈線を施す。b体部が直線的に開き、肩部で屈曲し、口縁部が外反するもの。(23・27~29)23は平口縁で内面に一条の沈線を施す。27は頂部に1+4類の突起をもつ波状口縁をなし、内面に一条の沈線を施す。28は頂部に5類の突起をもつ波状口縁をなし、内面に一条の沈線を施す。29は頂部に5類の突起をもつ波状口縁をなす。c体部が膨らみをもって開き、肩部で内湾し、口縁部が外反するもの。(24)平口縁をなし、内面に一条の沈線を施す。

I B 8 VIII型を施文するもの。(図66—31~33)全て体部が直線的に開き、肩部で屈曲し、口縁部が外反する。口縁部は全て波状をなし、31は2類、32は2+10類、33は2+9類の突起が付く。32は内面に一条の沈線を施し、31・33は二条の沈線を施す。

I C 形態により2類に細分する。

I C 1 体部が膨らみをもって開くもの。(図66—34)平口縁をなし、口頸部に幅1mmの沈線を施す。口縁下の二条沈線間は、ナデ調整により無文帯を形成する。LR斜行縄文を施す。

I C 2 体部が直線的に開き、肩部で屈曲し、口縁部が外反するもの。(図66—35・36)35は内面に一条の沈線を施し、体部にRL縦走縄文を施す。36は口縁部・頸部・体部に二条一組の沈線を施す。

頸部沈線には2個1対の貼り付けを施す。内面に二条の沈線を施し、体部にLR斜行縄文を施す。

ID 形態により2類に細分する。

ID1 体部が直線的に開くもの。(図66—37)体部に刺突を施す。

ID2 体部が若干の膨らみをもって開くもの。(図66—38・図67—50)体部に刺突を施す。38は内面に一条の沈線を施す。

(その他)

細片資料のため、装飾突起のみ分類する。

30・41・44・46・48は2類、39・40・47は4類、42・43は9類、49は2+5類である。

II 台付浅鉢形土器

(施文文様による分類)

A 工字文を施文したもの

B 変形工字文を施文したもの

IIA 工字文の種類により2類に細分する。

IIA1 I型を施文するもの。(図68—67)体部は若干の膨らみをもって開き、肩部で屈曲し、口縁部が直上する。内面に一条の沈線を施す。内面底部には、平面円形・断面皿状の窪みをもつ。

IIA2 III型を施文するもの。(図68—68)体部は直線的に開き、肩部で屈曲し、口縁部が外反する。波状口縁をなし、内面に二条の沈線を施す。体部下半にはLR斜行縄文を施す。

IIB 変形工字文の種類により2類に細分する。

IIB1 VI型を施文するもの。(図68—70・71)体部が直線的に開き、肩部で屈曲し、口縁部が外反する。70は口端部と内面に一条の沈線を施し、底部内面にも円状に繋がる沈線を施す。台部は台形状を呈する。71は頂部に8類の突起をもつ波状口縁をなす。内面に二条の沈線を施す。

IIB2 IX型を施文するもの。(図68—69)体部は直線的に開き、肩部で屈曲し、口縁部が内湾する。体部下半にLR斜行縄文を施す。台部は台形状を呈する。

図69—93~95は内面底部に円状に繋がる沈線を施す。

(その他)

細片資料のため装飾突起のみ分類する。

79は1類、72・74・76・77は6類、78は7類、73・80は8類である。

III 鉢形土器

(施文文様による分類)

A 工字文を施文するもの

B 変形工字文を施文するもの

C 入り組文を施文するもの

D 波状工字文を施文するもの

E 波状沈線を施文するもの

F 横位沈線と条痕文を施文するもの

G 縄文を施文するもの

H 口縁部に無文帯・体部に縄文を施文するもの

I 口縁部に横位沈線・胴部に縄文を施文するもの

J 横位沈線を施し無文帯を形成するもの

III A III型を施文する。(図69—98) 体部は若干の膨らみをもって開き、肩部で屈曲し、口縁部が外反する。口縁部は波状をなし、口端面と内面に一条の沈線を施す。体部にL R斜行縄文を施す。

III B 変形工字文の種類により2類に細分する。

III B 1 I型を施文するもの。(図69—100) 胴部上半で内湾し、口縁部は外反する。口縁部は波状をなし、内面に一条の沈線を施す。体部にはR L縦走縄文を施す。

III B 2 X型を施文するもの。(図69—99) 体部は膨らみをもって開き、口縁部は外反する。内面に一条の沈線を施し、体部にL R斜行縄文を施す。

III C (図69—101~104) 全て波状口縁をなし、内面に一条の沈線を施す。101は体部上半で内湾し、口縁部が直上する。沈線間に刺突文を施し、体部にL R斜行縄文を施す。102は表面沈線間にL R斜行縄文を施す。103は12類の突起をもち、体部にR L縦走縄文を施す。104は口縁端部に刻目を施し、体部にはL R縦走縄文を施す。

III D (図69—105) 体部上半で内湾し、口縁部は直上する。頂部に11類の突起をもつ波状口縁をなし、内面に一条の沈線を施す。表面沈線間には、ヘラ状工具による刺突文を施す。

III E (図70—117) 体部は若干の膨らみをもって開き、口縁部は内湾する。口縁部文様帯は二段の波状沈線を施す。上段は一条の横位を施した後に、低頂部が交わる波状沈線を施す。下段は一条の横位沈線を施した後に、低頂部が交わる二条の波状沈線を施す。体部はL R斜行縄文を施した後に、ナデ付けを施している。内面に一条の沈線を施し、全面にミガキを施す。

III F (図70—107・108) 頸部に幅4~5mmの三条の沈線を施し、体部に幅1mmの断面三角形を呈する条痕文を施す。内面にはナデ調整を施す。

III G (図69—106) 口縁部は直上し、R L縦走縄文を施す。内面にナデ調整を施す。

III H 口縁部の形態により2類に細分する。

III H 1 平口縁をなすもの。(図70—110~113) 無文帯の調整により2類に細々分する。a ミガキによるもの。(110) 口縁部にR L斜行縄文、体部に縦走縄文を施す。b ナデによるもの。(111~113) 体部にL R斜行縄文を施す。

III H 2 波状口縁をなすもの(図70—109) 口縁部は押圧により波状をなす。頸部にはナデによる無文帯を形成し、体部にR L縦走縄文を施す。

III I 口縁部の形態により2類に細分する。

III I 1 平口縁をなすもの。(図70—114・118・119) 114は頸部に三条の沈線を施し、中央帯に4つの貼り付けを施す。口縁・体部にはR L斜行縄文を施し、内面に一条の沈線を施す。118は胴部下半で直上し、口縁部が外反する。底部は高台状をなし体部にR L斜行縄文を施す。119は沈線に貼り付けを施し、沈線間と体部にL R斜行縄文を施す。

III I 2 波状口縁をなすもの。(図70—115・116) 115は口縁・体部にL R縦走縄文を施し、内面に

一条の沈線を施す。116は体部が若干の膨らみをもって開く。体部にLR斜行縄文を施す。内面には付着物が残存する。

III J 口縁部の形態により2類に細分する。

III J 1 平口縁をなすもの。(図70・71—120~129) 口縁部の形態により2類に細々分する。a 口縁部が外反するもの。(120~125) 120・121は口縁部と頸部沈線間にミガキによる無文帯を形成する。122は頸部下に七条の沈線を施し、沈線間は幅狭の無文帯を形成する。123は口頸部に五条の沈線を施し、沈線間は幅狭の無文帯を形成する。124は口頸部に四条の沈線を施し、沈線間は幅狭の無文帯を形成する。125は頸部から肩部に三条の沈線を施し、沈線間をミガキによる幅狭の無文帯とする。122~125は内面に一条の沈線を施す。b 口縁部が直上又は内湾するもの。(126~129)

128は口縁端部に刻目を施し、沈線間にミガキによる無文帯を形成する。127~129は内面に一条の沈線を施す。

III J 2 波状口縁をなすもの。(図71・72—130~149) 口縁部の形態により3類に細々分する。a 口縁部が外反するもの。(130~132・134~136・139・140・143) 130~132は沈線間に幅広の無文帯を形成する。130はナデ、131・132はミガキによる無文帯を形成する。134~136・139・140・143は沈線間に幅狭の無文帯を形成する。134~136は沈線間に一部縄文を残すが、ミガキによる無文帯を形成する。139は口縁部に刺突列点を施し、内面に二条の沈線を施す。表面に赤色の付着物がみられる。130~132・135・140・143は内面に一条の沈線を施す。b 口縁部がく字状に外反するもの。(144・145) 144は口端部に刻目を施し、内面に一条の沈線を施す。無文帯はミガキにより形成される。145は口縁部にミガキによる無文帯を形成し、内面に一条の沈線を施す。c 口縁部が直上又は内湾するもの。

(133・137・138・141・146~149) 133はミガキによる幅広の無文帯を形成する。137は頸部から胴部上半に十一条の沈線を施し、沈線間を幅狭の無文帯とする。

138は幅5~6mmの沈線を施し、沈線間を雑なミガキにより無文帯とする。147・148はミガキにより無文帯を形成する。149はナデにより無文帯を形成する。

(その他)

細片資料のため、装飾突起のみ分類する。

153は12類である。

IV 壺形土器

(施文文様による分類)

- A 工字文を施文するもの
- B 変形工字文を施文するもの
- C 波状工字文を施文するもの
- D 入り組文を施文するもの
- E 横位沈線を施文するもの
- F 口縁部が無文のもの
- G 胴部に縄文を施すもの
- H 頸部に列点文を施すもの

I 胴部に列点文を施すもの

IV A 工字文の種類により2類に細分する。

IV A 1 II型を施文するもの。(図73—191~194) 全て広口壺である。191・193は口縁部がく字状に外反し、192は緩やかに外反する。194は直上気味に外反し、頂部が2つに分かれる波状口縁をなす。口縁部にRL斜行縄文を施し、沈線間にナデによる無文帯を形成する。内面に一条の沈線を施す。

IV A 2 III型を施文する。(195) 細口壺であり、頸部に眼鏡状の貼り付けを施す。内外面ともミガキを施し、内面に一条の沈線を施す。

IV B 変形工字文の種類により2類に細分する。(図73・74—198~203)

IV B 1 V型を施文するもの。(199) 口縁部は波状をなし、眼鏡状の沈線帯を施す。内面に一条の沈線を施す。

IV B 2 VII型を施文するもの。(200) 口縁部は14類の突起をもつ6単位の波状口縁をなす。文様は3単位で形成され、体部下半にLR斜行縄文を施す。内面に一条の沈線を施す。

IV C (図73—197)

IV D (図73—196) 口縁部は直上し、RL斜行縄文を施す。沈線は幅1.5mmと細く、沈線間に刺突列点を施す。内面に一条の沈線を施す。

IV E (図75・76~222—246) 口縁部の形態により、2類に細分する。

IV E 1 口縁部が外反するもの。口縁部の調整により2類に細々分する。a ナデを施すもの。(222~236・243・245) 227~230は口縁端部に沈線を施す。228~231・235・245は内面に一条の沈線を施す。228は横位沈線を施した後に、三条の縦位沈線を施す。235は沈線に2個1対の貼り付けを施す。232・234は内面にハケ調整を施す。245は口縁部と頸部に2個1対の貼り付けをもつ沈線を施す。沈線間はナデによる無文帯とする。b ミガキを施すもの。(237~242) 239~242は内面に一条の沈線を施す。242は波状口縁をなし、口唇部にRL縦走縄文を施す。239は沈線に2個1対の貼り付けを施す。内面にミガキとハケ調整を施す。

IV E 2 口縁部が直上するもの。(244) 胴部上半に数条の沈線を施す短頸壺である。頸部下に穿孔痕がある。

IV F (図74—204~209) 口縁部の形態により2類に細分する。

IV F 1 口縁部が外反する広口壺である。調整により2類に細々分する。a 口縁部にミガキを施すもの。(207~209) 内外面とも磨かれている。207はく字状に外反する。b 口縁部にナデを施すもの。(206)

IV F 2 口縁部が外反する細口壺である。(204・205) 205は内外面ともミガキを施す。204はミガキの後にナデを施しているようだが、磨耗が著しく明確には解らない。

IV G (図74—213~217) 全てLR単節縄文を施す。213は口縁部が直上する短頸壺で、端部に縄文による刻目を施す。頸部と肩部に三条の沈線を施し、沈線間はミガキにより無文帯を形成する。内面に一条の沈線を施す。214は頸部で直上し、口縁部が外反する。口縁部は内外面ともミガキを施す。頸部に二条、内面に一条の沈線を施す。

IV H (図75—218~221) 口縁部は外反し、頸部に列点を施す。218は縦位、219~221は横位に列点を施す。218・220は口縁部にナデを施し、219はミガキを施す。221は沈線下に列点を施す。全て内面

にミガキを施す。

Ⅳ I (図74—210～212) 210は三条の横位沈線の上下に刺突列点を施す。内面にハケ調整を施す。211は二条の沈線間に刺突列点を施す。内面にミガキを施す。212は2個1対の貼り付けをもつ沈線下に刺突列点文を施す。内外面ともミガキを施す。

(その他の遺物)

細片資料のため分類をさける。細頸壺(247～252) 247・248・250・251は口縁部に眼鏡状の貼り付けを施す。胴部(254～258) 全て外面にミガキを施す。254・255は内面にミガキを施す。256～258は内面にナデを施す。

V 鉢・甕形土器

(施文文様による分類)

- A 横位沈線を施し、無文帯を形成するもの
- B 口縁部に無文帯・体部に縄文を施したもの
- C 縄文のみを施文するもの
- D 条痕文を施文したもの
- E 刺突列点を施文したもの
- F 入り組文を施文したもの

V A 口縁部の形態により2類に細分する。

V A 1 平口縁をなすもの。(図77—260～270) 口縁部の形態により2類に細々分する。a 口縁部が外反するもの。(260～264) 260～263は口頸部にナデによる無文帯を形成し、内面にミガキを施す。260～262は口縁端部に縄文による刻目を施す。264は頸部にミガキによる無文帯を形成し、内面にミガキを施す。b 口縁部が内湾又は直上するもの。(265～270) 265・267はナデによる無文帯を形成する。268～270はミガキによる無文帯を形成する。266はミガキの後にナデを施す。

265は口端部に縄文による刻目を施す。口縁部は内側に折り返して形成される。265～268・270は内面にミガキを施す。266は内面に一条の沈線を施す。

V A 2 波状口縁をなすもの。(図78—271～273) 口縁部の形態により2類に細々分する。a 口縁部が外反するもの。(271) 口頸部にミガキによる無文帯を形成する。b 口縁部が内湾するもの。(272・273) 口頸部にミガキによる無文帯を形成する。273は内面にミガキを施す。

V B (図78—274～277) 口縁部の形態により2類に細分する。

V B 1 口縁部が外反するもの。(274～276) 口頸部にナデによる無文帯を形成する。274・275は口端部に縄文による刻目を施す。内面にミガキを施す。

V B 2 口縁部が内湾するもの。(277) 口端部に縄文による刻目を施し、口頸部にナデによる無文帯を形成する。内面にミガキを施す。

V C (図80—294～296) 294は口縁部が直上し、体部に無節斜行縄文を施す。内面に雑なミガキを施す。295・296は口縁部が内湾し、内面にミガキを施す。295は体部にL R縦走縄文、296はL R斜行縄文を施す。

V D (図78・79—278～280) 施文により2類に細分する。

VD1 口縁部まで条痕文を施すもの。(278・280) 278は内面にミガキを施す。

VD2 口頸部に横位沈線を施すもの。(279) 条痕文を施した後に沈線を施す。内面に雑なミガキを施す。

VE 施文により4類に細分する。(図79—282~293)

VE1 刺突のみもの。(282・283・286) 口縁部は外反し、端部に縄文による刻目を施す。頸部下に横位の刺突列点を施し、口頸部にナデ調整を施す。

VE2 沈線間に刺突を施すもの。(285・288・290・293) 口頸部にナデによる無文帯を形成する。285は口縁部に斜行縄文を施す。287・293は口端部に縄文による刻目を施す。285は内面にナデ調整を施し、290・283はミガキを施す。

VE3 沈線下に刺突を施すもの。(284・289・291・292) 284は口縁部がく字状に外反し、端部に縄文による刻目を施す。頸部下の三条沈線の下に横位の刺突を施す。内面にミガキを施す。289・291・292は口縁部が緩やかに外反する。289は口端部に縄文による刻目を施し、口頸部にナデによる無文帯を形成する。内面にナデ調整を施す。292は口縁部にナデによる無文帯を形成する。291・292は内面にミガキを施す。

VE4 沈線間と沈線下に刺突を施すもの。(287) 口縁部は緩やかに外反し、ナデによる無文帯を形成する。内面にミガキを施す。

VE1~4に施す沈線は、全て棒状工具によるものである。

VF (281) 口縁部が波状をなす、台付深鉢である。体部は膨らみをもって開き、口縁部は内湾する。体部にはLR斜行縄文を施文した後に、入り組文を施す。内面にミガキを施し、口縁部に一条の沈線を施す。台部は台形状をなす。

VI 注口土器(図67—66)

1点のみの出土で、注口部の破片である。屈曲部に隆帯を貼り付け、沈線を施す。磨耗が著しく、調整の詳細は不明だが、ナデ調整の痕跡がみられる。注口部口径は約2.3cmの円形である。

VII その他の出土遺物(図73—188~190)

188は蓋形土器と思われる。屈曲部に眼鏡状の貼り付けをもち、表面に刺突文を施す。189は口縁部に二段の刺突列点文を施し、屈曲部に無節斜行縄文を施す。190は単節斜行縄文を施した後に、鋭角的な沈線を施す。

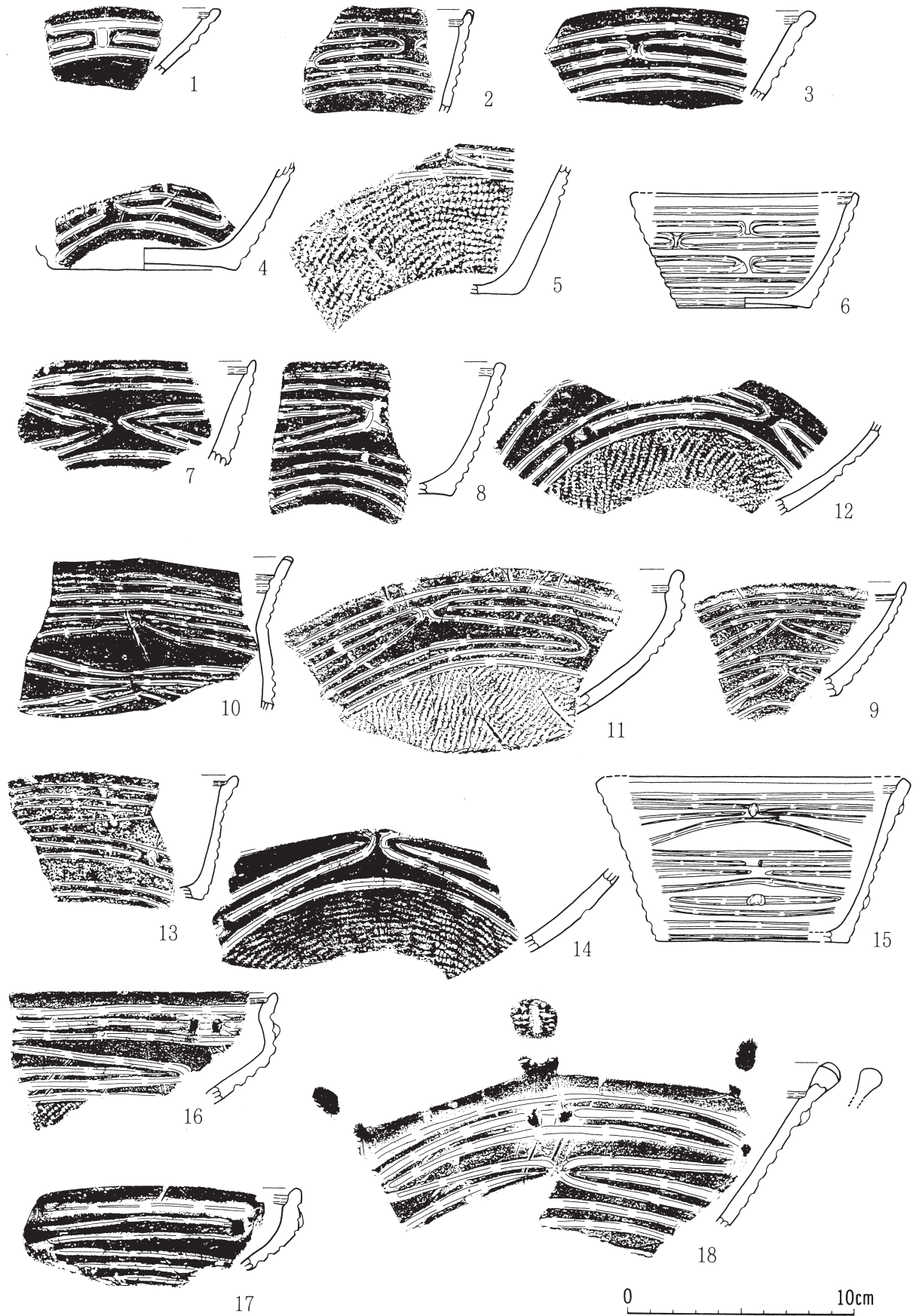


图64 谷出土土器12

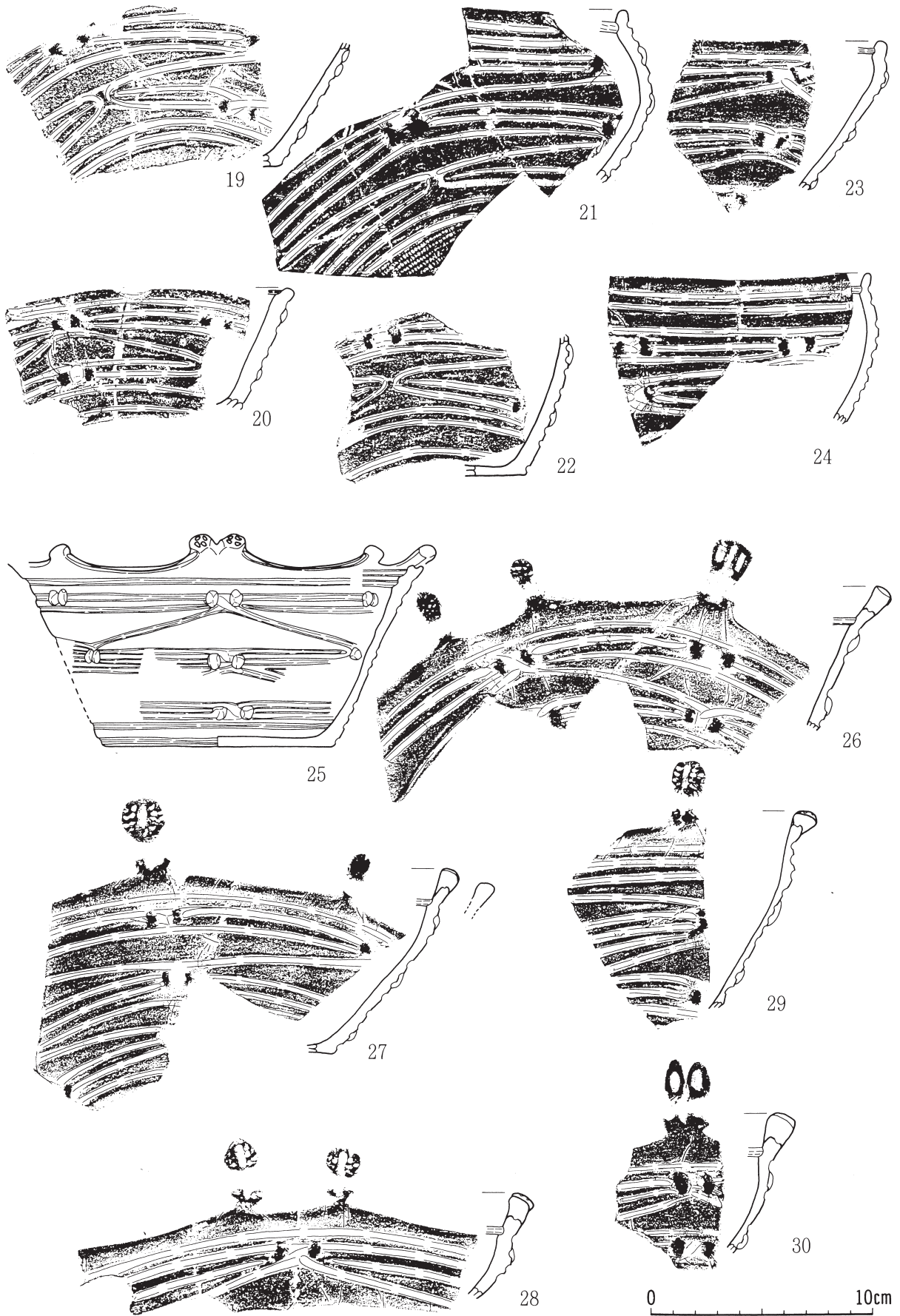


図65 谷出土土器13

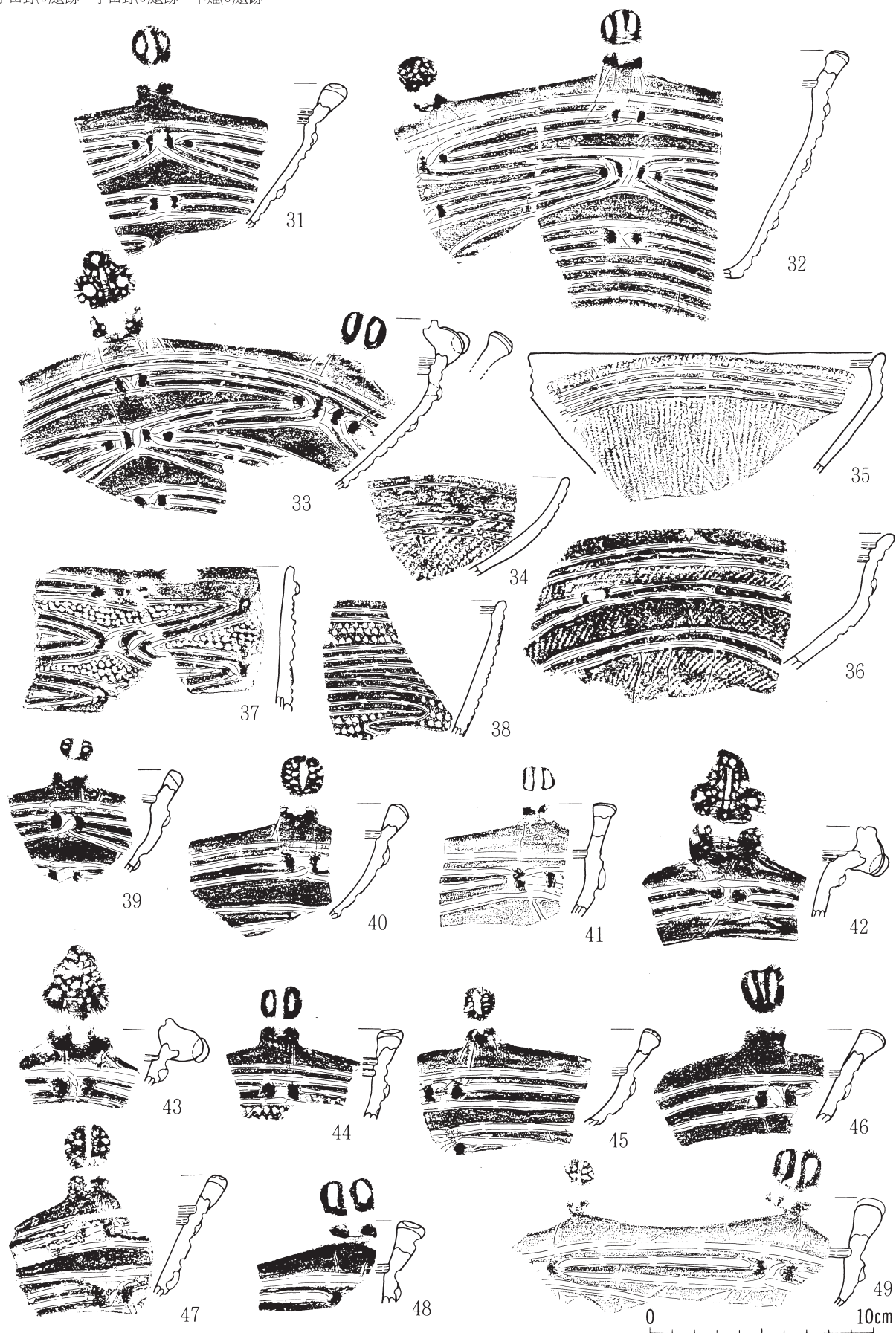


图66 谷出土土器14

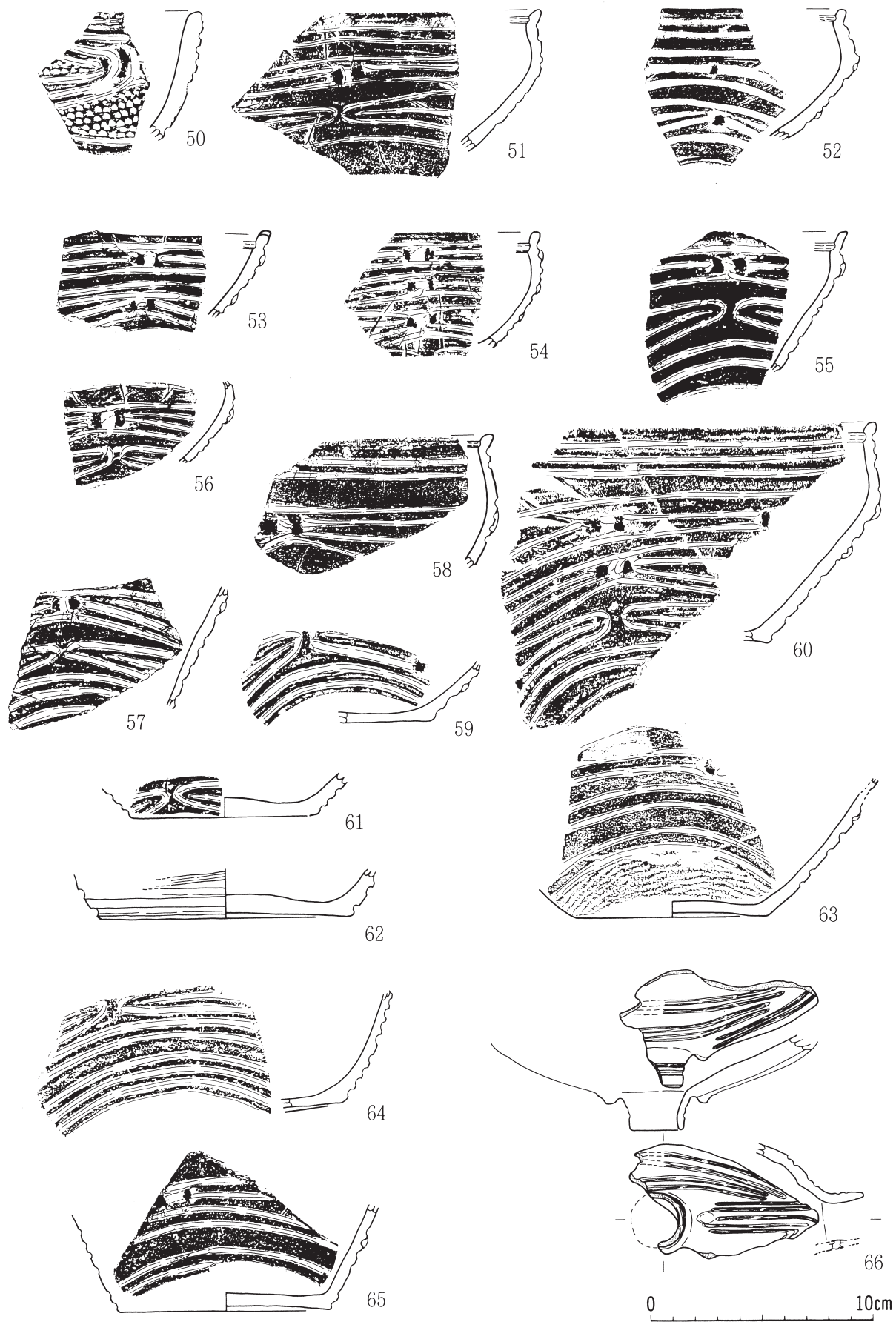


図67 谷出土土器15

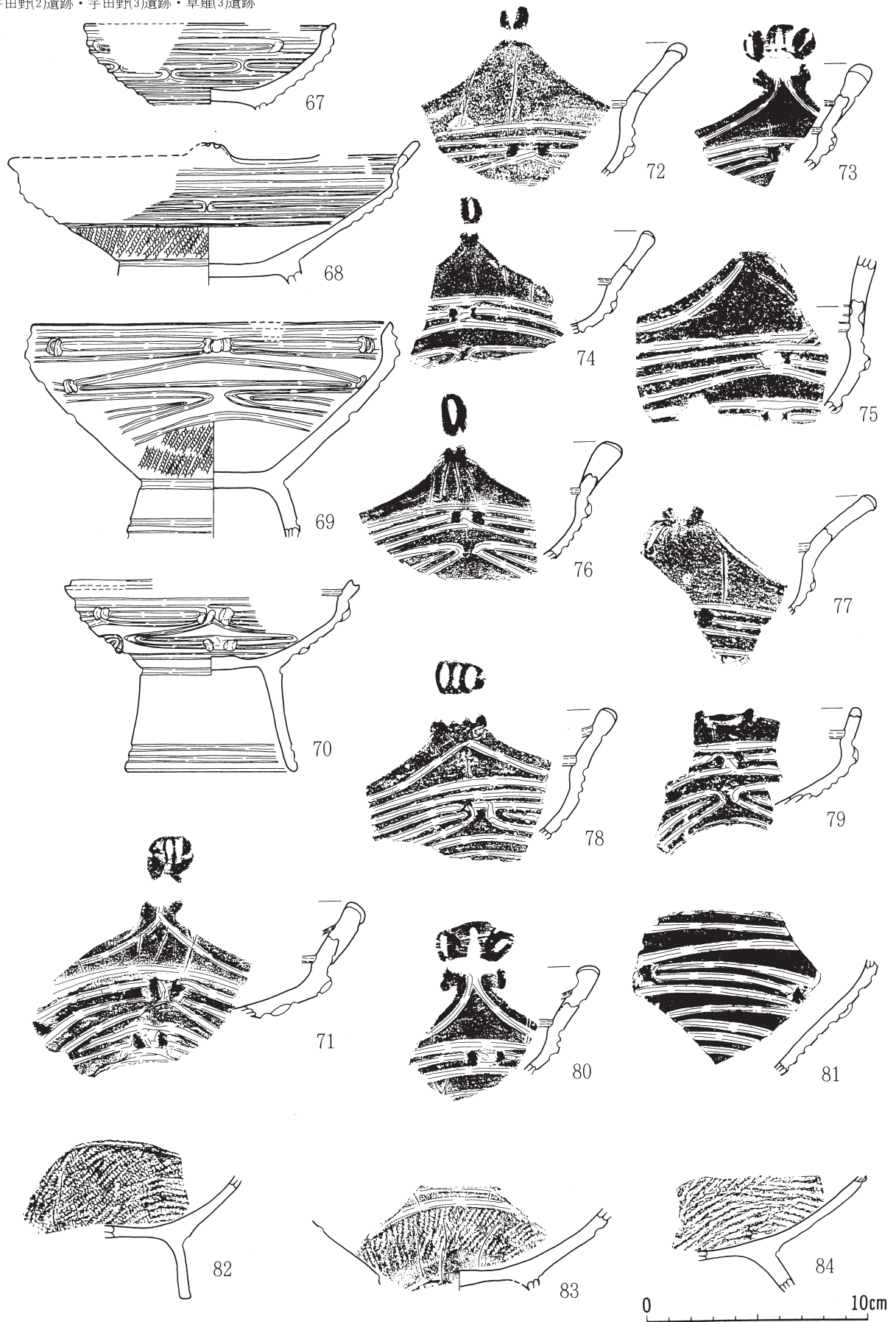


图68 谷出土土器16

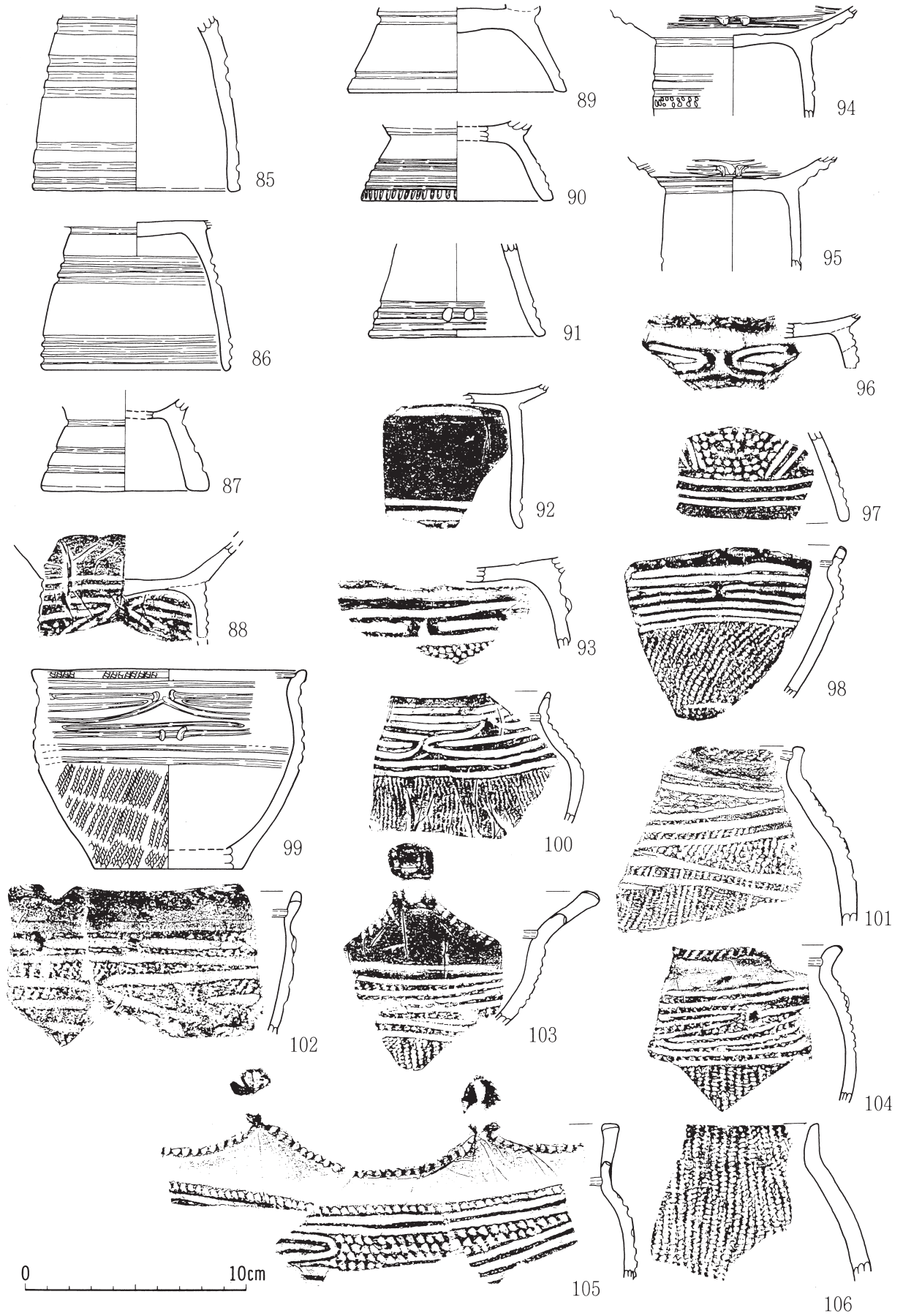


図69 石出土土器17

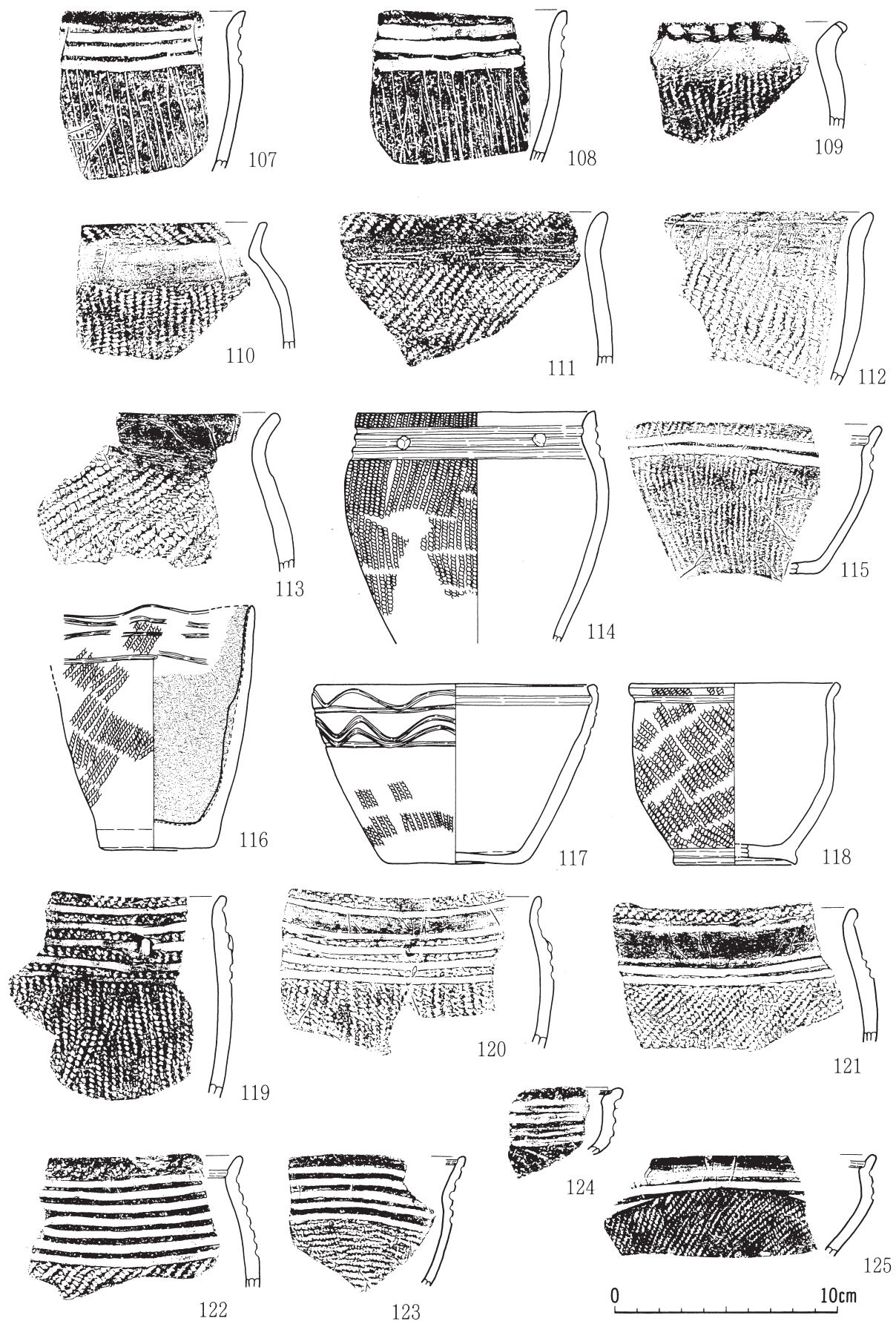


图70 谷出土土器18

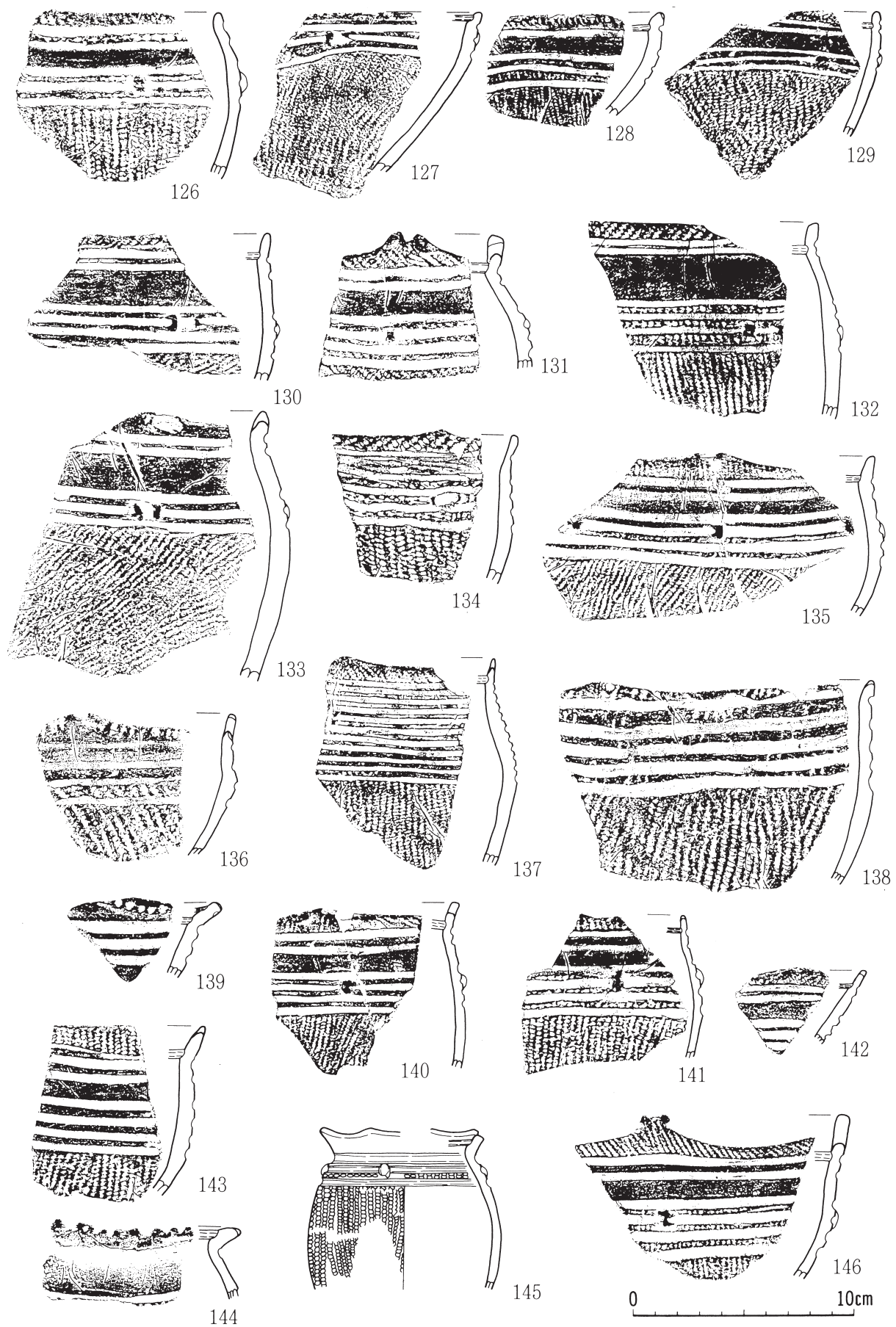


图71 谷出土土器19

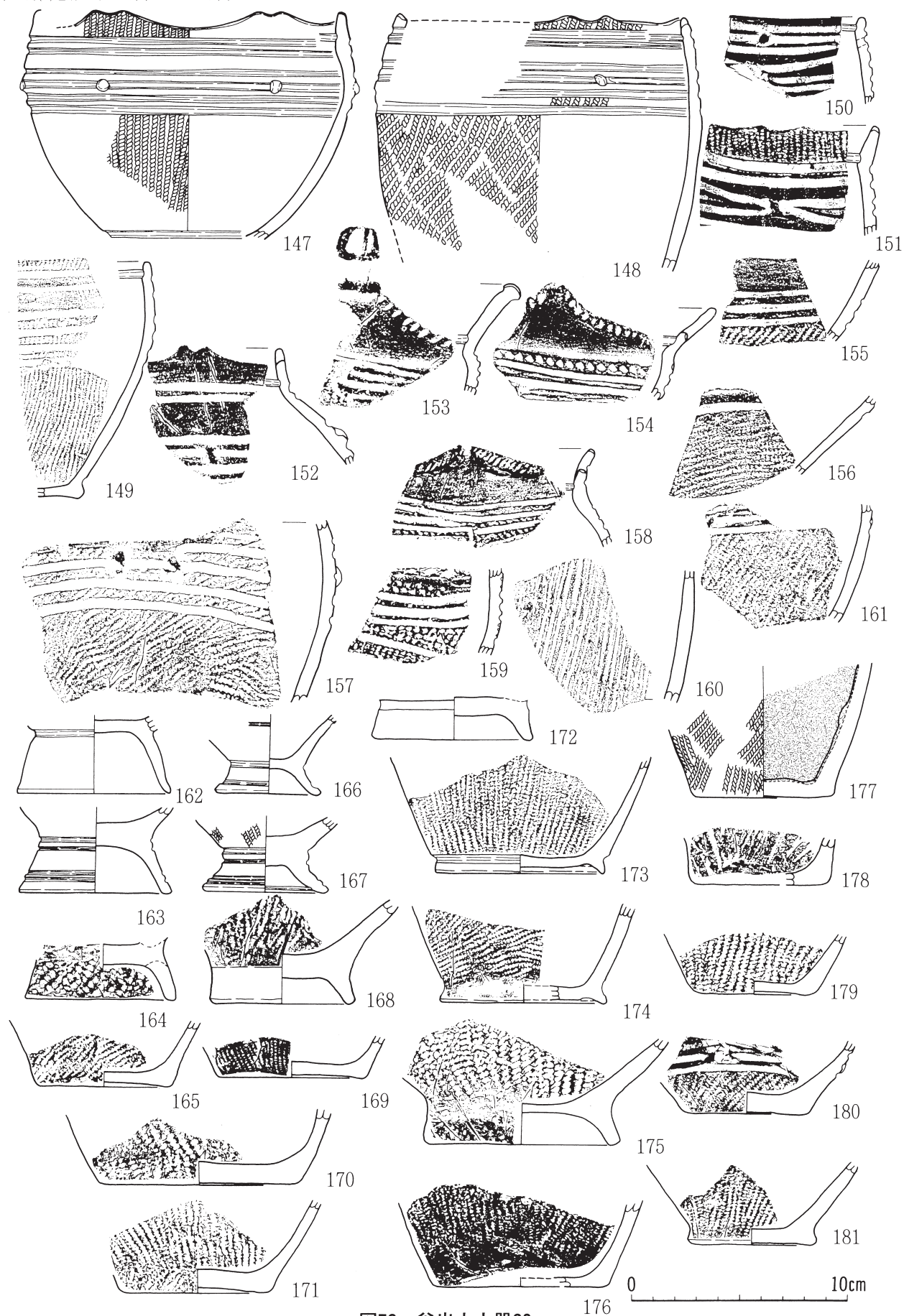


图72 谷出土土器20

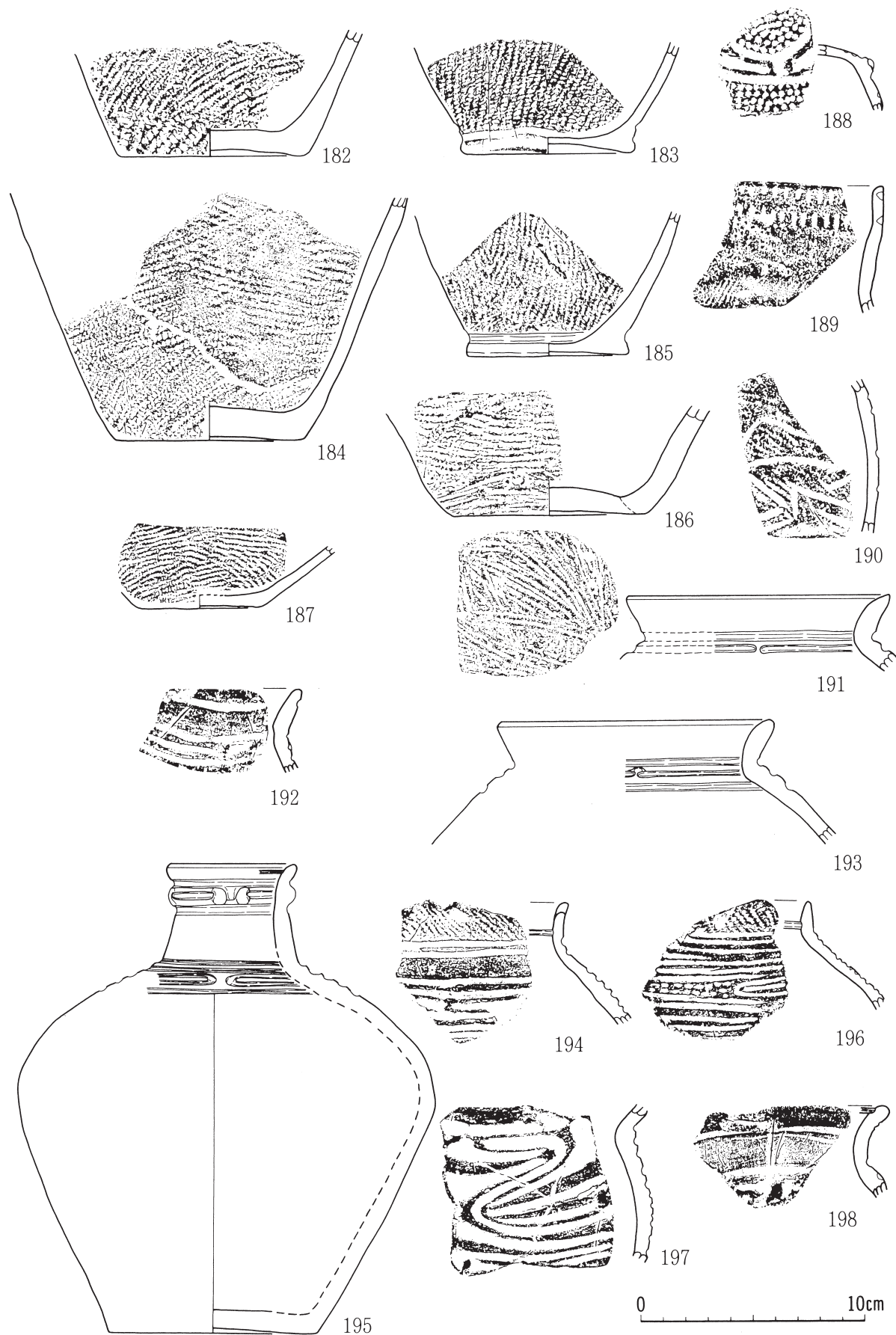


图73 谷出土土器21

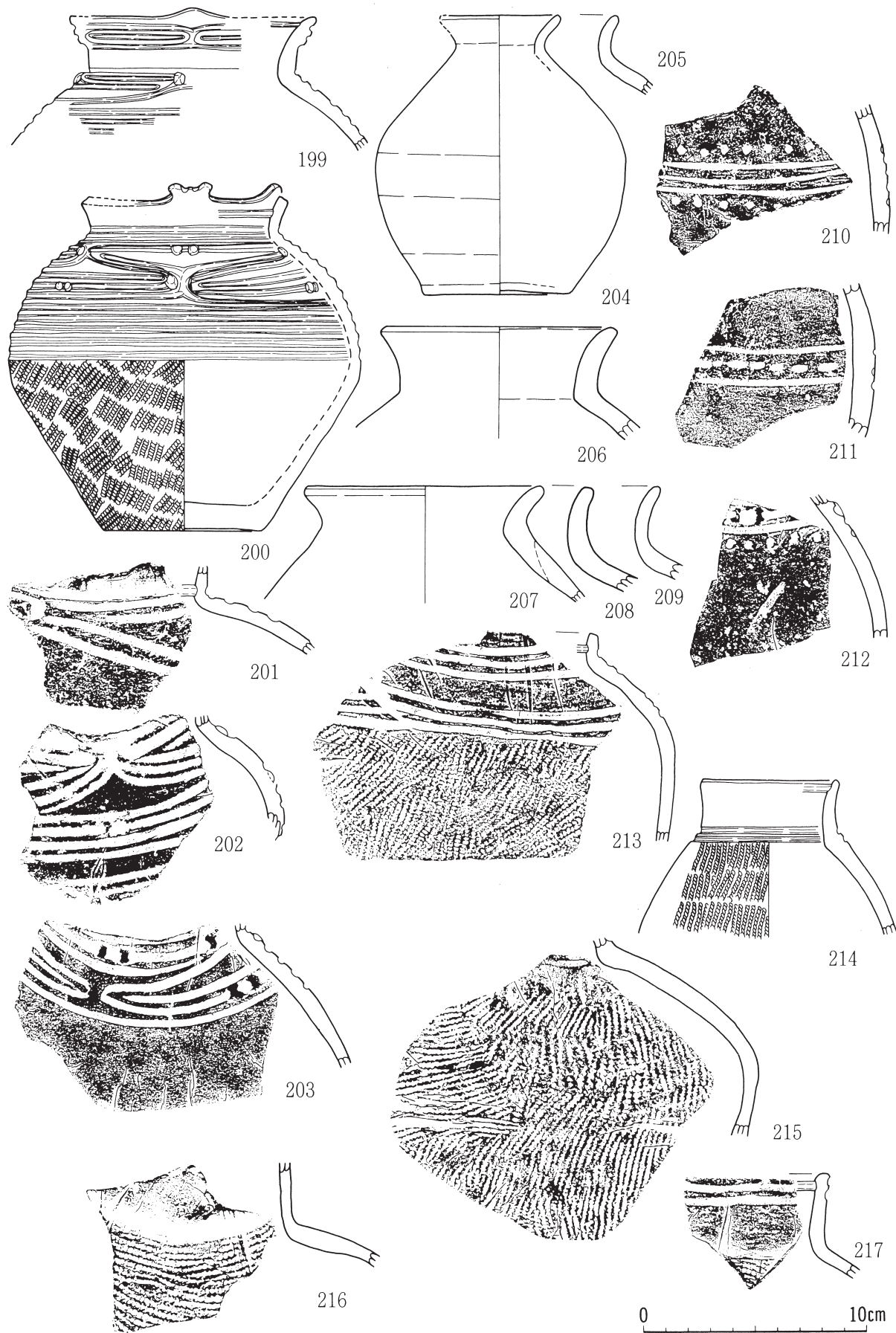


图74 谷出土土器22

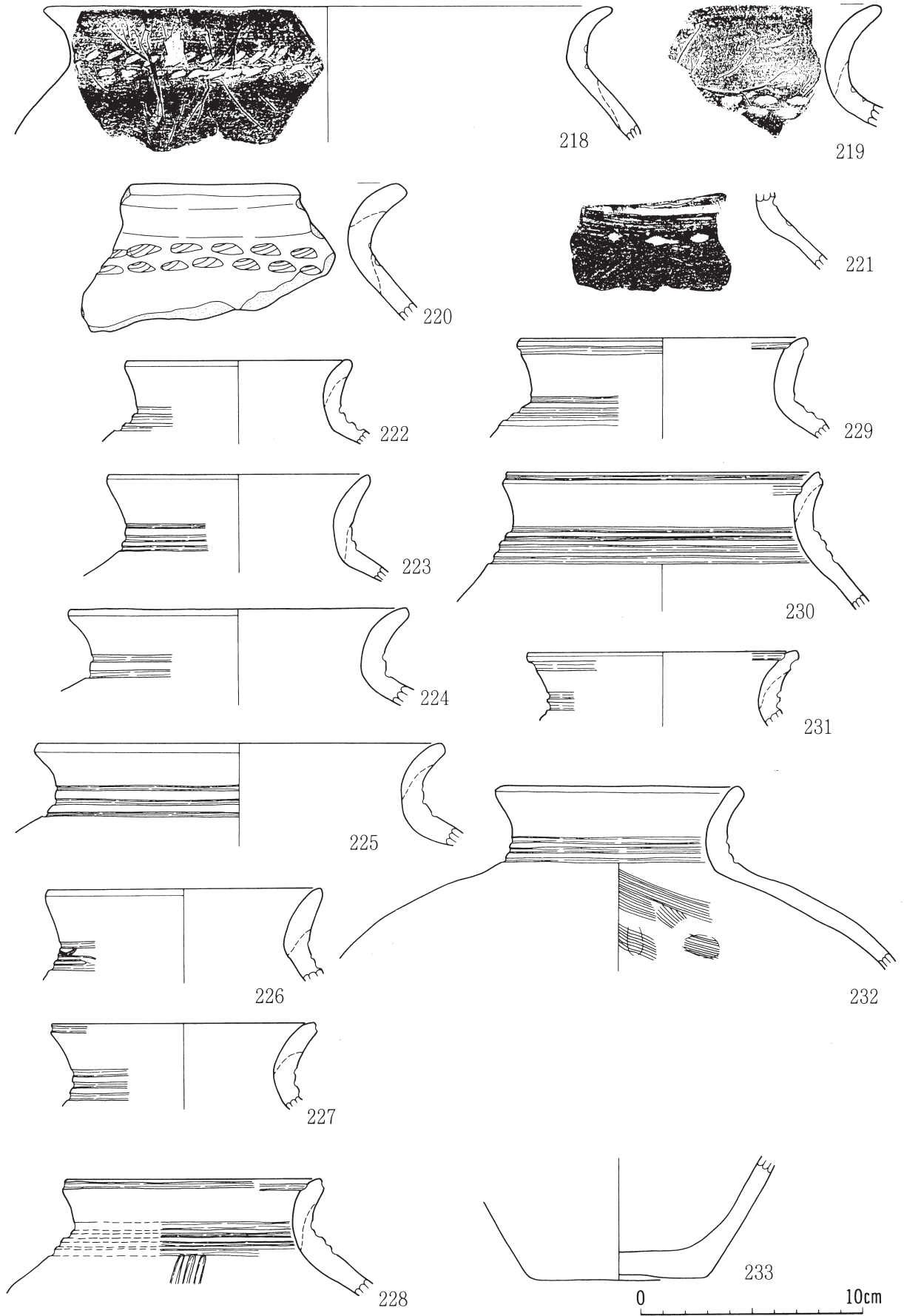


图75 谷出土土器23

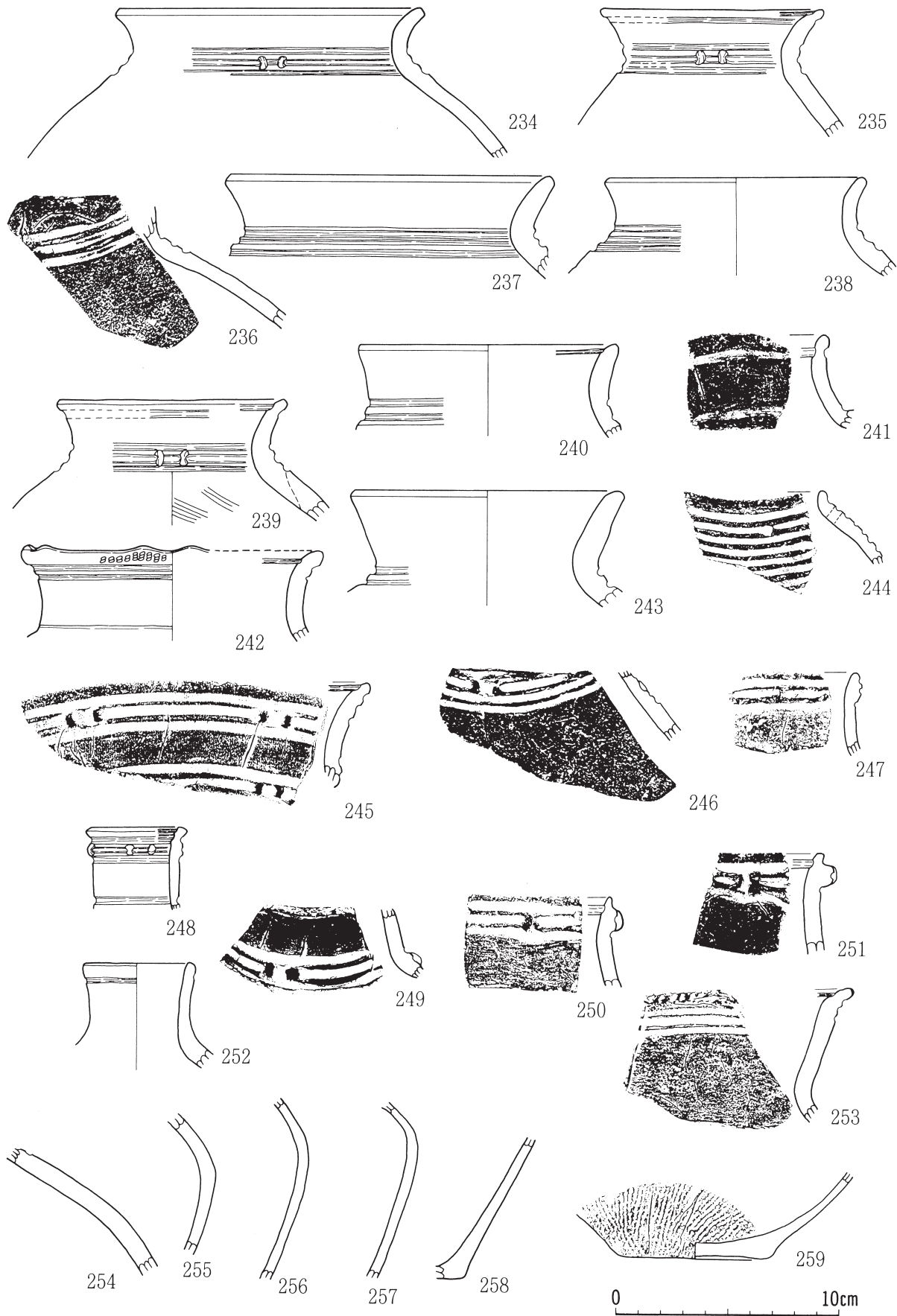


图76 谷出土土器24

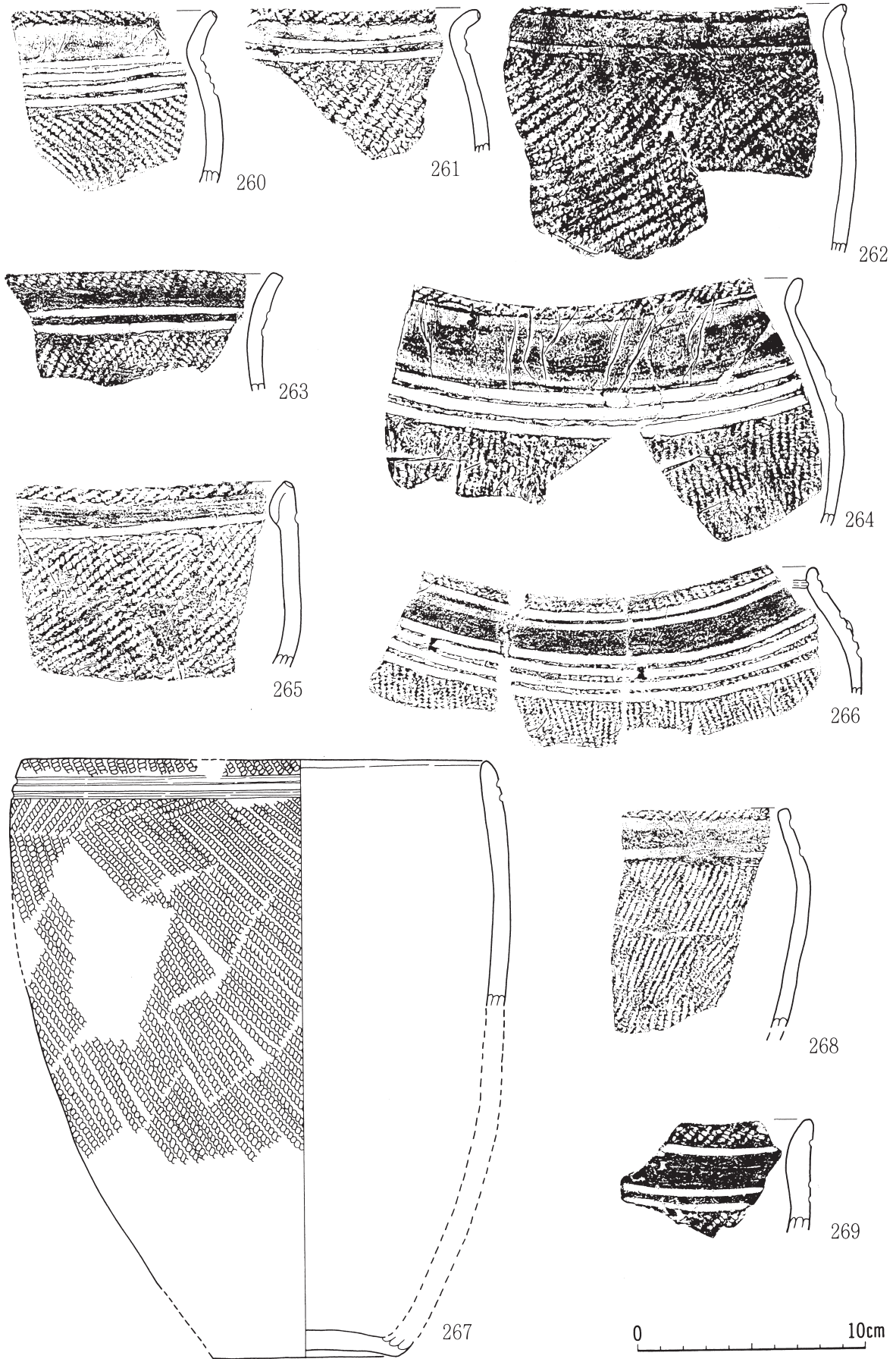


図77 谷出土土器25

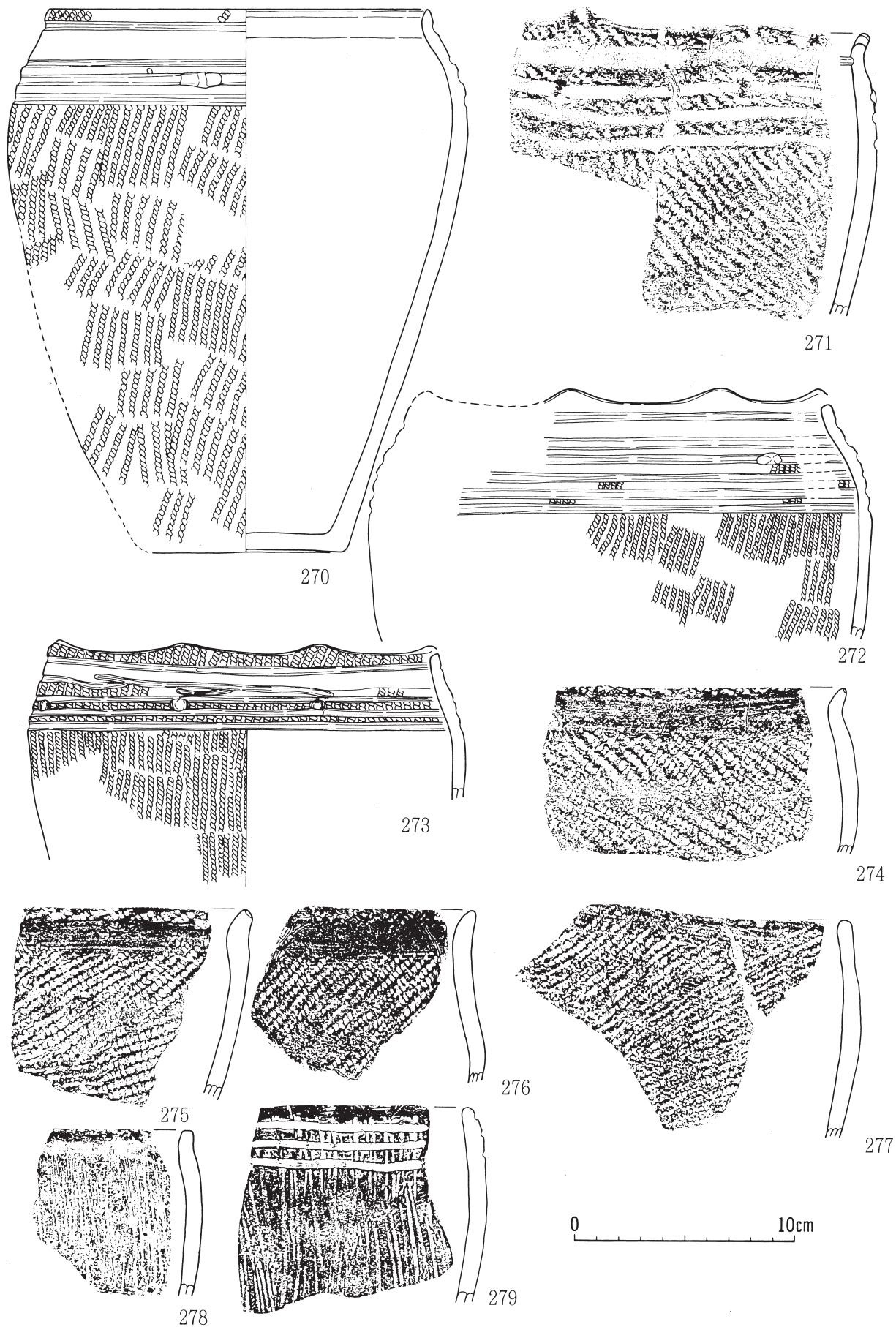


图78 谷出土土器26

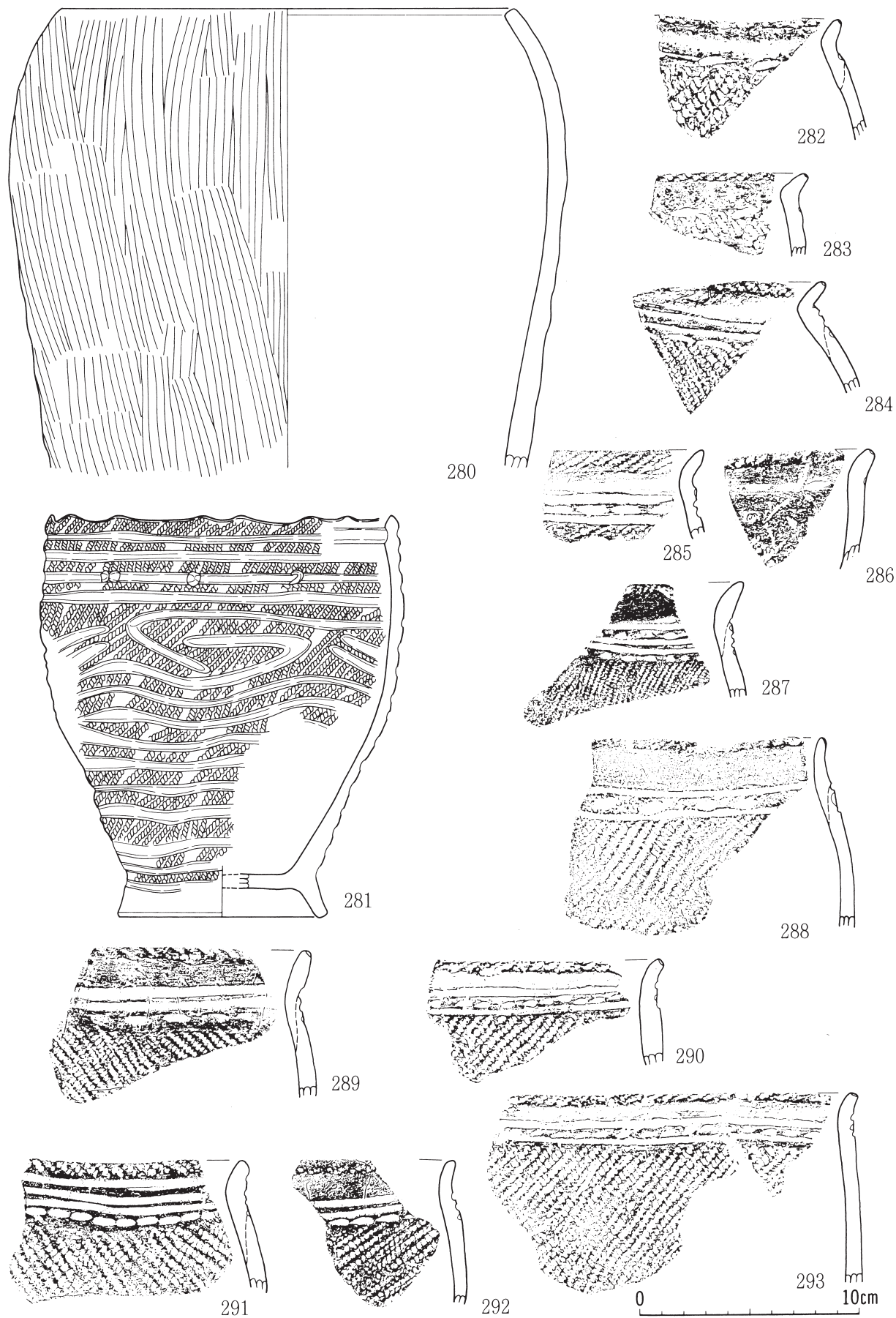


図79 谷出土土器27



图80 谷出土土器 28

平安時代の土器

平安時代の遺物は、土師器4点(図81-1~4)・須恵器3点(図81-5~7)と極めて少なく、居住域からの流れ込みと考えられる。土師器は、口縁部が緩やかに外反する長胴の甕であり、3はその底部である。何れも口縁部に回転ナデ調整を施し、2は口縁端部に沈線を施す。2・3は内面にハケ調整を施す。須恵器は、5・6が壺の口縁部であり、回転ナデ調整を施す。7は甕の胴部であり、表面にタタキ調整の痕跡を残す。

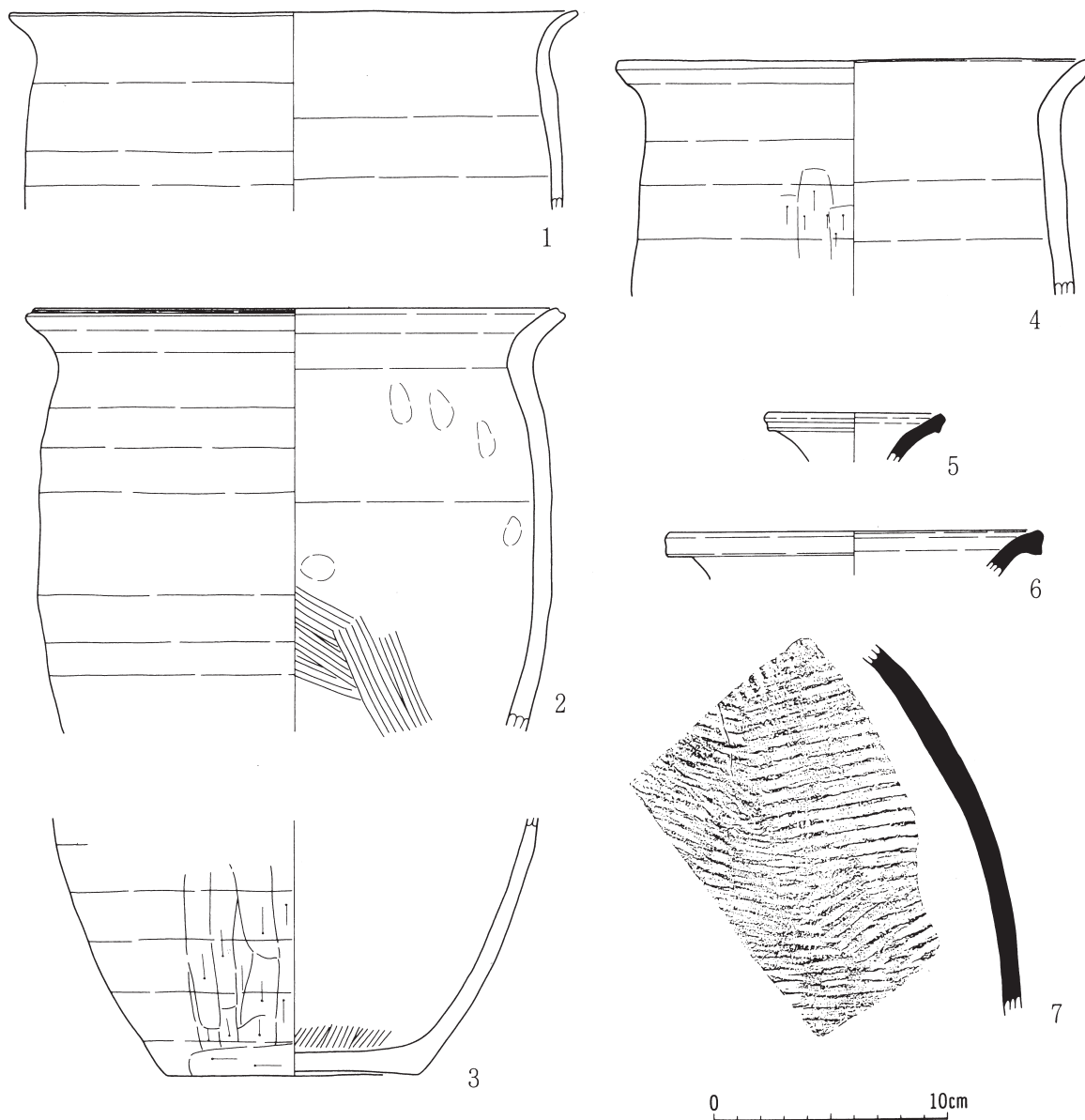


図81 谷出土土器29

図版番号	整理番号	出土地区	種類	外面調整	内面調整	口径 cm	底径 cm	胎土	外面色調	内面色調
図81-1	282	Q-165	土師	回転ナデ、ケズリ		(24.2)		緻密	7.5YR6/6	7.5YR6/6
-2	278	Q-165	土師	回転ナデ	回転ナデ、ハケ	(22.3)		緻密(小石1mmを含む)	7.5YR7/6	10YR7/4
-3	277	Q-165	土師	ケズリ	ハケ		10.7	緻密(小石1mmを含む)	10YR5/2	10YR7/3
-4	283	Q-165	土師	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ、ナデ	(20.2)		雑(小石1mmを含む)	10YR7/4	10YR7/4
-5	295	Q-165	須恵	回転ナデ	回転ナデ	(7.4)		緻密(5YR5/3)	N4/1	N4/1
-6	289	P-165	須恵	回転ナデ	回転ナデ	(15.8)		緻密(N3/1)	N3/1	N3/1
-7	293	Q-165	須恵	平行タタキ	タタキ、ナデ			緻密(5YR5/4)	N3/1	N5/1

(小結)

谷出土土器は、縄文時代早期、前期中葉～中期中葉、晩期終末～弥生時代及び平安時代の4群である。出土総量は段ボール箱約150箱相当を数える。その主体をしめるのは、縄文時代前期中葉～中期中葉、晩期終末～弥生時代の2群である。前者は前期中葉の円筒下層a式、後者は晩期終末～弥生時代前期初頭の砂沢式が中心をしめる。土器はII層から晩期終末～弥生時代、IV層から縄文前期中葉～中期中葉の土器が集中して出土するが、後世の攪乱の影響を強く受け、それらが混在して出土する。谷の北側から縄文時代の住居1基・土坑1基、弥生時代の土坑墓5基が検出されたことから、この時期の集落が谷の周辺に展開したと考えられる。また砂沢式の指標となる砂沢遺跡が本遺跡の北約2kmの地点に位置することから、本遺跡の晩期終末～弥生時代初頭は、砂沢遺跡と周辺諸遺跡との関係を考慮して、その位置付けを考えなければならない。ここでは、砂沢式の設定を「大洞A'細分型式の新段階並行」(工藤竹久 1987)とする。これに従えば、大洞A'式古段階土器として図64—10—12・14、図80—294—296が相当する。また、縄文晩期終末～弥生時代の土器を考えるうえで、西日本からの影響を受けた遠賀川系土器を考えなければならない。現在、遠賀川系土器の概念は亀ヶ岡式に系譜を持たない土器とされる。この特徴については(佐原 1986)(工藤 1987)を参考にする。また亀ヶ岡式と遠賀川式の特徴を併せ持った土器を折衷土器とすることがあるが、ここでは、それらを含めて遠賀川系土器とする。本遺跡からは、壺と甕の二器種に限定されて出土した。IV A 1 (191・193)・E 1 a (222～235・243)・1 b (237～240)・F 1 a (207)・2 (204)・H (218～221)・I (210～212)、V A 1 a (260～263)・B 1 (274～276)・E 1～4 (282～293)がこれにあたる。特徴はa口縁部の外反 b口頸部へのナデ調整 c頸部への数条の横位沈線 d頸部への列点文 e胴部への横位沈線と列点文 fハケ調整 g粗粒砂の混入 h広口壺の形成がみられる。土器の接合は、縄文土器の特徴である内傾接合でなされており、遠賀川式土器の特徴とされる外傾接合はみられない。今後、遠賀川系土器を考える際に、接合面も含めて考えなければならない。これは長時間継続された縄文の伝統に進入する弥生文化の内的要素の1つと言える。

(野村 信生)

表4 谷出土土器観察表(縄文前期中葉～中期中葉)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文	文様	内面調整	胎土	外面色調	備考
図51-1	337	Q-162	A1	RL単節斜		ミガキ	雑	10YR7/4	
-2	320	Q-163	A1	RL単節斜		ミガキ	雑	10YR6/3	
-3	317	Q-166	A1	RL単節斜		ミガキ	雑	7.5YR5/3	
-4	339	Q-165	A1	LR単節斜		ミガキ	雑	10YR7/4	
-5	372	P-162	A1	RL単節斜		ミガキ	雑	7.5YR5/4	
-6	383	P-162	A1	RL単節斜		ミガキ	雑	10YR7/4	底部外面縄文
図52-7	298	P-163	A2	RL単節斜、側面押圧		ミガキ	雑	10YR7/2	
-8	305	P-161	A2	RL単節斜			雑	10YR5/3	
-9	311	R-162	A2	RL単節斜			雑	10YR3/1	
-10	304	P-162	A2	RL単節縦			雑	10YR6/2	
-11	322	Q-163	A2	LRL斜、押圧		ミガキ	雑	10YR8/2	
-12	312	Q-163	A2	RLR斜、指頭押圧			雑	10YR7/2	
-13	338	P-163	A2	RLR斜			雑	10YR7/2	
-14	378	Q-165	A2	RLR斜		ミガキ	雑	7.5YR5/4	
-15	306	Q-164	A2	結条第1種、指頭押圧		ミガキ	雑	7.5YR6/4	
-16	365	P-162	A2	単軸終条体1類		ミガキ	雑	10YR6/3	
-17	307	P-162	A2	単軸終条体1類		ミガキ	雑	7.5YR6/4	
-18	375	P-162	A2	単軸終条体1類		ミガキ	雑	7.5YR6/4	底部外面縄文
図53-19	336	P-161	A3	刻目、結節、RLR斜		ミガキ	雑	7.5YR5/3	
-20	369	P-163	A3	結節、RLR縦		ミガキ	雑	10YR5/4	
-21	370	P-163	A3	結節、RLR斜			雑	7.5YR6/4	
-22	342	P-162	A3	結節		ミガキ	雑	10YR4/2	
-23	371	P-162	A3	結節、RL単節斜		ミガキ	雑	10YR7/4	
-24	313	Q-163	A5	結節、指頭押圧、RL単節斜、沈線		ミガキ	雑	10YR7/4	穿孔痕あり
-25	316	Q-163	A5	結節、指頭押圧、RL単節斜、沈線		ミガキ	雑	10YR6/3	
-26	366	Q-163	A5	RL単節斜、沈線		ミガキ	雑	10YR6/2	
-27	310	Q-165	A5	単軸終条体1類、沈線		ミガキ	雑	7.5YR5/3	
-28	335	R-168	A5	RL単節斜、沈線			雑	7.5YR4/3	
-29	325	Q-167	A5	単軸終条体1類、沈線		ミガキ	雑	7.5YR5/4	
図54-30	299	P-161	A4	結節、RLR斜		ミガキ	雑	10YR7/4	
-31	309	Q-163	A4	結節		ミガキ	雑	10YR4/2	
-32	321	Q-164	A4	結節、RL単節斜			雑	10YR6/2	
-33	341	P-162	A4	結節			雑	10YR6/3	
-34	301	O-162	A4	結節、指頭押圧			雑	5YR6/6	
-35	315	Q-164	A4	結節、結節		ミガキ	雑	10YR6/7	
-36	343	P-162	A4	結節、指頭押圧、結節		ミガキ	雑	7.5YR6/6	
-37	302	O-161	A4	結節、爪形文、RLR斜			雑	7.5YR5/4	
-38	318	Q-164	A4	結節		ミガキ	雑	7.5YR5/3	
-39	319	Q-167	A4	結節、指頭押圧、RL単節斜			雑	7.5YR6/4	穿孔痕あり
図55-40	345	Q-163	A6	条痕、LRL斜		ミガキ	雑	10YR7/3	
-41	344	Q-165	A4	結節、RL単節、結節			雑	7.5YR5/4	
-42	300	R-167	A4	結節、結節		ミガキ	雑	10YR7/4	
-43	368	P-163	A4	結節、指頭押圧、結節		ミガキ	雑	10YR7/3	
図56-44	374	P-161	A4	結節、結節		ミガキ	雑	10YR7/3	
-45	367	P-162	A4	結節、RL単節斜			雑	10YR7/3	
図57-46	303	Q-164		RL単節斜		ミガキ	雑	10YR4/3	
-47	324	P-162		RL単節斜、条痕文		ナ	雑	10YR6/4	
-48	346	P-162		直前段反燃		ナ	雑	10YR7/2	50、51と同一個体
-49	327	P-162		RL単節斜		ミガキ	雑	10YR7/3	
-50	352	P-162		直前段反燃		ナ	雑	10YR7/3	48、51と同一個体
-51	349	P-162		直前段反燃		ナ	雑	10YR6/3	48、50と同一個体
-52	358	P-166		RLR縦		ミガキ	雑	10YR4/3	
-53	355	P-161		RLR斜			雑	10YR7/4	
-54	363	Q-167		単軸終条体1類			雑	10YR8/3	
図58-55	323	Q-166		単軸終条体1類		ミガキ	雑	7.5YR7/6	
-56	347	Q-163		RL単節縦		ミガキ	雑	10YR5/3	
-57	348	Q-164		単軸終条体1類		ミガキ	雑	10YR7/1	
-58	351	Q-165		単軸終条体1類		ミガキ	雑	10YR6/3	
-59	353	P-162		単軸終条体1類			雑	10YR7/4	
-60	354	Q-165		RL単節縦		ミガキ	雑	7.5YR5/4	
-61	356	P-161		単軸終条体1類		貝殻条痕	雑	10YR7/4	
-62	357	Q-162		単軸終条体1類		ナ	雑	10YR7/3	
-63	359	P-162		単軸終条体1類		ナ	雑	10YR6/4	
-64	329	P-167	A5	単軸終条体1類		ミガキ	雑	7.5YR5/4	29と同一個体
図59-65	361	P-162		RL単節斜		ミガキ	雑	10YR7/4	底部外面縄文
-66	377	P-162		結節			雑	10YR7/4	底部外面縄文
-67	376	P-163		RL単節斜		ミガキ	雑	10YR7/3	
-68	360	P-162		RL単節斜、条痕文			雑	10YR7/4	底部外面縄文
-69	333	P-163					雑	10YR5/3	底部外面条痕文
図60-70	373	Q-165	B	縄文側面押圧、LR単節斜		ミガキ	雑	5YR4/4	
-71	334	R-168	B	縄文側面押圧、LR単節斜		ミガキ	雑	7.5YR4/4	
-72	308	Q-164	C	爪形文R無節			雑	7.5YR3/3	
-73	331	N-159	D	RL単節斜		ミガキ	雑	10YR6/3	穿孔痕あり
-74	314	Q-167	D				雑	7.5YR6/6	穿孔痕あり
-75	340	P-164	D	RL単節斜		ミガキ	雑	10YR7/4	
-76	364	R-164	D	刻目、RL単節斜		ナ	雑	10YR6/4	内面指頭上痕あり
-77	332	P-165	D				雑	10YR7/4	内面指頭上痕あり
-78	350	Q-166	D	RL単節斜		ナ	雑	7.5YR7/4	

表 4 谷出土土器観察表 (縄文晩期～弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文	文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台盤部径(cm)	台高(cm)	沈線幅(mm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
図64-1	185	R-164	IA1	工字文(I型)		〃 方 卩						3.5	緻密	10YR6/4	10YR4/1	
	149	Q-163	IA2	工字文(III型)		〃 方 卩	(10.0)					3	緻密	7.5YR5/3	10YR5/2	
	192	Q-165	IA2	工字文(III型)		〃 方 卩	(16.4)					3~4	緻密	10YR3/1	10YR3/1	
	98	R-166	IA2	工字文(III型)		〃 方 卩		8.1				3~4	雑	10YR3/1	10YR3/1	
	241	Q-164	IA2	工字文(III型)、L R斜行縄文		〃 方 卩		(8.2)				3	雑	10YR3/1	10YR4/1	
	268	P-162	IA2	工字文(III型)		〃 方 卩	(9.7)	(5.8)	5.0			2.5~3	緻密	7.5YR8/4	7.5YR6/4	
	127	Q-166	IB1a	変形工字文(I型)		〃 方 卩	(11.2)					2	緻密	10YR5/3	10YR6/3	
	194	Q-167	IB1a	変形工字文(I型)		〃 方 卩	(13.2)	(7.4)	6.0			2.5	緻密	10YR5/3	10YR3/2	
	130	Q-164	IB1b	変形工字文(I型)		〃 方 卩	(12.9)					2~3	緻密	7.5YR5/4	7.5YR5/4	
	233	Q-162	IB1d	変形工字文(I型)		〃 方 卩	(16.4)					2~3	緻密	10YR2/1	10YR2/1	
188	Q-163	IB1c	変形工字文(I型)、L R斜行縄文		〃 方 卩						2~3	緻密	10YR2/1	10YR2/1		
134	Q-163	IB2a	変形工字文(II型)、L R横行縄文		〃 方 卩						3.5	雑	10YR3/1	10YR3/1		
266	R-167	IB2b	変形工字文(II型)		〃 方 卩	(10.4)	(9.0)			5.4	2	緻密	10YR8/3	10YR4/1		
133	R-166	IB2a	変形工字文(I型)、L R斜行縄文		〃 方 卩	(17.5)					2.5~3	雑	7.5YR5/4	7.5YR5/4		
271	R-167	IB3	変形工字文(III型)		〃 方 卩	(13.4)	(8.4)	7.2					緻密	10YR8/1	10YR7/2	
91	R-166	IB4	変形工字文(IV型)、L R斜行縄文		〃 方 卩	(20.0)					3	雑	10YR4/1	10YR3/1		
219	Q-165	IB4	変形工字文(IV型)		〃 方 卩	(24.8)					2~2.5	緻密	5YR6/6	5YR6/6		
177	R-165	IB5	変形工字文(V型)		〃 方 卩	(25.0)					2.5~4.5	緻密	7.5YR6/6	7.5YR7/4		
図65-19	44	R-165	IB6a	変形工字文(VI型)		〃 方 卩	(15.0)				(8.3)	4	緻密	7.5YR6/4	7.5YR4/6	
	270	R-165	IB6a	変形工字文(VI型)		〃 方 卩	(15.0)					3	緻密	10YR7/4	10YR7/4	
	172	P-163	IB6c	変形工字文(VI型)、R L横位		〃 方 卩						3	緻密	10YR8/2	10YR8/1	
	104	Q-163	IB6b	変形工字文(VI型)		〃 方 卩						2.5~3.5	緻密	7.5YR6/4	10YR8/3	
	234	Q-163	IB7b	変形工字文(VII型)		〃 方 卩	(17.0)					2.5~3	緻密	10YR7/2	10YR7/3	
	145	Q-163	IB7c	変形工字文(VII型)		〃 方 卩	(14.0)					3~3.5	緻密	7.5YR7/4	10YR4/1	
	30	R-167	IB7a	変形工字文(VII型)		〃 方 卩	18.5	10.4	9.5			3	緻密	10YR7/4	10YR8/4	
	94	Q-167	IB7a	変形工字文(VII型)		〃 方 卩	(17.4)					3~4	緻密	10YR8/3	10YR8/3	
	80	R-166	IB7b	変形工字文(VII型)		〃 方 卩	(21.0)					2.5~4	緻密	7.5YR6/4	7.5YR6/4	
	273	R-165	IB7b	変形工字文(VII型)		〃 方 卩	(21.4)					4	緻密	7.5YR6/6	7.5YR5/6	
274	Q-163	IB7b	変形工字文(VII型)		〃 方 卩						3.5	緻密	5YR6/6	5YR6/6		
102	R-166		変形工字文		〃 方 卩						2.5~3.5	緻密	7.5YR8/4	7.5YR7/4		
図66-31	256	Q-162	IB8	変形工字文(VIII型)		〃 方 卩						3	緻密	10YR7/2	10YR6/4	
	251	Q-168	IB8	変形工字文(VIII型)		〃 方 卩	(21.0)	(9.5)	10.0			3	緻密	7.5YR8/4	7.5YR8/4	
	250	P-162	IB8	変形工字文(VIII型)		〃 方 卩	(18.0)					2~3	緻密	10YR5/1	10YR5/2	穿孔痕あり
	391	Q-162	IC1	横位沈線、L R斜行縄文		ナ 卩	(12.5)					1~1.5	緻密	10YR4/1	10YR5/2	
	100	Q-167	IC2	横位沈線、R L斜行縄文		〃 方 卩	(15.8)					2.5~4	緻密	10YR7/4	17.5YR6/4	
	61	Q-162	IC2	横位沈線、L R斜行縄文		〃 方 卩	(19.8)					2.5~3	緻密	10YR7/2	10YR7/2	
	110	Q-165	ID1	波状工字文、刺突文		〃 方 卩	(16.0)					2.5	緻密	10YR6/2	10YR7/2	
	55	Q-163	ID2	波状工字文、刺突文		〃 方 卩						2	緻密	10YR6/3	10YR6/2	
	82	R-164		変形工字文		〃 方 卩						2.5~3	緻密	10YR7/3	10YR7/3	
	101	R-166		変形工字文		〃 方 卩						3	緻密	7.5YR6/4	7.5YR6/4	

表4 谷出土土器観察表(縄文晩期~弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文	文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台高(cm)	台径部径(cm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
-41	115	R-165		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 7/4	7.5YR 6/4	
-42	164	P-165		沈線		≡ 方 卍						緻密	10YR 5/2	10YR 5/2	
-43	165	Q-168		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 8/2	10YR 7/2	
-44	179	Q-165		沈線、刺突文		≡ 方 卍						緻密	10YR 7/2	10YR 7/3	
-45	203	R-165		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6	
-46	213	R-164		沈線		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 5/4	7.5YR 6/6	
-47	252	Q-164		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 8/4	10YR 7/3	
-48	180	R-165		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 6/4	7.5YR 6/4	
-49	176	Q-163		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	5YR 6/4	5YR 5/4	
図67-50	87	R-166	ID 2	波状工字文、刺突文								緻密	10YR 8/3	10YR 7/3	
-51	93	Q-166		変形工字文		ナ ㄥ	(12.2)					緻密	7.5YR 7/4	10YR 8/3	
-52	99	Q-168		変形工字文		≡ 方 卍	(11.6)					緻密	10YR 6/3	10YR 3/2	
-53	92	R-165		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 3/1	10YR 3/1	
-54	153	Q-165		変形工字文		≡ 方 卍	(11.2)					緻密	10YR 4/1	10YR 7/2	
-55	191	R-166		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 6/3	10YR 3/2	
-56	139	R-163		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 6/4	7.5YR 5/4	
-57	156	Q-164		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 6/4	7.5YR 5/3	
-58	189	R-168		変形工字文		≡ 方 卍	(14.6)					緻密	10YR 3/2	10YR 5/2	
-59	269	Q-163		変形工字文		≡ 方 卍		(10.2)				雑	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6	
-60	275	R-164		変形工字文		≡ 方 卍	(17.6)					雑	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6	
-61	47	R-164		変形工字文		≡ 方 卍		(8.3)				緻密	10YR 4/1	10YR 7/2	
-62	272	R-164		沈線		≡ 方 卍		10.5				緻密	7.5YR 5/6	10YR 6/6	
-63	382	P-162		変形工字文、L R斜行縄文		≡ 方 卍		8.6				緻密	10YR 5/3	10YR 7/4	スス状炭化物付着
-64	265	Q-164		変形工字文		≡ 方 卍		(9.0)				緻密	10YR 8/3	10YR 7/2	
-65	120	R-165		変形工字文		≡ 方 卍		(9.3)				緻密	10YR 7/2	10YR 7/3	
-66	247	P-163	VI	沈線		ナ ㄥ	2.4					雑	10YR 8/3	10YR 2/2	口径注口部
図68-67	28	R-167	IIA 1	工字文(I型)		≡ 方 卍	(10.2)	4.8				雑	10YR 4/2	10YR 6/3	
-68	27	Q-162	IIA 2	工字文(III型)、L R斜行縄文		≡ 方 卍	(17.7)	8.1				緻密	10YR 4/2	10YR 6/3	
-69	43	Q-165	II B 2	変形工字文(IX型)、L R斜行縄文		横 ≡ 方 卍	(16.2)	6.6				雑	10YR 4/2	10YR 3/2	
-70	25	Q-168	II B 1	変形工字文(VI型)		≡ 方 卍	(12.6)	6.3	8.6	(7.5)		緻密	10YR 4/2	10YR 6/3	
-71	113	R-165	II B 1	変形工字文(VI型)		ナ ㄥ						緻密	10YR 8/3	10YR 8/3	
-72	97	R-166		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 9/4	7.5YR 6/4	
-73	258	P-163		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 7/3	10YR 7/3	
-74	166	Q-163		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 3/1	10YR 3/1	
-75	261	P-165		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 7/2	10YR 7/2	
-76	202	R-166		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 7/4	7.5YR 6/4	
-77	254	R-163		沈線		≡ 方 卍						緻密	7.5YR 7/6	7.5YR 6/6	
-78	170	Q-163		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 6/4	10YR 7/3	
-79	171	Q-165		変形工字文		≡ 方 卍						緻密	10YR 8/4	10YR 8/3	
-80	167	Q-163		沈線		≡ 方 卍						緻密	10YR 6/2	10YR 5/2	

表 4 谷出土土器観察表 (縄文晩期～弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台盤直径(cm)	台高(cm)	枕縁幅(mm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
-81	224	Q-165		変形工字文	≡ ガキ						3~3.5	緻密	10YR 6/3	10YR 3/1	
-82	106	R-166		横位沈線、L R斜行縄文	≡ ガキ	(7.0)					5	緻密	10YR 3/1	10YR 3/1	
-83	74	Q-164		沈線、L R斜行縄文	≡ ガキ	(7.3)					4	緻密	10YR 5/1	10YR 6/1	
-84	225	P-165		沈線、L R横位縄文	≡ ガキ	(7.8)					2	緻密	5YR 6/6	5YR 5/4	
図69-85	131	P-165		横位沈線	≡ ガキ				(8.8)	8.3	3~5	緻密	10YR 7/3	10YR 5/2	
-86	29	N-160		横位沈線	ナ デ				(8.3)	6.7	3~4	緻密	10YR 7/3	10YR 7/3	
-87	138	Q-165		横位沈線					(7.5)	3.2	2~3	緻密	10YR 8/2	10YR 8/3	
-88	245	Q-164		変形工字文、刺突文	ナ デ							雑	10YR 7/4	10YR 6/2	
-89	26	R-167		横位沈線	≡ ガキ	7.4			9.4	3.6	4	緻密	7.5YR 7/4	7.5YR 7/4	
-90	135	Q-164		横位沈線、刻目	≡ ガキ	(6.1)			(8.6)	3.0	2~3	雑	7.5YR 5/4	7.5YR 5/4	
-91	162	Q-166		横位沈線	≡ ガキ				(7.5)		2.5	雑	10YR 7/3	10YR 6/2	
-92	184	R-166		横位沈線	≡ ガキ	(6.6)				5.5	3	緻密	10YR 7/4	10YR 5/2	
-93	158	Q-163		沈線、刺突文	≡ ガキ	(8.0)					2.5~3.5	緻密	10YR 5/2	10YR 5/3	
-94	46	R-165		沈線、刺突文	≡ ガキ	7.5					3~4	緻密	10YR 3/2	10YR 5/2	
-95	75	Q-163		沈線	≡ ガキ	(6.4)					2~4	緻密	10YR 8/2	10YR 7/2	
-96	122	R-165		変形工字文							3~4	雑	10YR 4/4	10YR 5/4	
-97	60			沈線、刺突文	≡ ガキ				(11.0)		2	緻密	10YR 8/1	10YR 7/2	
-98	253	P-165	III A	工字文(III型)、L R斜行縄文	≡ ガキ	(12.4)					2~2.5	緻密	10YR 4/1	10YR 4/1	
-99	83	Q-164	III B 2	変形工字文(X型)、L R斜行縄文	≡ ガキ	(12.3)	6.7	9.0			2~4	緻密	10YR 5/3	7.5YR 5/4	
-100	223	Q-163	III B 1	変形工字文(I型)、R L縦走縄文	≡ ガキ	(10.2)					2~2.5	緻密	7.5YR 5/4	10YR 5/3	
-101	84	R-164	III C	入り組文、刺突文	ナ デ	(10.2)					2.5~3.5	雑	5YR 5/6	5YR 5/6	
-102	144	Q-165	III C	入り組文、L R斜行縄文	≡ ガキ	(13.5)					3~4	雑	10YR 3/1	10YR 3/1	スス状炭化物付着
-103	199	R-164	III C	入り組文、R L縦走縄文	≡ ガキ						2.5~4	緻密	10YR 6/4	10YR 3/1	
-104	232	Q-162	III C	入り組文、L R縦走縄文	ナ デ						2	雑	10YR 4/2	7.5YR 4/2	
-105	114	Q-168	III D	波状工字文、刺突文	≡ ガキ	(16.6)					2.5~4	緻密	2.5YR 9/4	7.5YR 4/3	
-106	141	P-162	III G	L R縦走縄文	ナ デ							緻密	10YR 3/2	10YR 7/4	
図70-107	48	Q-164	III F	横位沈線、条痕文	ナ デ	(12.8)					4~5	緻密	10YR 9/3	10YR 9/3	
-108	58	Q-165	III F	横位沈線、条痕文	ナ デ	(16.0)					5~6.5	緻密	10YR 7/3	10YR 3/2	
-109	398	P-165	III H 2	R L縦走縄文	ナ デ	(11.6)						雑	10YR 6/3	10YR 6/2	
-110	53	Q-165	III H 1a	R L斜行縦走縄文	ナ デ	(15.2)						緻密	10YR 3/1	10YR 7/4	
-111	129	P-165	III H 1b	L R斜行縄文	≡ ガキ	(20.0)						緻密	10YR 5/3	10YR 7/3	
-112	207	R-164	III H 1b	L R斜行縄文	≡ ガキ	(17.4)						緻密	10YR 6/2	10YR 7/2	
-113	211	P-161	III H 1b	L R斜行縄文	≡ ガキ							緻密	10YR 5/3	10YR 6/3	
-114	34	P-162	III I 1	横位沈線、R L斜行縄文	≡ ガキ	10.6					3~4	緻密	10YR 5/3	10YR 6/4	
-115	85	Q-168	III I 2	横位沈線、L R縦走縄文	≡ ガキ	(11.2)	(7.2)	6.7			3~4	緻密	10YR 8/2	10YR 8/2	
-116	159	Q-162	III I 2	沈線、L R斜行縄文	≡ ガキ	(8.8)	5.0	4.0			2	雑	10YR 3/2	10YR 2/1	内面付着物あり
-117	52	R-164	III E	液状、横位、L R斜行縄文	横ミガキ	(12.4)	(6.0)	8.0			2~4	緻密	10YR 6/3	10YR 6/3	
-118	39	R-165	III I 1	横位沈線、R L斜行縄文	ナ デ	(9.4)	(5.2)	8.1			3~4	雑	10YR 6/3	10YR 5/3	
-119	88	R-168		横位沈線		(17.6)					2~3.5	雑	10YR 4/1	10YR 3/1	
-120	86	R-166	III J 1a	横位沈線、R L斜行縄文	≡ ガキ	(10.4)					2.5~3	緻密	10YR 3/1	10YR 3/1	

表4 谷出土土器観察表(縄文晩期~弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台座直径(cm)	台高(cm)	沈線幅(mm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
-121	89	R-164	III J 1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ	(14.4)					3.5~4	雑	10YR 3/1	10YR 3/1	
-122	118	Q-164	III J 1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ	(14.8)					2.5	緻密	10YR 3/1	10YR 3/1	
-123	95	R-157	III J 1a	横位沈線、L R横位縄文	ニ方キ	(9.0)					2.5~3	緻密	7.5YR 7/4	17.5YR 7/6	
-124	68	R-165	III J 1a	横位沈線							3~3.5	緻密	10YR 3/2	10YR 5/3	赤色付着物あり
-125	90	R-168	III J 1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ	(12.0)					3~4	緻密	10YR 3/1	10YR 3/1	
図71-126	190	R-164	III J 1b	横位沈線、R L縦走縄文	ニ方キ	(15.0)					3~4	緻密	5YR 6/6	5YR 6/6	
-127	183	Q-164	III J 1b	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ	(9.8)					2.5	雑	10YR 3/2	10YR 5/3	
-128	214	Q-163	III J 1b	刻目、沈線、L R縦走縄文		(10.6)					2.5~3	緻密	7.5YR 4/3	5YR 4/6	
-129	222	Q-163	III J 1b	横位沈線、R L縦走縄文	ニ方キ						2~2.5	雑	7.5YR 6/6	10YR 7/2	
-130	186	R-168	III J 2	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ						2.5	緻密	7.5YR 5/3	7.5YR 5/3	
-131	201	Q-165	III J 2a	横位沈線、R L斜行縄文	ニ方キ						2.5~4	緻密	5YR 4/4	5YR 4/3	
-132	263	P-162	III J 2a	横位沈線、L R縦走縄文	ニ方キ	(13.0)					2~2.5	雑	10YR 3/2	10YR 3/1	スス状炭化物付着
-133	237	R-165	III J 2c	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ						3~3.5	緻密	10YR 6/2	10YR 4/1	
-134	206	R-165	III J 2a	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ						3~4.5	雑	10YR 3/1	10YR 3/1	
-135	142	Q-162	III J 2a	横位沈線、R L斜行縄文	ニ方キ	(12.0)					3~4	緻密	10YR 7/3	10YR 7/3	
-136	257	Q-164	III J 2a	横位沈線、R L斜行縄文	ニ方キ						2.5~3	雑	5YR 5/6	10YR 5/6	
-137	235	Q-162	III J 2c	横位沈線、R L縦走縄文	ニ方キ						2~2.5	緻密	10YR 6/6	10YR 3/2	
-138	210	Q-168	III J 2c	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ	(14.6)					4~5.5	雑	10YR 3/2	10YR 3/2	
-139	56	R-165	III J 2a	横位沈線、刺突文	ニ方キ						3.5~4	緻密	10YR 6/3	10YR 3/2	赤色付着物あり
-140	246	Q-165	III J 2a	横位沈線、R L斜行縄文	ニ方キ	(14.4)					2.5	緻密	10YR 3/2	10YR 4/2	
-141	259	Q-166	III J 2c	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ						2~4	緻密	7.5YR 5/3	10YR 3/2	
-142	71	Q-162	III J 2c	横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ						2~2.5	緻密	10YR 3/2	10YR 4/1	赤色付着物あり
-143	193	Q-164	III J 2b	横位沈線、L R縦走縄文	ニ方キ						3~4	緻密	10YR 3/2	10YR 3/1	
-144	248	R-164	III J 2b	横位沈線、L R縦走縄文	ナ	(8.2)					3	緻密	10YR 6/3	10YR 6/3	
-145	38	R-167	III J 2b	刻目、横位沈線	ナ	(7.2)					3~4	緻密	10YR 5/3	10YR 2/2	
-146	178	P-161	III J 2c	横位沈線、R L斜行縄文	ニ方キ	(17.0)					3~4.5	緻密	10YR 7/4	10YR 3/2	
図72-147	37	R-165	III J 2c	横位沈線、R L縦走縄文	横ミ方キ	13.7	7.1				3~4	雑	10YR 5/3	10YR 5/3	
-148	380	R-165	III J 2c	横位沈線、条痕文、L R斜行縄文	ナ	13.5					3~4	緻密	10YR 5/4	10YR 3/2	
-149	384	R-167	III J 2c	横位沈線、L R縦走縄文	ニ方キ		(6.8)	10.85			3~4	緻密	10YR 7/3	10YR 6/6	穿孔痕あり
-150	96	R-164		変形工字文	ニ方キ	(11.0)					3	緻密	10YR 8/2	10YR 7	
-151	168	Q-164		変形工字文、R L縦走縄文	ナ	(12.2)					2.5~4	緻密	10YR 6/3	10YR 7/3	
-152	169	P-164		沈線	ニ方キ						3~4	緻密	10YR 6/4	10YR 7/3	
-153	81	R-165		沈線、刻目	ニ方キ						3	緻密	10YR 5/4	10YR 7/3	
-154	200	Q-168		刻目、沈線、刺突文	ニ方キ						2.5~5	緻密	5YR 4/6	10YR 3/2	
-155	54	R-164		横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ						2~2.5	緻密	5YR 5/2	10YR 3/1	赤色付着物あり
-156	70	R-166		沈線、L R横位縄文	ニ方キ						3.5	緻密	10YR 7/3	10YR 5/2	赤色付着物あり
-157	205	Q-167		横位沈線、L R斜行縄文	ニ方キ						3.5	緻密	2.5YR 6/8	5YR 6/6	
-158	255	Q-163		刻目、沈線	ニ方キ						2	緻密	2.5YR 6/8	7.5YR 4/2	
-159	240	Q-165		沈線、刺突、L R縦位縄文							2~3	雑	7.5YR 5/4	10YR 6/3	
-160	285	R-167		条痕文								緻密	10YR 3/2	10YR 5/4	

表4 谷出土土器観察表(縄文晩期～弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台座部径(cm)	台高(cm)	沈線幅(mm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
-161	69	R-165		沈線、LR斜行縄文	ニガキ						2.5	緻密	5YR5/4	10YR4/1	赤色付着物あり
-162	40	R-167		横位沈線	ニガキ		5.6	5.6			3.5	緻密	5YR6/5	10YR4/1	
-163	62	Q-163		横位沈線			5.2	6.9			2.5~3	雑	7.5YR6/4	10YR7/2	
-164	230	Q-165		LR斜行縄文			(5.6)	6.8			2.5	緻密	10YR3/1	10YR3/1	
-165	107	R-166		LR斜行縄文	ナデ		6.0					緻密	7.5YR9/2	7.5YR6/6	
-166	78	P-162		横位沈線			3.5	4.9			2.5~4	緻密	10YR6/3	10YR6/3	
-167	41	Q-164		横位沈線、RL斜行縄文			4.0	5.5			1.5~2.5	雑	10YR7/4	10YR7/2	
-168	59	Q-164		LR斜行縄文	ニガキ		6.9	6.1				緻密	10YR4/1	10YR4/1	
-169	119	P-162		RL斜行縄文	ニガキ		6.3					緻密	10YR5/2	10YR7/3	
-170	396	Q-164		RL斜行縄文	ニガキ		(8.7)					緻密	10YR3/2	10YR3/1	
-171	244	P-164		LR斜行縄文	ナデ		6.4					雑	10YR3/1	10YR4/1	
-172	208	Q-165		沈線	ナデ		6.8	7.0		2.0		緻密	7.5YR7/4	10YR7/4	
-173	196	R-166		横位沈線、RL縦走縄文	ニガキ		(7.7)				3.5	緻密	7.5YR7/6	10YR6/3	
-174	121	Q-163		LR横位縄文	ニガキ		(7.6)					雑	7.5YR6/4	10YR3/1	
-175	137	Q-165		LR斜行縄文	ニガキ		8.6	8.3		1.9		緻密	10YR6/3	10YR8/2	
-176	197	R-166		LR斜行縄文	ニガキ		(7.7)					緻密	7.5YR6/4	10YR5/2	
-177	57	R-162		LR斜行縄文	ニガキ		6.1					雑	10YR6/2	10YR2/2	内面付着物あり
-178	77	Q-162		条痕文	ナデ		(5.8)					緻密	10YR7/2	10YR6/3	
-179	105	R-167		RL縦走縄文	ニガキ		4.6					緻密	10YR6/2	10YR5/2	
-180	243	Q-163		沈線、LR斜行縄文	ニガキ		5.7				2~3	緻密	10YR3/2	10YR4/2	
-181	242	P-163		RL斜行縄文	ナデ		5.6					緻密	10YR7/3	10YR6/1	
図73-182	108	R-164		LR斜行縄文	ニガキ		8.1					雑	7.5YR6/6	10YR5/4	
-183	229	Q-163		横位沈線、RL斜行縄文	ニガキ		7.2				3	緻密	7.5YR7/4	7.5YR6/6	
-185	227	Q-163		横位沈線、RL斜行縄文	ニガキ		(7.0)				4	緻密	10YR6/4	7.5YR6/4	
-186	198	Q-168		LR斜行縄文	ニガキ		(8.5)					雑	10YR7/4	7.5YR7/4	
-187	103	Q-166		LR横位沈線	ニガキ		5.2					緻密	10YR7/4	7.5YR7/4	
-188	160	Q-162	VII	沈線、刺突文	ニガキ						3.5	緻密	10YR7/2	10YR6/3	
-189	112		VII	刺突文、LR斜行縄文	ナデ							雑	10YR7/2	10YR6/2	
-190	157	Q-168	VII	沈線、RL斜行縄文							2	緻密	7.5YR6/4	10YR7/3	
-191	12	Q-164	VA1	工字文(II型)	ニガキ	(11.6)						雑	7.5YR6/4	10YR7/3	
-192	411	R-167	VA1	工字文(II型)			(7.0)				3	雑	10YR4/1	10YR4/1	
-193	14	P-166	VA1	工字文(II型)	ニガキ、ナデ	(12.0)						雑	10YR7/2	10YR7/2	
-194	260	Q-166	VA1	工字文(II型)							2.5	緻密	10YR7/2	10YR6/3	
-195	1	Q-162	VA2	工字文(III型)	ニガキ	5.4	9.2	20.7			2~4	緻密	10YR8/2	10YR8/2	
-196	182	R-166	VD	入り組文、刺突文	ナデ						1.5~2	緻密	10YR3/2	10YR4/1	
-197	132	P-165	VC	波状工字文							2.5~4.5	緻密	7.5YR6/4	10YR4/2	
-198	404	P-165		沈線	ニガキ	(17.0)					1~3	緻密	10YR5/3	7.5YR5/3	
図74-199	24	Q-164	VB1	変形工字文(V型)	横ミガキ	(10.8)					3~4	雑	5YR4/3	5YR4/3	
-200		Q-163	VB2	変形工字文(Ⅷ型)、LR斜行縄文	ニガキ	8.6	7.0	15.5			3~4	緻密	10YR3/1	10YR3/1	
-201	414	R-168		変形工字文	ニガキ						3.5~4	雑	10YR4/1	10YR3/1	赤色付着物あり

表4 谷出土土器観察表(縄文晩期～弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台高(cm)	台高径(cm)	台高底径(cm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
-202	154	Q-163		変形工字文	ニガキ							雑	5YR6/6	5YR6/6	
-203	45	R-166			ミガキ、ハケ							緻密	10YR4/1	10YR4/1	
-204	276	Q-165	WF2	ミガキ調整	ミガキ	5.2	6.5	12.5				雑	10YR7/3	10YR7/3	
-205	413	R-166	WF2		ミガキ	(6.4)						緻密	10YR3/1	10YR3/1	
-206	288	Q-163	WF1b		ナ	(10.0)						緻密	10YR4/1	10YR4/1	
-207	286	P-162	WF1a		ミガキ	(10.2)						緻密	10YR8/4	7.5YR7/6	
-208	401	R-164	WF1a		ミガキ							緻密	10YR3/2	10YR5/2	
-209	409	Q-164	WF1a		ミガキ							緻密	10YR2/1	10YR3/2	
-210	395	O-165	WI	横位沈線、刺突文	ハケ目							緻密	7.5YR6/4	10YR3/2	
-211	394	Q-163	WI	横位沈線、押し引き	ミガキ							緻密	10YR8/3	7.5YR8/4	
-212	296	R-166	WI	横位沈線、刺突文	ミガキ							緻密	10YR6/3	10YR7/4	
-213	209	P-161	WG	横位沈線、LR斜行縄文	ミガキ							雑	10YR6/3	10YR3/1	沈線部分赤色残
-214	264	P-162	WG	横位沈線、LR縦走縄文	ミガキ、ナ	(6.0)						緻密	10YR6/2	10YR7/3	
-215	204	R-166	WG	LR斜行縄文	ナ							緻密	10YR7/4	10YR7/3	
-216	163		WG	LR縦走縄文								雑	10YR4/1	10YR4/1	
-217	402	Q-163	WG	横位沈線、LR斜行縄文								緻密	5YR5/4	5YR5/4	
図75-218	117	R-166	WH	刺突列点	ナ、ミガキ	(25.1)						雑	10YR4/1	10YR6/2	
-219	412	P-164	WH	列点文	ミガキ	(19.6)						緻密	10YR7/4	10YR7/2	
-220	8	P-165	WH	列点文	ミガキ	(23.4)						雑	10YR7/2	10YR6/1	
-221	399	P-166	WH	横位沈線、列点文	ミガキ							緻密	10YR7/3	10YR6/2	
-222	17	P-164	WE1a	横位沈線	ミガキ	(10.0)						緻密	10YR5/2	10YR7/2	
-223	11	Q-163	WE1a	横位沈線	ナ	(11.6)						雑	2.5YR6/1	10YR6/2	
-224	50	R-165	WE1a	横位沈線	ミガキ	(15.0)						雑	10YR2/4	10YR3/1	
-225	5	Q-164	WE1a	横位沈線	ミガキ	(18.1)						緻密	10YR7/3	10YR7/3	
-226	20	Q-164	WE1a	沈線	ナ	(12.2)						雑	10YR4/1	10YR4/1	
-227	21	R-168	WE1a	横位沈線	ミガキ	(11.8)						緻密	10YR7/3	10YR7/4	
-228	13	Q-164	WE1a	横位沈線	ミガキ	(11.4)						密	10YR6/4	10YR6/2	
-229	15	Q-164	WE1a	横位沈線	ナ	(12.8)						雑	10YR7/2	10YR7/2	
-230	4	Q-164	WE1a	横位沈線	ナ	(14.0)						雑	7.5YR6/3	10YR7/2	
-231	19	P-165	WE1a	横位沈線	ナ	(12.0)						緻密	10YR8/2	10YR8/2	
-232	3	P-165	WE1a	横位沈線	ミガキ	10.4						雑	10YR5/3	10YR6/3	
-233	73	P-165	WE1a	横位沈線	ミガキ		7.5					雑	10YR6/3	10YR3/1	232と同一固体
図76-234	10	Q-164	WE1a	横位沈線	ナ	(13.4)						緻密	10YR5/2	10YR7/2	
-235		Q-165	WE1a	横位沈線	ナ	(9.8)						雑	10YR7/3	10YR7/3	
-236	405	Q-16	WE1a	横位沈線	ハケ目							緻密	10YR7/3	7.5YR6/4	
-237	7	Q-168	WE1b	横位沈線	ミガキ	(14.2)						雑	7.5YR5/4	7.5YR5/4	
-238	16	Q-164	WE1b	横位沈線	ミガキ	(11.1)						緻密	10YR4/1	10YR4/1	
-239	49	Q-155	WE1b	横位沈線	ミガキ、ハケ	(10.0)						緻密	10YR7/4	10YR6/3	
-240	18	R-166	WE1b	横位沈線	ミガキ	(11.4)						緻密	10YR3/2	10YR3/2	
-241	407	P-165	WE1b	横位沈線								雑	10YR3/2	10YR3/2	

表 4 谷出土土器観察表 (縄文晩期～弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台高部径(cm)	台高(cm)	沈線幅(mm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
-242	22	Q-163	WE1b	横位沈線、R L斜走縄文	ニガキ	(13.0)					2~3	緻密	10YR 6/3	10YR 7/3	
-243	6	Q-164	WE1a	横位沈線	ニガキ	(11.8)					4	雑	10YR 7/2	10YR 6/2	
-244	140	Q-164	WE 2	横位沈線			(20.0)				2	緻密	10YR 3/2	10YR 3/2	
-245	175	Q-163	WE1a	横位沈線		(17.2)					2~5	緻密	10YR 4/2	10YR 6/2	
-246	290	Q-163		横位沈線	ナデ	(4.2)					2	緻密	10YR 5/2	10YR 5/2	
-247	410	R-166		沈線							2	緻密	10YR 3/2	10YR 5/2	
-248	9	P-161		横位沈線		(3.8)					2.5~3.5	緻密	7.5YR 7/4	7.5YR 5/4	
-249	64	Q-164		横位沈線	ニガキ							緻密	7.5YR 6/4	7.5YR 6/4	
-250	216	P-165		横位沈線								緻密	10YR 6/2	10YR 5/3	
-251	294	P-165		横位沈線								緻密	10YR 7/3	10YR 5/3	
-252	287	P-165		横位沈線	ナデ	(4.6)					2	緻密	10YR 7/2	10YR 8/2	
-253	146	P-165		横位沈線								雑	2.5YR 4/6	2.5YR 4/6	
-254	291	P-163		沈線	ニガキ						3	緻密	10YR 4/1	10YR 5/1	
-255	389	Q-163			ニガキ		(6.4)					緻密	10YR 7/2	10YR 7/3	胴部最大径18.6cm
-256	284	R-164			ナデ							雑	10YR 6/3	10YR 6/3	
-257	281	R-167			ナデ							緻密	10YR 4/1	10YR 7/3	
-258	387	R-165			ナデ							緻密	10YR 4/1	10YR 7/3	
-259	231	Q-166		R L斜走縄文	ニガキ							緻密	10YR 7/3	10YR 5/1	
図77-260	150	Q-164	VA1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	(18.6)					3	雑	10YR 5/2	10YR 7/3	
-261	236	R-163	VA1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	(18.6)						雑	10YR 3/2	10YR 5/3	
-262	173	P-163	VA1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	(21.6)					3	緻密	10YR 6/2	7.5YR 7/4	
-263	221	R-165	VA1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ						3.5~4	緻密	10YR 5/3	10YR 5/3	
-264	215	P-162	VA1a	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ、ナデ	(15.7)					5	雑	10YR 3/1	10YR 3/2	
-265	143	Q-162	VA1b	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	(23.0)					4	緻密	10YR 8/4	10YR 7/4	
-266	181	Q-167	VA1b	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	(18.5)					3~3.5	雑	10YR 5/2	10YR 7/2	
-267	390	P-165	VA1b	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ						2.5	雑	10YR 7/3	10YR 8/3	
-268	239	P-162	VA1b	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	(19.5)					4.5	雑	10YR 3/2	10YR 4/1	
-269	31	P-162	VA1b	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	20.3	8.2	26.1			3.5~4	緻密	10YR 6/3	10YR 7/3	
図78-270	32	P-161	VA1b	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	17.2	8.6	24.6			3~5	緻密	10YR 6/3	10YR 7/3	
-271	187	R-168	VA2a	横位沈線、L R斜行縄文		(20.0)					5	雑	7.5YR 6/6	10YR 7/4	
-272	385	R-165	VA2b	横位沈線、L R斜行縄文	ナデ	(19.0)					3~5	雑	10YR 5/2	10YR 7/2	
-273	279	R-165	VA2b	横位沈線、L R斜行縄文	ニガキ	17.5					2~4	緻密	10YR 5/3	10YR 2/1	スス状炭化物付着
-274	116	P-161	VB 1	R L斜行縄文	ニガキ	(26.0)						雑	10YR 6/4	10YR 7/4	
-275	220	P-165	VB 1	L R斜行縄文	ニガキ	(20.6)						緻密	10YR 3/2	10YR 7/3	
-276	125	P-165	VB 1	L R斜行縄文	ニガキ							緻密	10YR 6/3	10YR 5/2	
-277	151	Q-162	VB 2	L R斜行縄文	ニガキ	(19.0)						雑	10YR 3/2	10YR 4/3	
-278	63	Q-163	VD 1		ナデ							雑	10YR 6/2	10YR 7/3	
-279	72	Q-162	VD 2	横位沈線	ニガキ						3~4	雑	10YR 5/3	10YR 7/2	
図79-280	379	P-161	VD 1	条痕文	ナデ	(20.6)						雑	10YR 6/2	10YR 7/2	スス状炭化物付着
-281	42	P-162	VF	入組み状沈線、L R斜行縄文	ニガキ	15.8	8.6	18.1	(9.2)	1.3	4~5	緻密	10YR 7/4	10YR 3/2	

表4 谷出土土器観察表(縄文晩期~弥生)

図版番号	整理番号	出土地区	分類	施文様	内面調整	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	台座高さ(cm)	台高(cm)	沈線幅(mm)	胎土	外面色調	内面色調	備考
-282	393	P-165	VE1	刺突列点、L R斜行縄文		19.0						緻密	10YR 7/3	10YR 8/3	
-283	397	P-163	VE1	L R斜行縄文、刺突列点	ニ 方キ							緻密	10YR 7/3	10YR 7/3	
-284	292	Q-162	VE3	横位沈線、刺突列点、R L斜行縄文	ニ 方キ						2~4	緻密	10YR 6/3	10YR 5/2	
-285	392	Q-164	VE2	横位沈線、刺突列点、L R斜行縄文	ナ							緻密	10YR 6/2	10YR 7/4	
-286	388	Q-165	VE1	刺突列点、L R斜行縄文	ナ							緻密	10YR 5/2	10YR 7/2	
-287	111	Q-165	VE4	横位沈線、L R斜行縄文、刺突列点	ニ 方キ						2	緻密	10YR 5/3	7.5YR 5/4	
-288	161	Q-162	VE2	横位沈線、刺突列点、L R斜行縄文								雑	7.5YR 5/4	10YR 4/1	
-289	147	Q-162	VE3	横位沈線、刺突列点	ナ							雑	10YR 6/3	10YR 4/2	
-290	297	P-162	VE2	横位沈線、刺突列点、L R斜行縄文	ニ 方キ	(20.3)						雑	10YR 3/2	10YR 6/3	
-291	123	Q-164	VE3	横位沈線、刺突列点、L R斜行縄文	ニ 方キ	(17.0)					3~3.5	緻密	10YR 3/2	10YR 6/2	
-192	126	Q-163	VE3	横位沈線、刺突列点、L R斜行縄文	ニ 方キ						3	緻密	10YR 3/2	10YR 6/3	
-293	174	P-162	VE2	横位沈線、刺突列点、L R斜行縄文	ニ 方キ	(21.2)					2.5	雑	10YR 3/2	10YR 6/3	
図80-294	381	P-162	VC	斜行無節縄文	ナ	(18.5)						雑	10YR 6/3	10YR 3/2	スス状炭化物付
-295	36	P-162	VC	L R縦走縄文		19.2						雑	10YR 2/3	10YR 6/2	
-296	238	P-162	VC	L R横位縄文	ニ 方キ	(18.0)						緻密	10YR 5/2	10YR 8/2	
-297	328	P-162		L R斜行縄文	ニ 方キ							緻密	10YR 8/2	10YR 7/2	

2 土製品

本遺跡で出土した土製品は51点で、ほとんど遺物密集地点（谷）から出土している。以下に、それぞれの特徴を述べる。ただし、図86の土製サイコロなど3点については谷以外からの出土であるが、ここで一括して記載する。また、個々の重量などの観察結果は、観察表（表5）に記載し、文末に一括して掲載した。なお、文中の番号は、土製品実測図番号である。

（1）土偶（図82～84—1～19）

19点出土した。すべて破損品である。出土地はすべて遺物密集地点（谷）である。

1～4は、頭上にあたかも髪を結ったかのような突起帯がある結髪形土偶、6～10は、ほぼ全身に刺突が施される刺突文土偶の形態に分類される。

破損状況は、頭部の残存するもの5点、胸から腰が残存するもの4点、腰から脚の残存するもの1点、脚の残存するもの3点、腕部1点などである。これらの状況から、意図的に破損する部分を決めて破損したと考えられる。また、1と2の頸部下は、胴部に差し込むような作りであり、この部分だけで機能していた可能性もある。

1は、当時の人々（女性）の顔面を忠実に表現しようとしている様子がうかがえる。2は、1よりも若干抽象的であり、3は更に抽象化している。いずれも立体的表現である。4は、顔面の左半分だが、首はなく、頭部のみを平面的に表現している。5は、お面のような形状で、鼻の部分が突出している。裏面に文様などは施していない。

6は腰から脚、7・8は胸から腰まで残存しており、いずれも刺突と沈線を施している。

9・10は板状土偶で、首から腰に相当する部分が残存している。9は片腕のみ残存している。いずれも体全体に刺突を施し、沈線で何かを表現している。どちらも腕を折り曲げて抱き抱えるような様子がうかがえる。また、10は女性の胸を表現していると思われる突起が2つ中心線の左右対称にある。9と10は、背中に相当する面の中央に釣り針のような形状の沈線文様を施しており、首から肩のほぼ中央にある突起は共通している。なお、10の表面には、漆の付着が認められる。

11～14は脚の一部（14は11の破片）であり、13の指先には、8本の刻みで指を表現している。また、11は足のサイズ7.2cmを呈し、推定50～60cmもの巨大な土偶となる。このことから、土偶は、部分のみで機能していたものと捉えることができよう。

15は腕の一部と思われ、片面は刺突文、一方の面は沈線文を施している。

16～19も土偶の一部と思われるが部位は不明である。16は刺突文と刻みを有し、17は刺突文のみを施文している。18は胸から脚を、19は脚を表現したものであろうか。

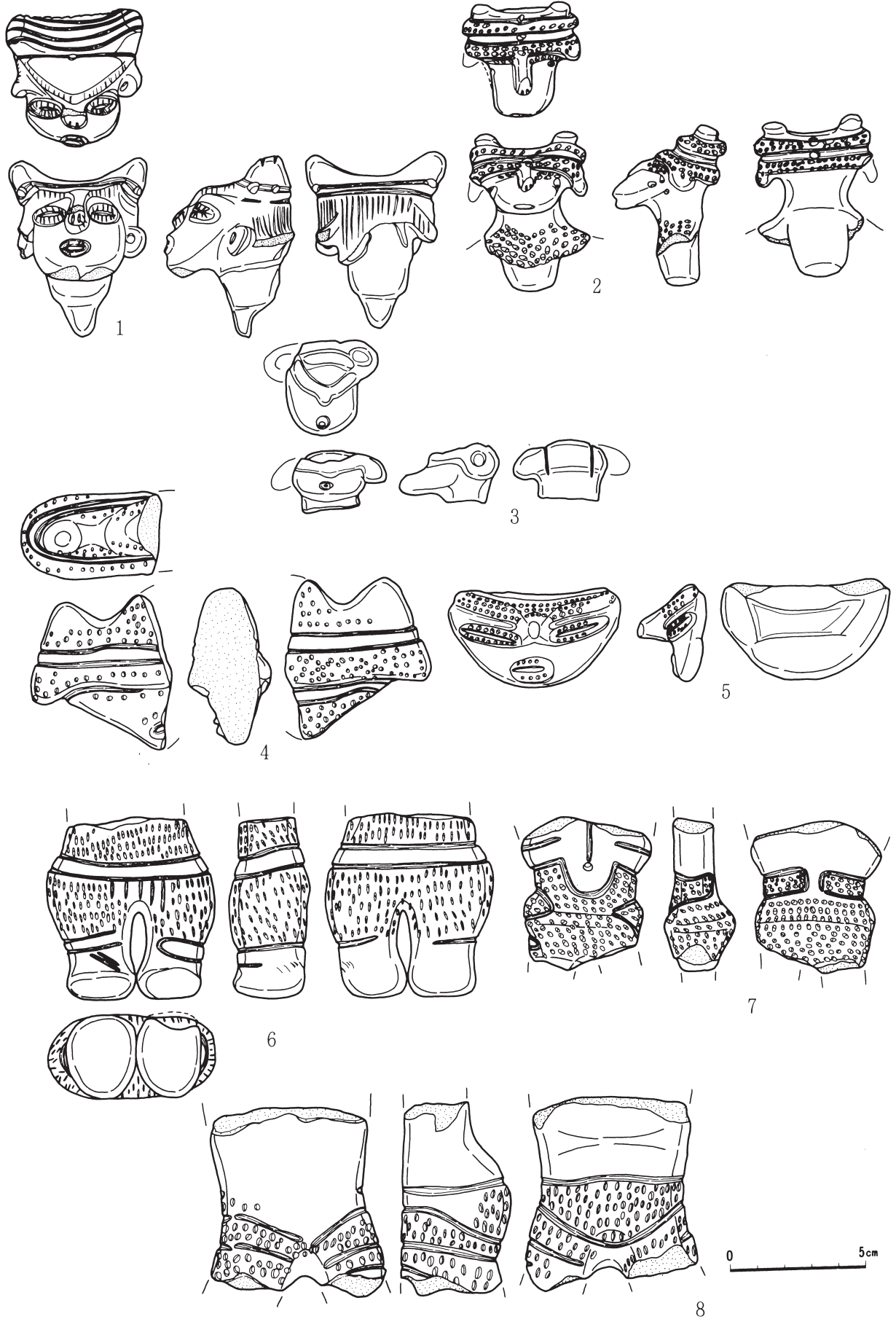


図82 土製品 (土偶 1)



0 5cm

图83 土製品（土偶2）

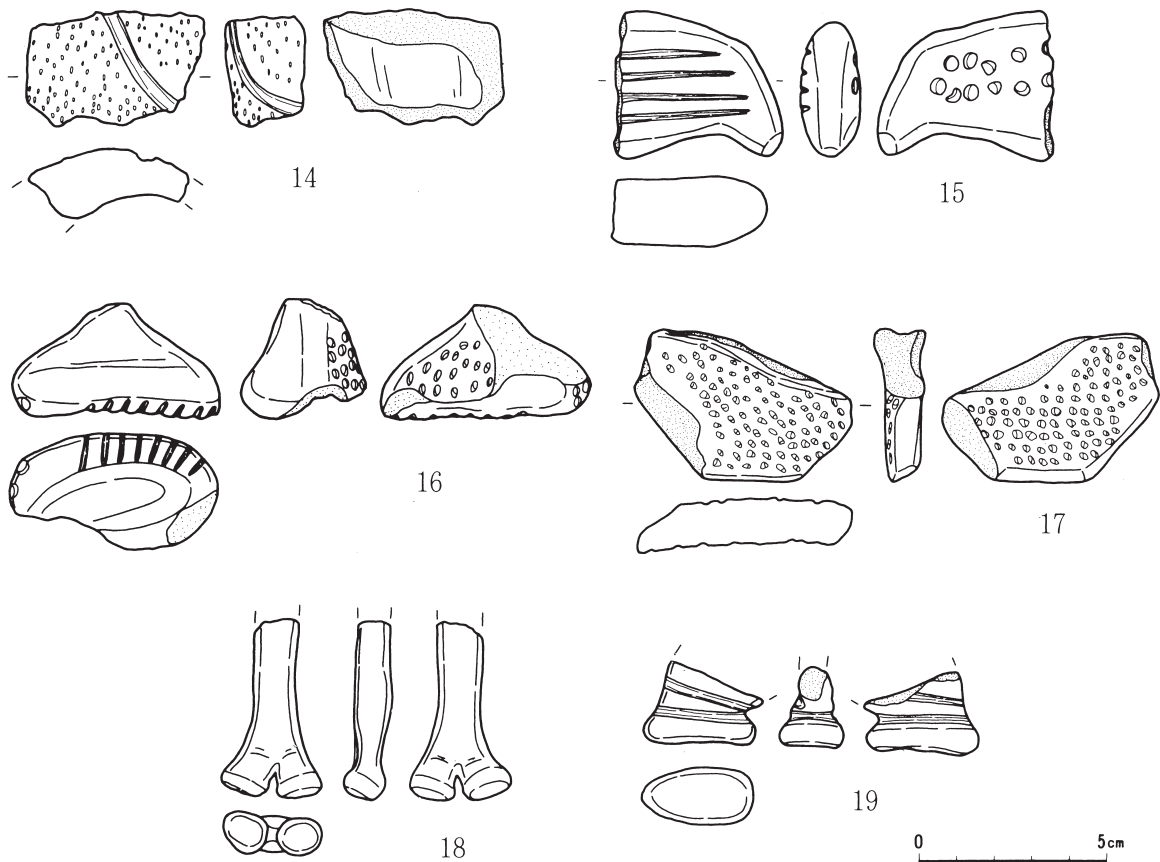


図84 土製品（土偶3）

(2) 土版

8点出土した。出土地はすべて遺物密集地点（谷）である。

20～26は隅丸方形を呈し、20～22の上辺には、刻みを加えている（本報告書では刻みを加えている側を上部とした）。更に、これらの片面上位には、浅い帯状の凹みと反対の面には棒状工具で刺突を加えているのが認められる。23の上辺には細かい刺突文が認められる。

文様構成は、正中線を境に工字文的な文様を基調とする。ほぼ左右対称に「コ」の字、あるいはそれを裏返したような文様を同心円状に重層化させている。しかし、厳密に同じ文様を繰り返し施文してはおらず、コの字の中に線が入ればいいという感じがする。また、21は正中線による2分割に加え、片側の上下を2段に分けている。なお、20は上辺部周辺に2個1対の貫通孔を有する。

27は、扁平な糸巻き状を呈し、上辺に刻みを有する。文様は、正中線を境に斜めの平行沈線を施している。また、20と同様に上辺部周辺に2個1対の貫通孔を有することから、土版は、紐を通しネックレスのように身に付けていたものと考えられる。

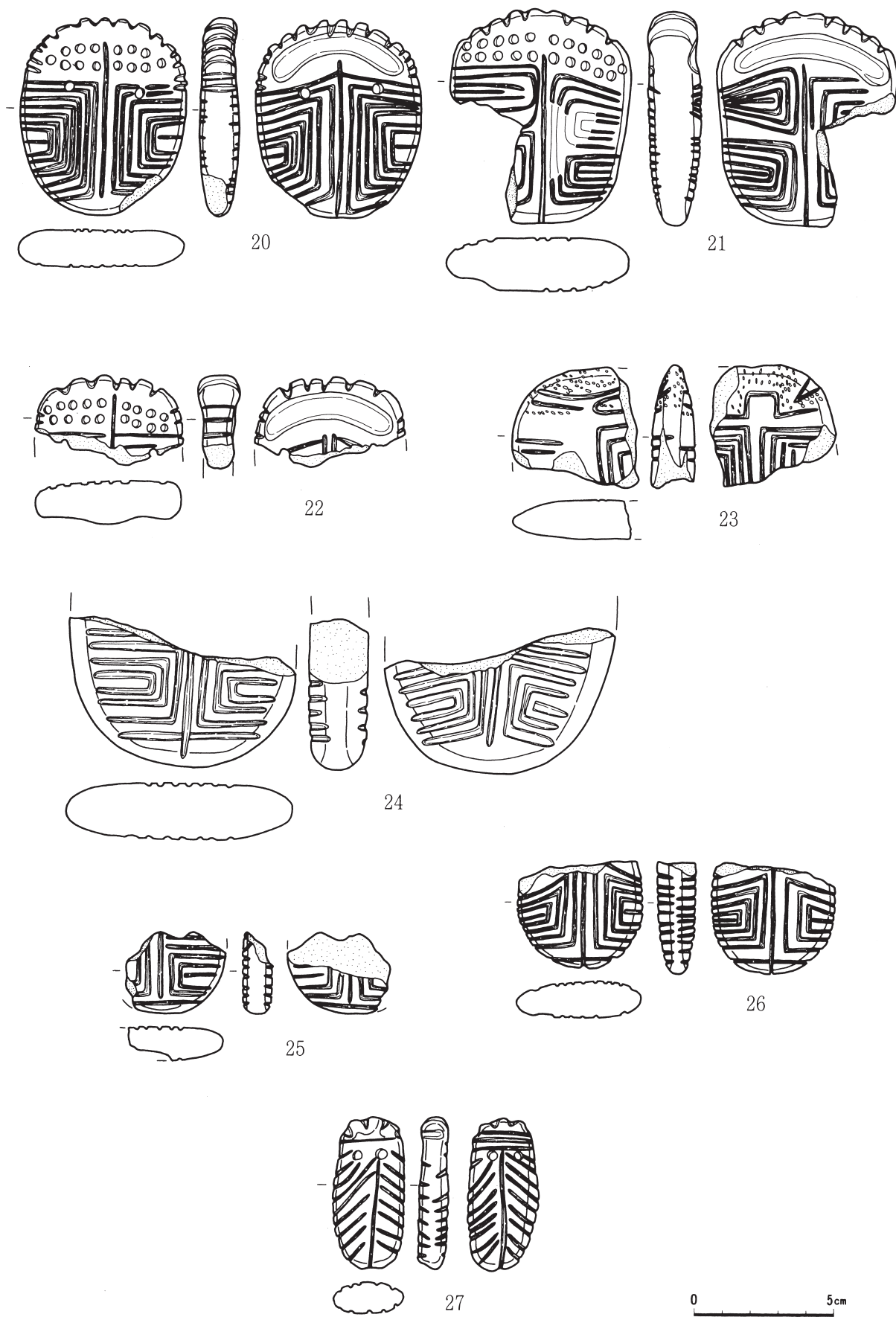


图85 土製品 (土版)

(3) その他の土製品 (図86・87—28~51)

24点出土した。スプーン状土製品3点、土製勾玉2点、ミニチュア土器16点、サイコロ1点、ボタン状土製品1点、形状不明1点である。35は8号住居跡(平安時代)の床面から、また、28~30以外はすべて谷から出土したものである。

28は、サイコロと考えられ、平安時代の遺構付近の表採から出土した。平安時代のサイコロだとすると、本県初のもので、当時の人々の遊び心の一端がうかがえる。手づくね成形で、形状は現代のものに似ているが、目は「1・3・3・4・5・9」と刺突を施して表現している。(実測図及び写真は、展開図で表現した。)

29の形状は不明である。円盤形で、下部に指頭圧痕が認められる。出土位置も不明であるが、平安時代の集落跡付近の表土から出土した。

30は、ボタン状土製品とした。独楽のような形態であるが、よくわからない。

31~33は、スプーン状土製品である。手づくね成形で、内外面には、指頭圧痕がみられる。体部は深めで、柄にあたる部分は摘むのに適当な長さである。

34・35は、土製勾玉である。手づくね成形で、貫通孔を有する。

36~51はミニチュア土器である。36~41は、砂沢式(弥生時代前期)のものと思われる。36・37は壺形で完形品。36の外面には炭化物が付着している。また、38・39は台付き鉢、40・41は平底の鉢の底部片である。

42~51は、平安時代のミニチュア土器で、42は台付き鉢の胴~底部で、ヘラで整形している。43は波状口縁(4つ)を呈し、粘土紐の巻き上げ成形の後、指ナデによる整形を施している。44・45は手づくね成形である。45と47は丸底、47と48は平底、49~51は、台付き鉢の底部片である。

(山内 実)

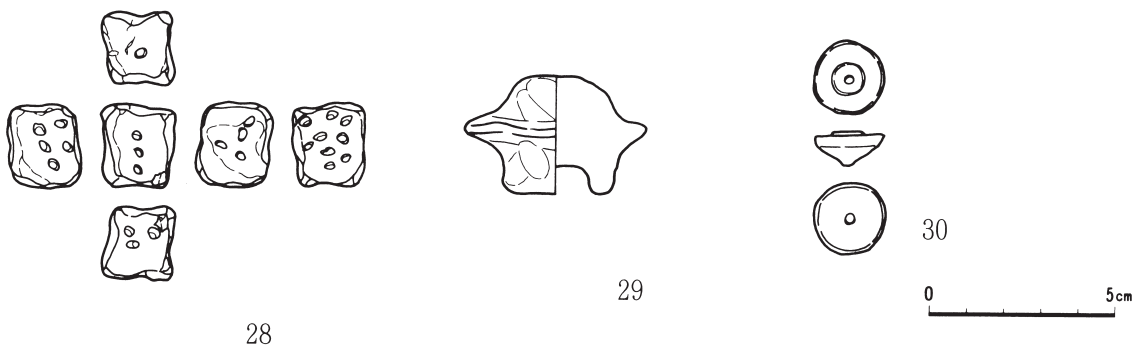


図86 土製品 (その他1)

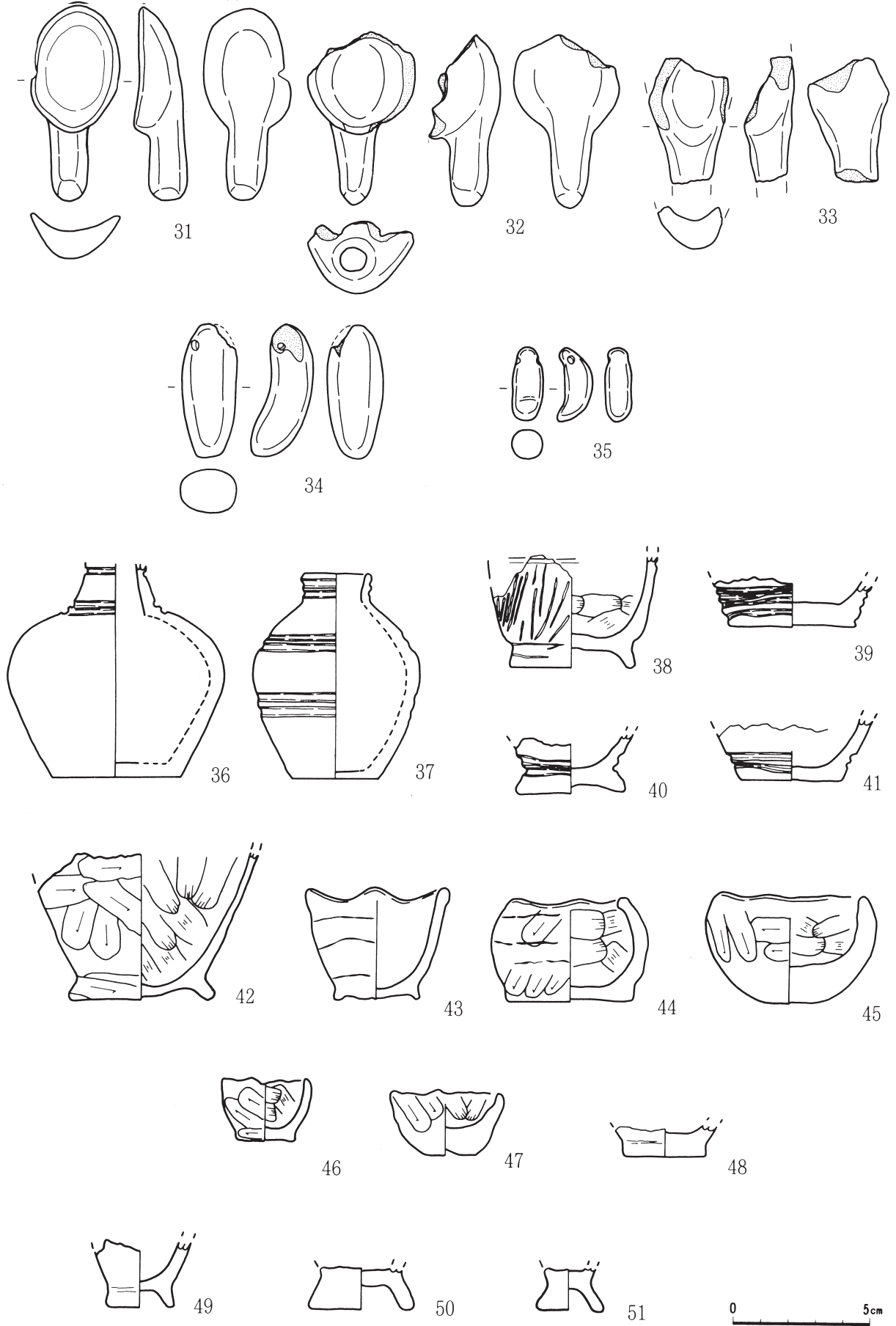


図87 土製品（その他2）

土 偶

図版番号	出土地点	層位	残存部分	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	色 調	備 考
図82-1	P-162	IV	顔面	65.0	57.0	48.0	75.2	橙	結髪形土器
-2	Q-162	IV	顔面	58.0	(43.0)	40.0	(43.8)	明褐	〃
-3	R-167	IV	顔面	22.0	(34.0)	37.0	(15.2)	明赤褐	〃
-4	P-164	IV	顔面左半分	(56.0)	(52.0)	30.0	(55.1)	にぶい橙	〃
-5	Q-164	IV	顔面	35.0	63.0	26.0	34.2	橙	
-6	Q-162	IV	腰から脚	(66.0)	(61.0)	30.0	(119.4)	明黄褐	
-7	Q-163	IV	腰の部分	(56.0)	(47.0)	26.0	(55.6)	にぶい黄橙	
-8	P-164	IV	腰の部分	(66.0)	(69.0)	40.0	(166.2)	にぶい黄褐	
図83-9	M-157	I	胴体	(95.0)	(107.0)	27.0	(121.9)	浅黄橙	板状土偶
-10	Q-163	III	胴体	(83.0)	(116.0)	19.0	(187.1)	にぶい黄褐	〃
-11	Q-164	IV	片脚の一部	(91.0)	59.0	74.0	(170.9)	にぶい黄褐	
-12	Q-165	III	片脚の一部	(55.0)	27.0	40.0	(44.7)	橙	
-13	Q-165	IV	片脚の一部	(31.0)	21.0	28.0	(12.6)	橙	
図84-14	Q-163	IV	片脚の一部	(30.0)	(44.0)	(15.0)	(18.3)	褐灰	No11の一部
-15	Q-162	IV	腕の一部	(40.0)	(48.0)	(15.0)	(29.0)	橙	
-16	Q-164		?	(40.0)	(58.0)	(11.0)	(22.3)	浅黄橙	
-17	Q-165		?	(30.0)	(55.0)	(34.0)	(23.0)	にぶい黄橙	
-18	Q-162	IV	胸から脚?	(46.0)	(11.0)	(10.0)	(9.2)	にぶい黄橙	
-19	Q-163		脚?	(22.0)	(30.0)	(15.0)	(7.3)	にぶい黄橙	

土 版

図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	色 調	備 考
図85-20	P-168	III	71.0	59.0	14.0	59.0	褐灰	赤色顔料付着
-21	H-136	II	75.0	62.0	17.0	(85.2)	橙	
-22	Q-164	II	(33.0)	(53.0)	16.0	(24.9)	にぶい黄褐	
-23	P-165	II	(44.0)	(45.0)	15.0	(28.2)	橙	
-24	R-167	III	(53.0)	(80.0)	21.0	(71.8)	褐	
-25	Q-162	IV	(29.0)	(36.0)	16.0	(11.4)	にぶい黄橙	
-26	D-163	IV	(38.0)	(45.0)	14.0	(25.9)	褐	
-27	R-167	III	54.0	26.0	11.0	15.6	にぶい黄橙	貫通孔

土 製 品(その他)

図版番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	色 調	器 種	備 考
図86-28		表採	22.0	18.0	18.0	8.4	明褐	サイコロ?	平安時代?
-29		表採	48.0	47.0	31.0	32.2	にぶい橙	?	〃
-30	F-132	表採	19.0	18.0	0.9	2.1	明褐	ボタン状土製品?	〃
図87-31	Q-165	IV	69.0	31.0	15.0	18.2	暗褐	スプーン状土製品	
-32	P-165	IV	(62.0)	37.0	25.0	(20.7)	にぶい黄褐	〃	
-33	Q-166	II	(45.0)	(30.0)	18.0	(14.0)	橙	〃	
-34	Q-165	III	47.0	19.0	15.0	15.1	にぶい橙	土製勾玉	
-35	第8号住居跡	床面	26.0	11.0	10.0	2.6	褐灰	〃	
-36	R-165	II	87.0	78.0	46.0	133.6	にぶい黄橙	ミニチュア土器	砂沢式
-37	Q-165	IV	74.0	60.0	30.0	91.3	浅黄	〃	〃
-38	Q-165	IV	(60.0)	(39.0)	41.0	(29.2)	にぶい黄橙	〃	〃
-39	P-165	IV	(45.0)	(20.0)	39.0	(17.7)	にぶい黄褐	〃	〃
-40	Q-164	II	(53.0)	(15.0)	46.0	(28.5)	にぶい橙	〃	〃
-41	Q-164	IV	(58.0)	(21.0)	31.0	(21.7)	にぶい橙	〃	〃
-42	Q-163	IV	(88.0)	(51.0)	53.0	(54.9)	にぶい黄橙	〃	
-43	Q-162	IV	(52.0)	40.0	(31.0)	(33.9)	にぶい黄褐	〃	
-44	R-166	II	(43.0)	37.0	46.0	(38.2)	にぶい橙	〃	
-45	R-166	II	(55.0)	39.0	17.0	(36.8)	橙	〃	
-46	P-162	IV	(32.0)	(23.0)	22.0	(9.8)	橙	〃	
-47	Q-164	IV	42.0	(21.0)	16.0	(19.5)	にぶい橙	〃	
-48	P-165	IV	(38.0)	(10.0)	31.0	(12.7)	にぶい黄褐	〃	
-49	Q-162	IV	(35.0)	(23.0)	25.0	(9.1)	にぶい黄橙	〃	
-50	Q-164	III	(38.0)	15.0	30.0	(8.1)	にぶい黄褐	〃	
-51	R-166	II	(24.0)	15.0	18.0	(6.6)	にぶい黄橙	〃	

表5 土製品観察表

3 石器

今回の調査で遺構外から出土した石器は、剥片石器358点、礫石器34点である。

伴出した土器は、縄文時代前期の円筒下層 a 式及び弥生時代前期の砂沢式が主体となることから、石器の年代も概ねこの時期に相当するものと考えられる。

ただ、最も遺物の密集していた谷部分は、遺物包含層のはぼすべて（Ⅰ層からⅣ層）にわたって攪乱を受けており、土器の出土状態も各時期のものが混在していた。このため石器においては、層位及び共伴土器からはその帰属時期を明確にできないが、時期的な観点からも遺物の観察を行いたい。

石器の観察表は器種ごとにまとめて記載している。なお、計測値は各部位の最大値を、また（ ）は欠損品の残存値を記載している。

石 鏃（図88～図93）

石鏃は、164点出土した。茎部の有無及び基部の形状で分類した。ただし基部の形状は分類基準の中間の様相を持つものもあり、これらについては形状的により近いと考えられる類に組み入れた。

無茎のものは平基・凹基の2種である。基部と茎部とに境目を持たないものは円基及び尖基とした。有茎のものは平基と凸基の2種である。

無茎平基（図88-1～9）

1・2は長身のもので、4は細身の直線的な器体である。5～7は小型のやや丸みを帯びたもので、8・9は先端部が鋭利な作りとなっている。

6・7を除いては薄手の器体で、1・3・4は器体の調整が精緻な作りで縄文時代の前期のものと考えられる。

無茎凹基（図88-10～15）

10・11は基部の抉りが浅く、薄手のものである。12は肉厚で、浅く小規模な抉りである。13は逆V字状の深い抉りを持つ薄手の器体である。14・15は側縁の基部寄りに抉りを持つ特殊な器体である。基部の抉りは開き気味に作出されている。10は技法的に古手と考えられる。

円基（図88-16～22）

この類としたものは7点であるが、16・19の2点は平基に近いものである。全体に薄手である。22は重量0.2gの極小石鏃である。

尖基（図89-23～図90-74）

この類としたものは52点である。ただし、細身のものでは、基部の剝離の状態で、有茎凸基の類との区別が微妙なものも数点ある。

23～29は側縁が直線的で、肩部も角張っている類である。28は器体中央部の側縁が平行に作出されている。30～35は肩部がやや丸みを帯びており、36～54は側縁部も曲線的になる。36から41はやや細身に作出されており、42～54は尖頭部がやや短めである。55～58は肩部が先端寄りであるもので、59～70はほぼ中央に最大幅を持つものである。67は先端部を細く鋭利に作出している。68～70はほぼ上下に対象形をなすものである。71～73は尖頭部に最大幅を持つものである。

肩部が中央寄りになった器体は、先端が鋭利さをなくし、丸みを帯びる傾向が認められる。

有茎平基 (図90-75~77)

この類としたのは、4点である。74は基部が張り出したものであるが、他の3点は細身の器体である。76は側縁が曲線的である。

有茎凸基 (図91-78~図92-138)

石鏃中もっとも量的に多い類で、66点出土した。

78~85は側縁が直線的で、肩部が角張っている類である。全体に細身の傾向がみられる。86~97は肩部がやや丸みを帯びて、側縁も曲線的となる。98~109は肩部が丸く作出されている。側縁は98~106のような直線的なもの、107~109のような曲線的なものがある。110~123は側縁が丸みを帯びるもので、117から123は特に丸みの強いものである。122~128は全体に丸みを帯びながら肩部がやや角張っている。129~131は基部が中央寄りに作出されている。132~138は各類別の中に入りきらなかったものである。

欠損他 (図93)

基部を欠失し、細分できなかったもの及び部分破片を一括した。139~150は尖頭部の破片で、151からは部分破片である。159・160・162は尖頭部か基部か不明のもの、163・164は石鏃の可能性も考えられる。

石鏃の出土地点は、他の遺物と同様に谷部分に集中している。

器体にアスファルトが付着しているものは10点 (37・62・76・87・92・98・103・104・122・127) で、尖基2点、有茎凸基8点であるが、尖基とした37は有茎凸基に分類してもよい器体である。すべて基部側に付着が認められるが、122は尖端部にも付着がみられる。

使用した石材は164点中145点が珪質頁岩で、以下、玉髓3点、玉髓質珪質頁岩5点、黒曜石6点、緑色細粒凝灰岩4点、鉄石英1点である。

基部形状別の点数は、無茎平基9点、無茎凹基6点、円基7点、尖基52点、有茎平基3点、有茎凸基66点である。基部形状の明確なものでの比率では、尖基36%、有茎凸基45%と、出土石鏃をほぼ二分している。

時期については、縄文時代前期と弥生時代前期の土器が混然となつての出土状態であることから断定することはできないが、基部の幅や形状から概ね縄文時代のものと考えられる。ただ、無茎石鏃の幅広のものの一部は弥生時代のものの可能性がある。

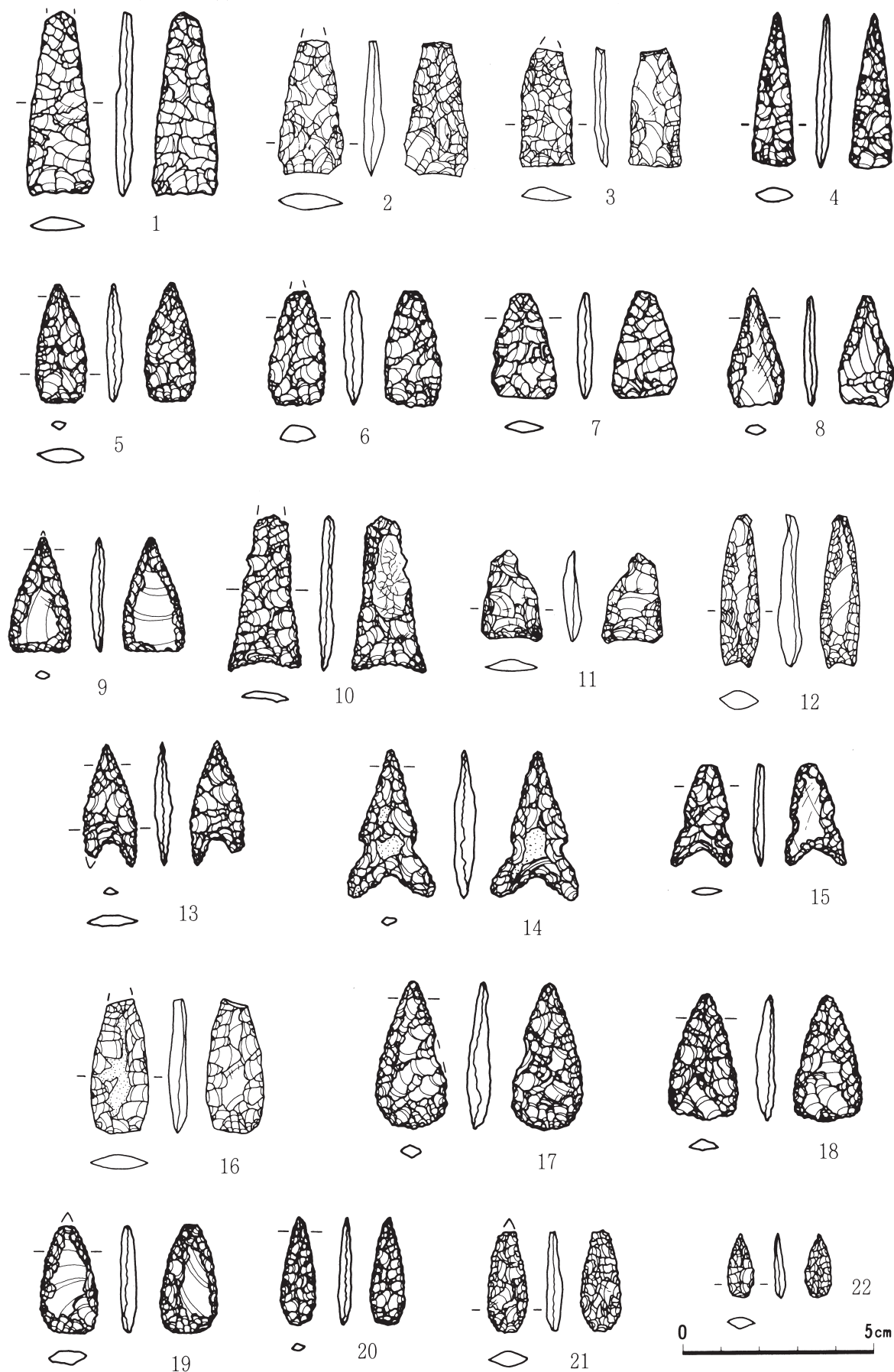


図88 石鏃(1)

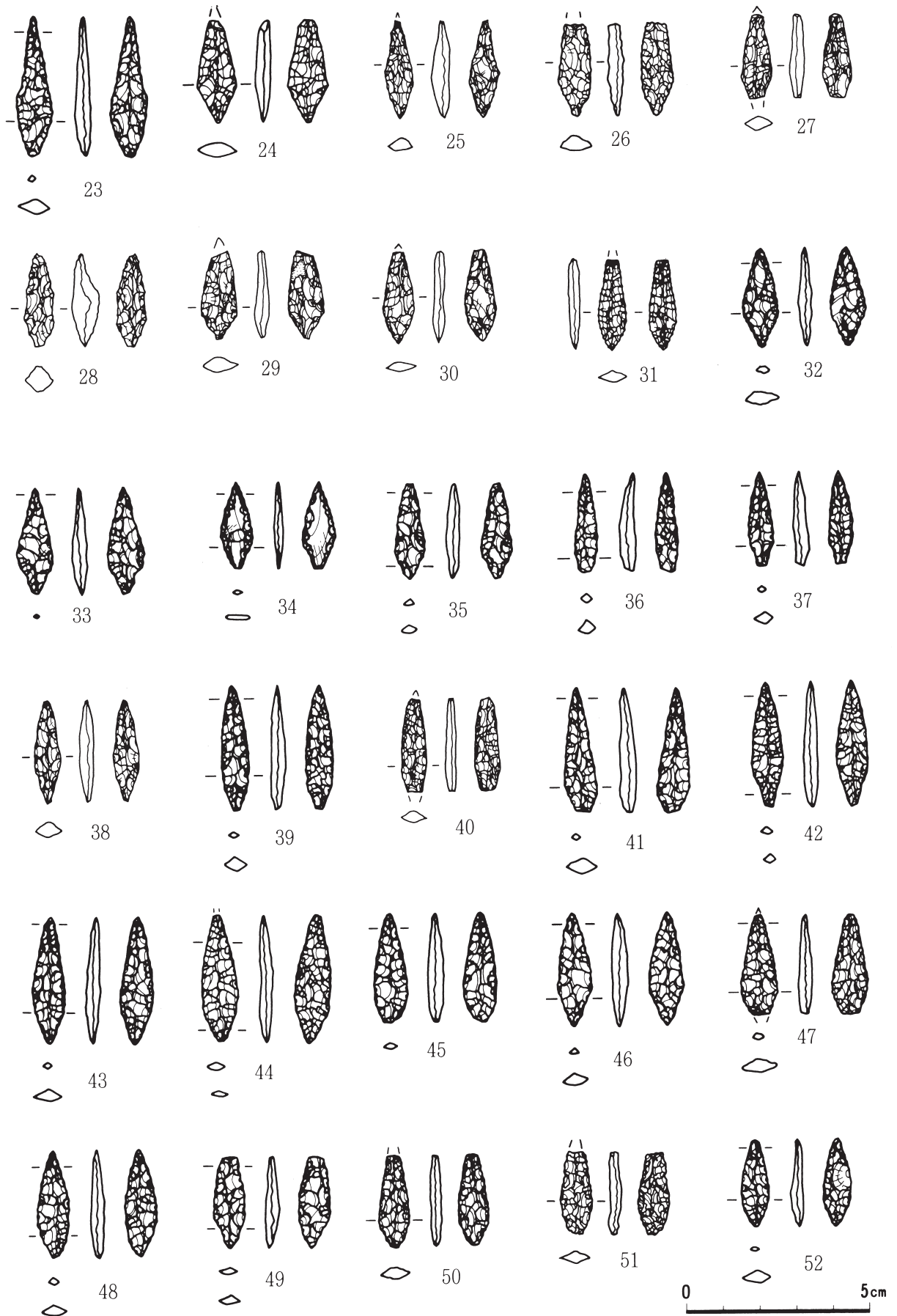


図89 石鏃(2)

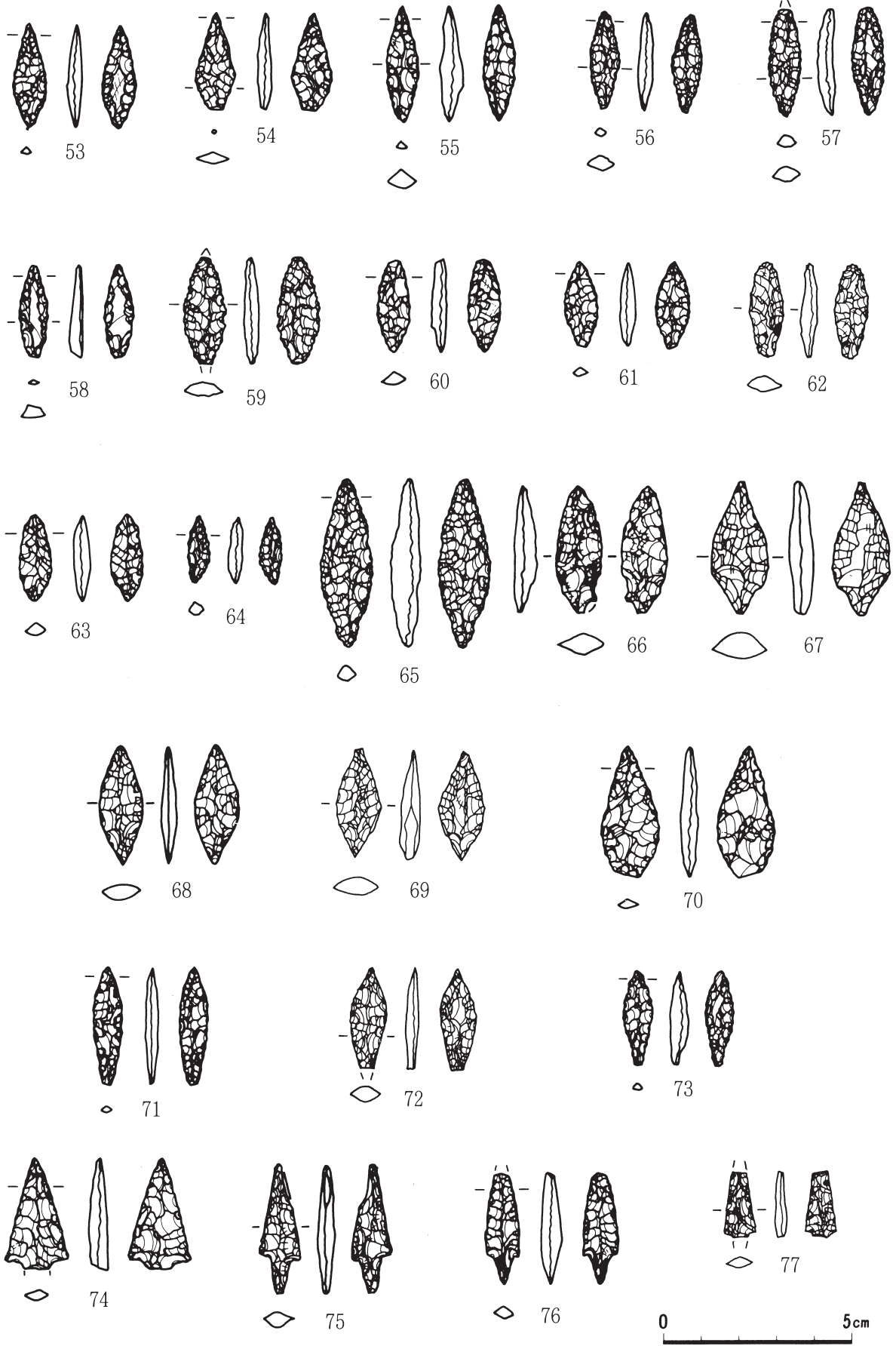


图90 石鏃(3)

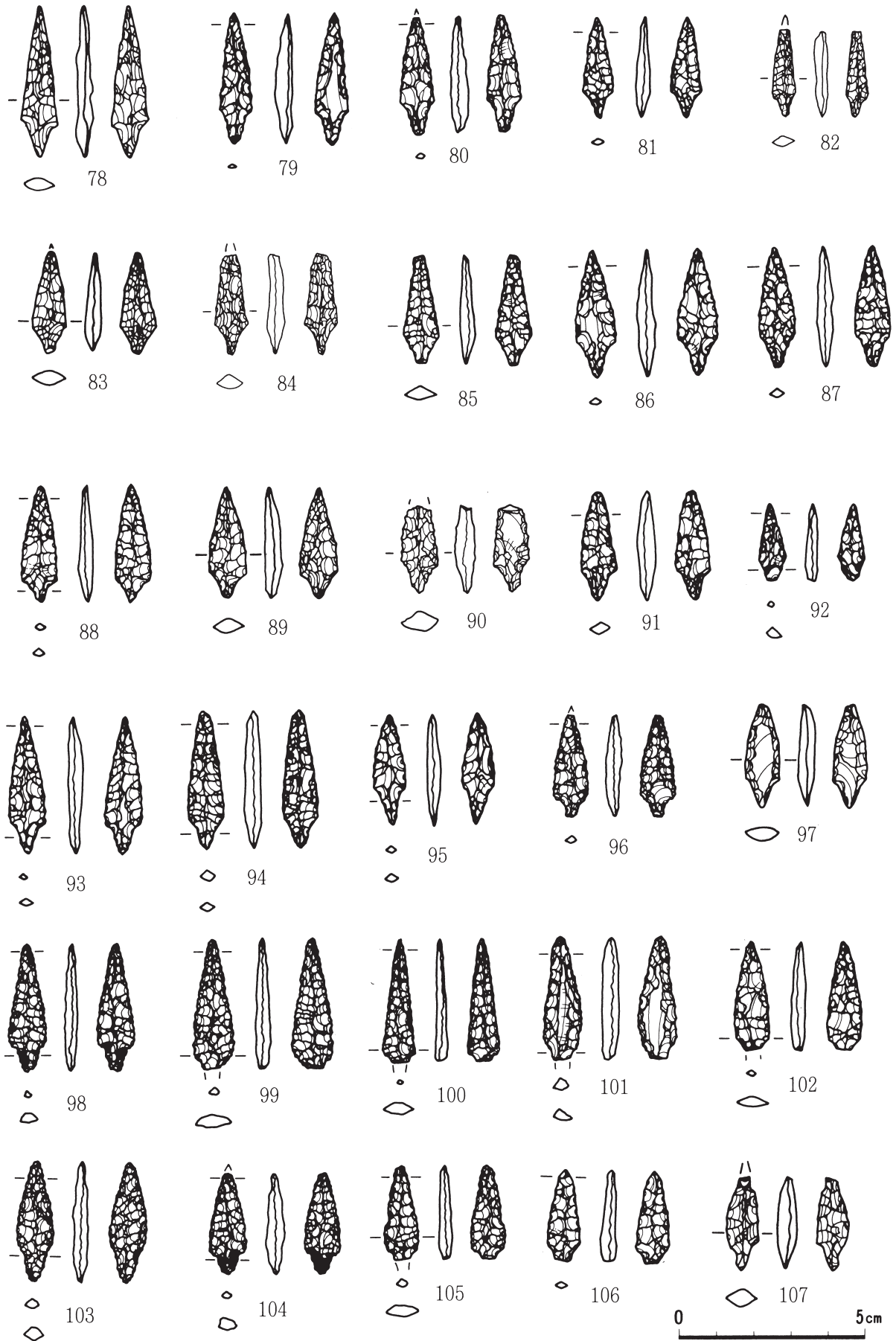


図91 石鏃(4)

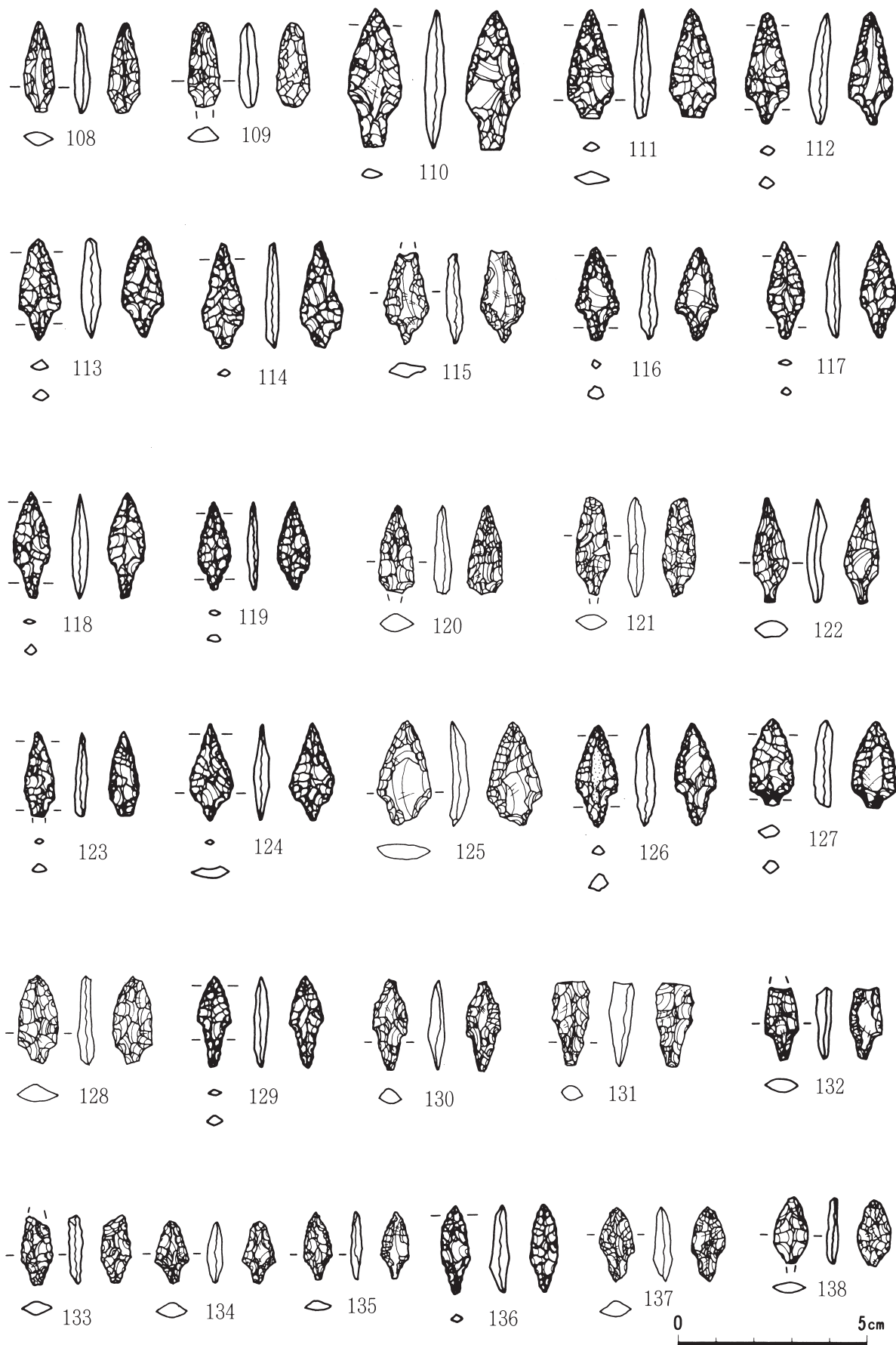


图92 石鏃(5)

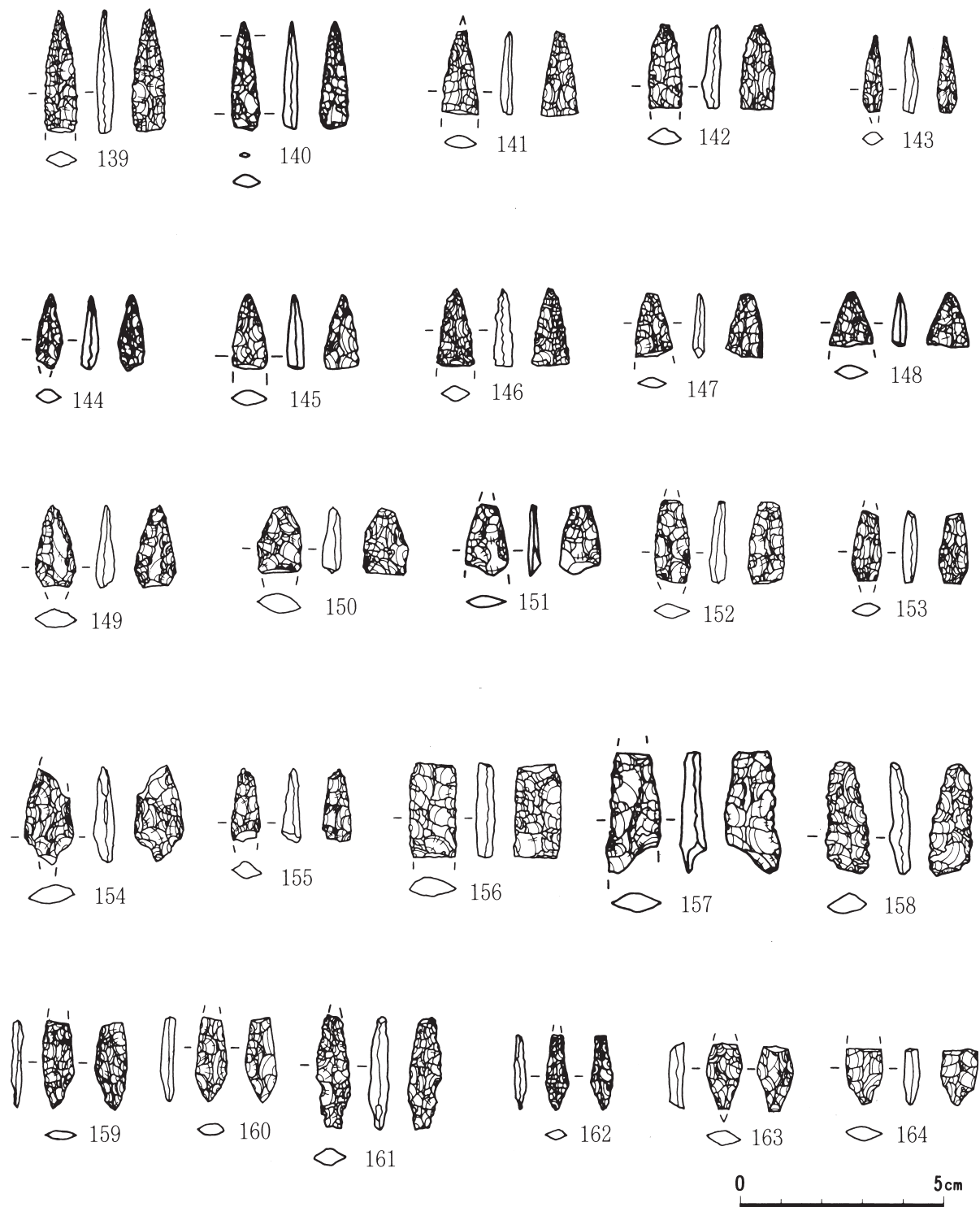


図93 石鏃(6)

表6 石器計測表

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	石質	器種	備考	分類
図88-1	127	P-164	IV	(48.0)	18.0	4.5	(3.5)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	無平
2	22	G-120	II	(34.5)	16.5	4.5	(2.4)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	無平
-3	91	Q-163	IV	(31.0)	14.0	3.0	(1.6)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	無平
-4	82	P-161	IV	40.0	11.5	4.5	1.4	珉質頁岩	石鏃		無平
-5	170	表採		31.0	14.0	4.0	1.7	珉質頁岩	石鏃		無平
-6	137	P-162	IV	(30.0)	15.0	5.5	(2.1)	玉髓	石鏃	先端欠	無平
-7	12	O-162	IV	27.0	17.0	4.0	1.9	玉髓質頁岩	石鏃		無平
-8	162	表採		28.0	15.0	4.0	1.1	玉髓質頁岩	石鏃		無平
-9	166	P-161	IV	30.0	17.0	4.0	1.4	珉質頁岩	石鏃		無平
-10	165	P-161	IV	(38.0)	18.0	4.0	(2.0)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	無凹
-11	68	F-135	II	(23.5)	16.0	3.0	(1.0)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	無凹
-12	196	F-138		39.5	10.0	4.5	2.2	珉質頁岩	石鏃		無凹
-13	121	Q-167	III	(32.0)	14.0	5.0	(1.4)	玉髓	石鏃	基部欠	無凹
-14	139	Q-164	III	38.5	23.0	6.0	2.8	珉質頁岩	石鏃	特殊	無凹
-15	51	Q-163	IV	(26.5)	16.0	3.0	(1.2)	珉質頁岩	石鏃	先端欠、特殊	無凹
-16	195	G-136		(34.5)	15.0	4.5	(2.5)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	円基
-17	161	P-164	IV	38.0	18.0	6.0	3.5	黒曜石	石鏃		円基
-18	172	F-137	I	(33.0)	19.0	5.0	(2.5)	珉質頁岩	石鏃	基部欠	円基
-19	163	P-164	IV	(23.0)	15.0	4.0	(1.9)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	円基
-20	131	P-165	IV	(28.0)	9.0	3.5	(0.7)	玉髓質頁岩	石鏃	基部欠	円基
-21	93	P-165	IV	(25.5)	10.0	4.0	(0.7)	珉質頁岩	石鏃	両端欠	円基
-22	74	Q-165	III	16.5	7.0	2.5	0.2	珉質頁岩	石鏃		円基
図89-23	77	Q-162	IV	33.5	10.0	4.5	1.0	珉質頁岩	石鏃		尖基
-24	183	E-136		(27.5)	10.5	4.0	(0.7)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-25	50	表採	IV	(26.5)	8.0	4.0	(0.8)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-26	147	Q-164	IV	(24.5)	8.5	4.0	(0.7)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-27	107	Q-164	IV	(22.5)	8.5	4.0	(0.5)	珉質頁岩	石鏃	両端欠	尖基
-28	7	R-163	IV	(25.0)	8.0	7.5	(0.7)	珉質頁岩	石鏃	基部欠	尖基
-29	41	P-165	IV	(23.0)	9.5	4.0	(0.5)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-30	44	Q-165	IV	(24.5)	8.5	3.5	(0.5)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-31	8	表採		(24.0)	7.5	3.0	(0.3)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-32	133	P-116	II	26.5	10.0	4.0	0.5	珉質頁岩	石鏃		尖基
-33	17	Q-163	III	29.0	10.0	4.0	0.8	珉質頁岩	石鏃		尖基
-34	67	Q-163	III	23.5	9.0	3.0	0.5	珉質頁岩	石鏃		尖基
-35	115	Q-164	III	(26.0)	8.5	4.0	(0.4)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-36	94	Q-163	III	(26.5)	6.0	5.0	(0.5)	珉質頁岩	石鏃	基部欠	尖基
-37	63	Q-162	IV	(25.0)	7.0	4.0	(0.4)	珉質頁岩	石鏃	基部端欠、アスファ	尖基
-38	47	Q-163	III	27.5	7.0	4.0	0.5	珉質頁岩	石鏃		尖基
-39	31	Q-163	III	33.5	8.0	4.0	0.6	珉質頁岩	石鏃		尖基
-40	35	P-165	IV	(25.0)	7.0	3.0	(0.4)	珉質頁岩	石鏃	両端欠	尖基
-41	52	Q-165	III	(33.5)	9.0	5.0	(0.9)	珉質頁岩	石鏃	基部欠	尖基
-42	23	Q-167	III	34.0	9.0	4.0	0.8	珉質頁岩	石鏃		尖基
-43	71	Q-165	III	34.0	9.0	4.5	1.0	珉質頁岩	石鏃		尖基
-44	128	Q-164	IV	(34.0)	10.0	4.0	(0.8)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-45	58	Q-164	IV	29.5	9.0	4.5	0.8	珉質頁岩	石鏃		尖基
-46	116	Q-163	III	31.0	10.0	4.5	0.7	珉質頁岩	石鏃		尖基
-47	141	R-166	IV	(27.0)	10.0	4.0	(0.6)	珉質頁岩	石鏃	基部欠	尖基
-48	84	Q-164	III	29.0	9.0	4.0	0.8	黒曜石	石鏃		尖基
-49	14	Q-165	IV	(24.5)	9.0	4.0	(0.6)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-50	143	Q-162	IV	(25.0)	8.0	2.0	(0.5)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-51	80	R-166	IV	(22.0)	8.0	3.0	(0.5)	珉質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-52	33	Q-164	II	23.5	8.0	3.5	0.3	珉質頁岩	石鏃		尖基
図90-53	11	F-129	II	27.0	4.0	2.0	0.7	珉質頁岩	石鏃		尖基
-54	61	Q-164	III	(26.0)	11.0	4.0	(0.7)	珉質頁岩	石鏃	基部端欠	尖基
-55	81	Q-165	IV	31.0	8.5	6.5	0.9	珉質頁岩	石鏃		尖基
-56	125	Q-165	III	26.0	8.0	4.0	0.6	珉質頁岩	石鏃		尖基

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	石 質	器種	備 考	分類
-57	145	Q-164	III	(28.0)	8.0	4.0	(0.8)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-58	55	R-165	IV	24.5	8.0	4.0	0.6	珩質頁岩	石鏃		尖基
-59	167	Q-163	II	(23.0)	11.0	4.0	(0.8)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-60	15	Q-164	IV	(25.0)	9.0	4.5	(0.8)	黒曜石	石鏃	先端欠	尖基
-61	113	Q-163	IV	22.0	9.0	4.5	0.8	玉髓質珩質頁岩	石鏃		尖基
-62	10	Q-164	IV	22.5	9.0	4.0	0.5	珩質頁岩	石鏃	アスファルト	尖基
-63	20	Q-165	III	22.5	8.5	4.5	0.5	珩質頁岩	石鏃		尖基
-64	140	P-162	IV	17.5	6.0	4.0	0.2	珩質頁岩	石鏃		尖基
-65	136	Q-162	IV	44.0	14.0	8.0	3.8	珩質頁岩	石鏃		尖基
-66	154	Q-164	II	(33.0)	12.0	6.0	(1.8)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	尖基
-67	181	表 採		(34.5)	15.0	6.5	(2.9)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-68	182	F-142		31.0	11.0	4.0	0.8	珩質頁岩	石鏃		尖基
-69	194	F-136		28.5	12.0	5.5	1.6	珩質頁岩	石鏃		尖基
-70	73	P-162	IV	34.0	15.5	5.0	21.0	珩質頁岩	石鏃		尖基
-71	28	Q-167	IV	(30.5)	8.0	3.5	(0.5)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	尖基
-72	53	Q-163	III	(26.5)	9.5	4.5	(0.7)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	尖基
-73	156	Q-163	III	25.0	8.0	5.0	0.5	珩質頁岩	石鏃		尖基
-74	79	Q-163	III	(29.5)	17.0	5.0	(1.4)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	尖基
-75	P-176	165	IV	33.5	10.5	4.0	0.9	珩質頁岩	石鏃		有平
-76	24	Q-165	III	(29.0)	9.0	6.0	(1.0)	珩質頁岩	石鏃	先端欠、アスファ	有平
-77	57	R-166	IV	(17.5)	8.5	3.0	(0.3)	珩質頁岩	石鏃	両端欠	有平
図91-78	178	F-136		40.5	9.5	4.0	1.2	珩質頁岩	石鏃		有凸
-79	119	Q-163	IV	35.0	9.0	5.0	1.0	緑色細粒凝灰岩	石鏃		有凸
-80	149	Q-165	IV	31.0	9.0	3.0	1.0	珩質頁岩	石鏃		有凸
-81	109	Q-162	IV	27.0	8.5	4.0	0.5	珩質頁岩	石鏃		有凸
-82	118	Q-165	IV	(23.0)	5.5	3.5	(0.3)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-83	185	F-138		(21.5)	9.0	3.5	(0.6)	珩質頁岩	石鏃	両端欠	有凸
-84	187	G-137		(21.5)	9.0	4.5	(0.9)	玉髓質珩質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-85	104	Q-164	IV	(29.0)	10.0	4.5	(0.6)	珩質頁岩	石鏃	両端欠	有凸
-86	92	Q-165	III	34.0	11.0	5.0	1.3	珩質頁岩	石鏃		有凸
-87	105	Q-162	IV	32.0	10.0	5.0	0.9	珩質頁岩	石鏃	アスファルト	有凸
-88	112	Q-164	IV	31.0	9.5	4.5	0.8	珩質頁岩	石鏃		有凸
-89	179	G-138		(29.5)	10.0	4.0	(0.8)	緑色細粒凝灰岩	石鏃	基部欠	有凸
-90	26	Q-163	IV	(22.5)	9.5	5.0	(1.0)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-91	83	Q-163	III	(29.0)	10.0	5.0	(0.7)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-92	13	Q-166	IV	21.0	8.0	3.0	0.3	珩質頁岩	石鏃	アスファルト	有凸
-93	60	Q-163	IV	36.0	10.0	4.0	1.2	珩質頁岩	石鏃		有凸
-94	37	P-165	IV	31.5	10.0	5.0	1.3	珩質頁岩	石鏃		有凸
-95	62	Q-164	IV	30.0	9.0	4.0	0.8	珩質頁岩	石鏃		有凸
-96	171	Q-165	IV	(22.0)	9.0	4.0	(0.9)	珩質頁岩	石鏃	両端欠	有凸
-97	180	F-148		(27.5)	9.0	4.0	(0.9)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-98	134	Q-164	IV	34.0	10.5	4.0	0.8	珩質頁岩	石鏃	アスファルト	有凸
-99	135	Q-164	III	(35.0)	11.0	4.5	(0.9)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-100	146	Q-166	IV	(33.0)	9.0	3.0	(0.3)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-101	157	P-162	IV	(33.0)	11.0	5.0	(1.5)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-102	114	Q-164	III	(29.0)	9.5	4.0	(0.8)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-103	169	表 採		32.0	10.0	4.0	0.7	珩質頁岩	石鏃	アスファルト	有凸
-104	158	Q-163	III	27.0	10.0	5.0	0.7	珩質頁岩	石鏃	アスファルト	有凸
-105	142	Q-164	III	(25.0)	9.5	4.0	(0.5)	珩質頁岩	石鏃	両端欠	有凸
-106	18	Q-165	IV	(24.0)	9.0	4.5	(0.5)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-107	184	E-136		(24.5)	8.5	5.0	(0.9)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
図92-108	186	F-139		(23.5)	8.0	3.0	(0.6)	玉 髓	石鏃	基部端欠	有凸
-109	188	F-138		(22.0)	8.5	4.0	(0.6)	珩質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-110	59	P-161	IV	36.5	14.0	6.0	2.3	珩質頁岩	石鏃		有凸
-111	27	Q-163	III	(29.0)	12.5	4.5	(1.0)	珩質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-112	87	Q-164	IV	30.0	12.0	5.0	0.9	珩質頁岩	石鏃		有凸

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	石 質	器種	備 考	分類
-113	16	Q-163	IV	26.0	11.0	5.5	1.2	珪質頁岩	石鏃		有凸
-114	78	Q-163	IV	(27.5)	11.5	3.5	(0.8)	黒曜石	石鏃	基部端欠	有凸
-115	148	Q-164	IV	(23.5)	11.5	4.0	(0.9)	珪質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-116	132	Q-165	IV	24.0	11.5	5.0	1.0	珪質頁岩	石鏃		有凸
-117	70	Q-163	III	25.0	10.0	4.0	0.7	珪質頁岩	石鏃		有凸
-118	34	Q-164	IV	27.5	10.0	4.0	0.9	珪質頁岩	石鏃		有凸
-119	123	Q-163	III	23.0	9.0	3.0	0.3	珪質頁岩	石鏃		有凸
-120	46	Q-165	III	(23.0)	9.5	4.5	(0.8)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-121	110	Q-166	IV	(25.5)	9.0	4.0	(0.4)	珪質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-122	177	F-139		22.0	9.0	4.5	0.7	珪質頁岩	石鏃	アスファルト	有凸
-123	25	Q-164	IV	(22.0)	8.0	3.5	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-124	19	Q-164	III	25.0	12.0	4.0	0.6	珪質頁岩	石鏃		有凸
-125	124	Q-164	IV	(27.0)	14.0	4.0	(1.4)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
-126	153	Q-165	IV	22.0	11.0	6.0	1.2	緑色細粒凝灰岩	石鏃		有凸
-127	66	Q-164	IV	(22.5)	12.0	5.0	(1.2)	珪質頁岩	石鏃	基部端欠、アスファ	有凸
-128	111	Q-165	IV	(22.5)	10.5	4.5	0.7	珪質頁岩	石鏃	両端欠	有凸
-129	85	Q-163	III	24.0	9.5	4.0	0.6	珪質頁岩	石鏃		有凸
-130	48	Q-164	III	23.0	9.5	5.0	0.8	珪質頁岩	石鏃		有凸
-131	72	Q-164	III	(22.0)	10.0	6.5	(0.5)	珪質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-132	164	Q-165	III	(18.5)	8.5	4.0	(0.6)	緑色細粒凝灰岩	石鏃	先端欠	有凸
-133	102	Q-165	III	(17.5)	7.5	3.5	(0.4)	珪質頁岩	石鏃	先端欠	有凸
-134	45	Q-164	IV	16.0	9.0	4.0	0.5	鉄石	石鏃		有凸
-135	29	Q-163	III	17.5	7.0	3.0	0.3	珪質頁岩	石鏃		有凸
-136	97	Q-163	III	23.0	8.0	5.0	0.5	珪質頁岩	石鏃		有凸
-137	101	Q-165	III	19.5	9.0	5.0	0.7	珪質頁岩	石鏃		有凸
-138	155	P-165	III	(17.0)	9.0	3.0	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	有凸
図93-139	6	Q-164	IV	(29.5)	8.0	3.5	(0.6)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-140	100	Q-165	IV	(26.0)	7.0	4.0	(0.4)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-141	192	E-138		(20.5)	(9.0)	(3.0)	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-142	99	R-166	IV	(20.0)	8.0	4.5	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-143	38	Q-164	IV	(18.5)	5.0	3.5	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-144	150	Q-164	III	(18.0)	5.0	4.0	(0.3)	黒曜石	石鏃	基部欠	欠損
-145	189	E-135		(18.0)	8.5	(4.0)	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-146	88	P-166	II	(18.5)	(9.0)	5.0	(0.5)	珪質頁岩	石鏃	先端部	欠損
-147	65	Q-164	IV	(15.5)	(9.0)	3.0	(0.4)	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-148	160	Q-162	IV	(13.0)	(10.5)	(3.5)	(0.2)	珪質頁岩	石鏃	先端部片	欠損
-149	40	P-165	IV	(20.0)	10.0	4.5	0.8	珪質頁岩	石鏃	基部欠	欠損
-150	69	R-166	IV	(16.0)	11.0	5.0	(0.7)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-151	173	F-137	I	(17.0)	(10.0)	(3.0)	(0.5)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-152	36	Q-167	III	(20.0)	9.0	4.0	(0.5)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-153	49	Q-163	III	(17.0)	7.5	3.5	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-154	95	Q-165	III	(23.0)	12.0	5.0	(0.9)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-155	39	Q-163	III	(17.5)	7.0	5.0	(0.4)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-156	9	Q-164	IV	(22.5)	11.0	4.5	(1.5)	黒曜石	石鏃	基部欠	欠損
-157	159	Q-164	IV	(29.0)	(13.0)	6.0	(1.3)	珪質頁岩	石鏃	破片	欠損
-158	89	Q-164	IV	(26.5)	10.5	5.0	(0.9)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-159	144	Q-163	IV	(21.0)	8.0	2.5	(0.4)	珪質頁岩	石鏃	先端欠	欠損
-160	43	Q-165	IV	(20.5)	7.5	3.5	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	先端欠	欠損
-161	96	Q-164	IV	(27.0)	(8.0)	4.5	(0.6)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-162	90	Q-165	III	(18.0)	5.5	2.5	0.2	珪質頁岩	石鏃	先端欠	欠損
-163	190	E-135		(16.0)	9.0	3.5	(0.5)	珪質頁岩	石鏃	両端欠	欠損
-164	191	E-136		(1305)	(9.0)	(3.5)	(0.3)	珪質頁岩	石鏃	基部片	欠損

石 槍 (図94—1～4)

4点出土した。完形品2点、欠損品2点である。

1はやや肉厚の細身のもので、器体中央に凸基の基部を持つ。茎部は太く厚めに作出されており、茎部の根元に最大厚を持つ。尖頭部の側縁は直線的で、先端はやや丸みを帯びている。形状などから弥生時代のものと考えられる。

2は尖頭部が鉞状のもので、尖端部寄りの側縁はやや丸みを持っている。基部はやや凸基気味の平基である。器体は全体に肉厚であるが、尖頭部の側縁は急角度の剥離で厚さを減じている。形状などから弥生時代のものと考えられる。

3は基部側の破片で、茎部は短く作出されている。側縁の調整および形状からスクレーパー類の可能性も考えられる。石質は黒曜石である。

4は尖端部を欠失しており、調整が細部までに至っていない。未製品と考えられる。

石 錐 (図95—1～13)

13点出土した。基部は素材自体の剥離痕か破損かが判然としないものもあり、または錐先も折損面が不明のものが多い。

1～6は剥片を素材にし、主に錐部だけを加工調整したものである。8～10は器体全体を細身の錐状に整形したもので、ほぼ全面に調整痕が認められる。11は両端の形状から石鏃の可能性も考えられるが、両端部を機能部とした錐とした。12は錐部には調整が加えられていないもので、図上では表現しきれないが側縁に微細なスレを伴う刃こぼれと、回転によると思われる折損が認められることからこの類とした。13は錐部を調整しているもので、尖端部に回転による折損がみられる。

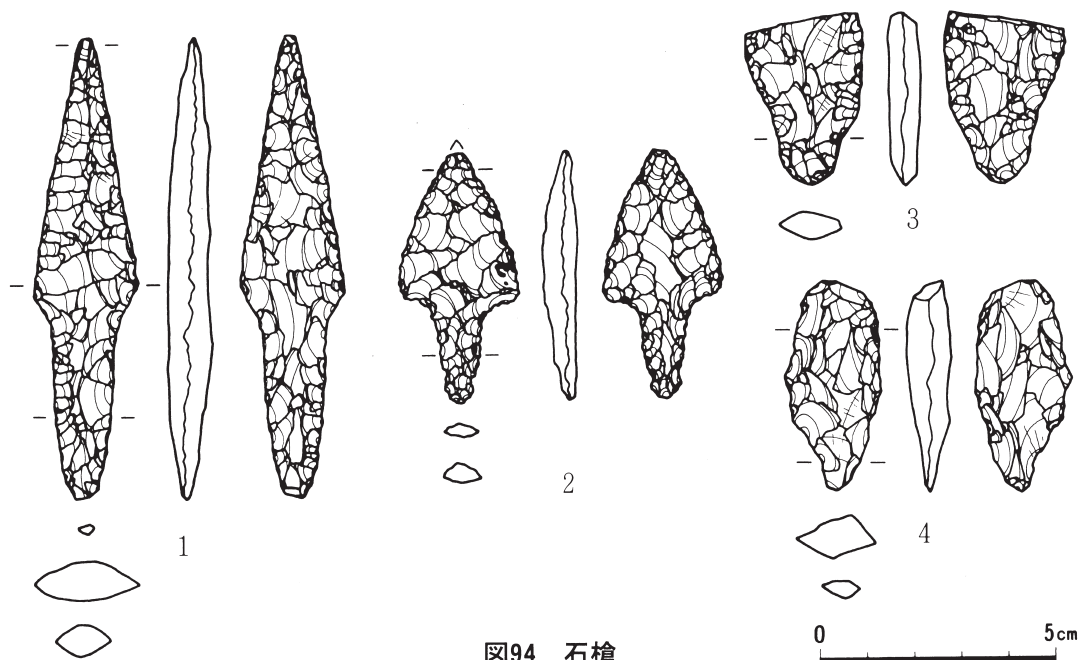


図94 石槍

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	石 質	器種	備 考
図94-1	1	P-165	Ⅳ	95.0	22.0	9.0	15.5	珪質頁岩	石槍	弥生時代?
-2	138	Q-162	Ⅳ	52.5	25.0	8.0	6.4	珪質頁岩	石槍	弥生時代?
-3	2	E-127	Ⅱ	(37.0)	(27.0)	8.0	(6.5)	黒曜石	石槍	基部
-4	3	Q-163	Ⅱ	(44.0)	21.0	9.0	(7.3)	珪質頁岩	石槍	基部、未製品

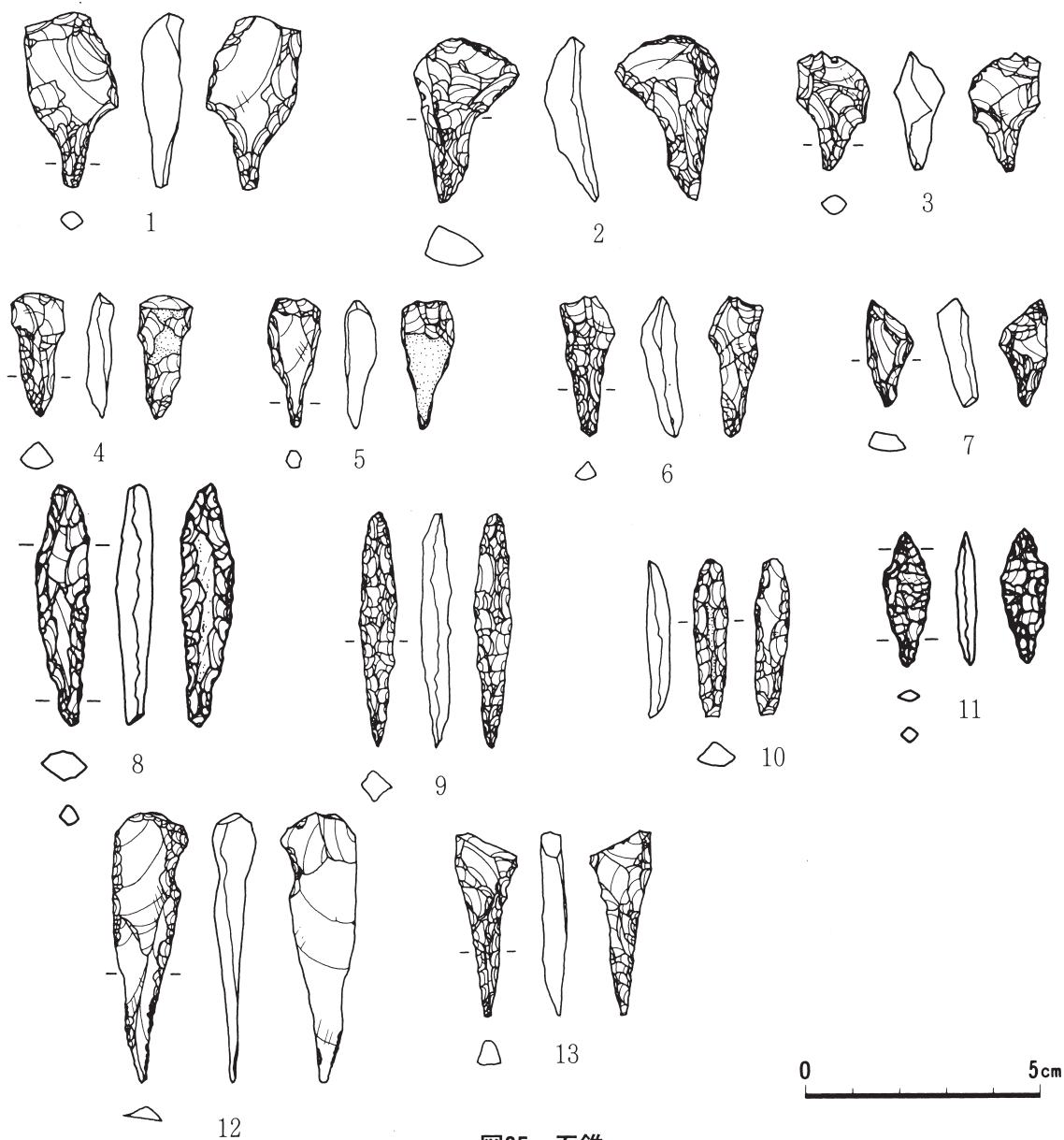


図95 石錐

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	石質	器種	備考
図95-1	198	F-139	I	(37.0)	19.0	7.5	(5.5)	珩質頁岩	石錐	先端欠
-2	202	H-136	II	35.0	22.5	8.0	5.0	珩質頁岩	石錐	破片?
-3	200	F-139	I	(24.5)	15.0	12.0	(2.0)	珩質頁岩	石錐	両端欠
-4	203	Q-164	IV	26.0	11.0	9.0	1.5	玉髓質珩質頁岩	石錐	
-5	207	F-140		26.5	11.0	7.0	2.2	珩質頁岩	石錐	
-6	201	P-164	IV	(30.0)	11.0	8.0	(2.0)	珩質頁岩	石錐	先端欠
-7	208	F-136		13.0	10.0	6.0	1.4	緑色細粒凝灰岩	石錐	破片
-8	30	Q-163	IV	(50.5)	11.5	8.0	(4.3)	珩質頁岩	石錐	先端欠、基部端欠
-9	206	G-142		49.5	8.0	6.5	2.4	珩質頁岩	石錐	
-10	205	表採		33.0	7.5	5.0	1.1	珩質頁岩	石錐	
-11	75	Q-163	IV	(28.0)	10.5	4.0	(0.8)	珩質頁岩	石錐	側縁欠
-12	204	Q-164	IV	57.0	15.5	5.5	3.5	珩質頁岩	石錐	
-13	199	F-139	I	37.0	13.0	6.0	2.1	珩質頁岩	石錐	

石 匙 (図96・図97)

30点出土した。つまみを作出しているものをこの類とした。つまみの位置によって縦型と横型に分類した。縦型石匙27点、横型石匙3点である。

縦型石匙 (図96-1～図97-27)

1～3は全面にわたって器体整形を行っているもので、1は非常に細身で、先端欠損後に再調整している。2は周縁全体を丸く整形している。4・6は両面ともに周縁を加工しており、7は片側縁と基端を除いて両面に調整が施されている。6は横型剥片を素材とし、バルブ側をつまみ状に残しながらも一端に両面から剥離を加えて、つまみとしている特殊なものである。機能的には横型の用途を持つものと考えられるが、つまみの位置から縦型とした。5・8は器体全体を主に片面から調整しているが、先端部だけを両面から錐状に調整している。刺突具(ドリル)的用途を持つものと考えられる。

9～18は片面加工のもので、11・13・15・17・18はほぼ片面全体に整形が行われている。9・10・14は片面の周縁全体に、12・16は主に片面加工で、両面とも側縁の一部に未加工部を残す。

19・20はつまみ以外は器体調整を行わず、素材に簡単な刃部調整だけを行っているものである。

21～27は欠損品である。22～24は欠損品としたが、一部だけの欠損で再調整品として実用していた可能性がある。

横型石匙 (図97-28～30)

28は小型で両面ともに刃部調整を行っている。29は片面全面と裏面の側縁部に加工が加えられている。つまみは両面からの加工である。30は周縁に加工が施されているが、刃部は片面からの調整である。つまみは、ほとんどが両面からの加工で、片面だけのものは3点である。

使用されている石材は、30点中25点が珪質頁岩である。このほか、玉髄質珪質頁岩2点(11・25)、玉髄1点(8)、黒曜石1点(23)、緑色細粒凝灰岩1点(28)が素材として用いられている。

石 筥 (図98-1～3)

3点出土した。完形品1点、欠損品2点である。

1はほぼ長方形の器体で、器体調整は片面全面と裏面の側縁部になされている。刃部は片面からの調整で、裏面は主要剥離面をそのまま残している。刃部角は73度である。

2は基部側を欠失しているが、器体の形状は長方形であったと考えられる。1と同様に器体調整は片面と裏面の側縁になされており、刃部は片面だけの調整である。刃部角は58度と鋭角である。

3は撥形の器体で、1・2と同様に裏面に主要剥離面を残している。刃部は湾曲気味であり、基部端を欠失している。刃部角は74度である。

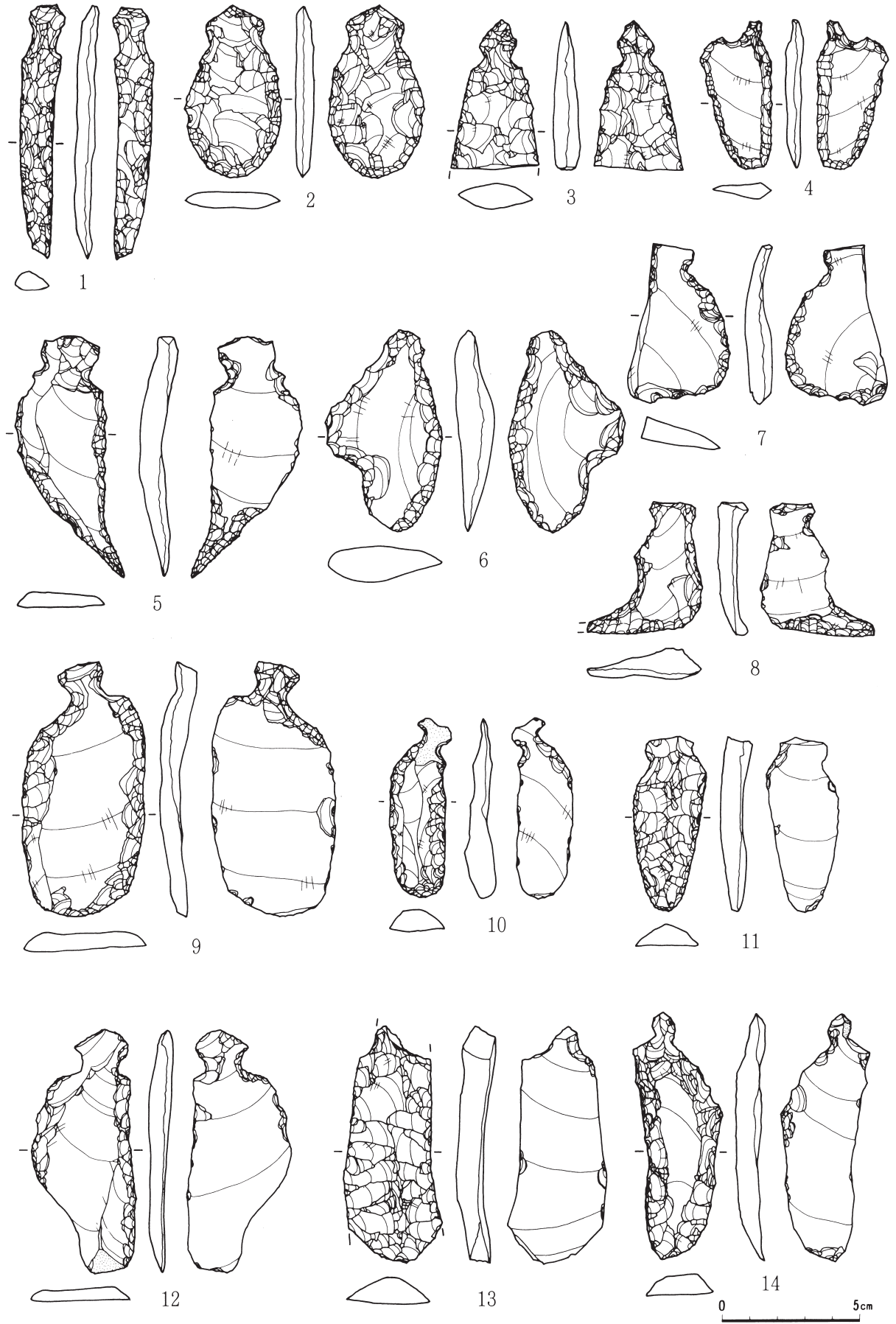


图96 石匙(1)

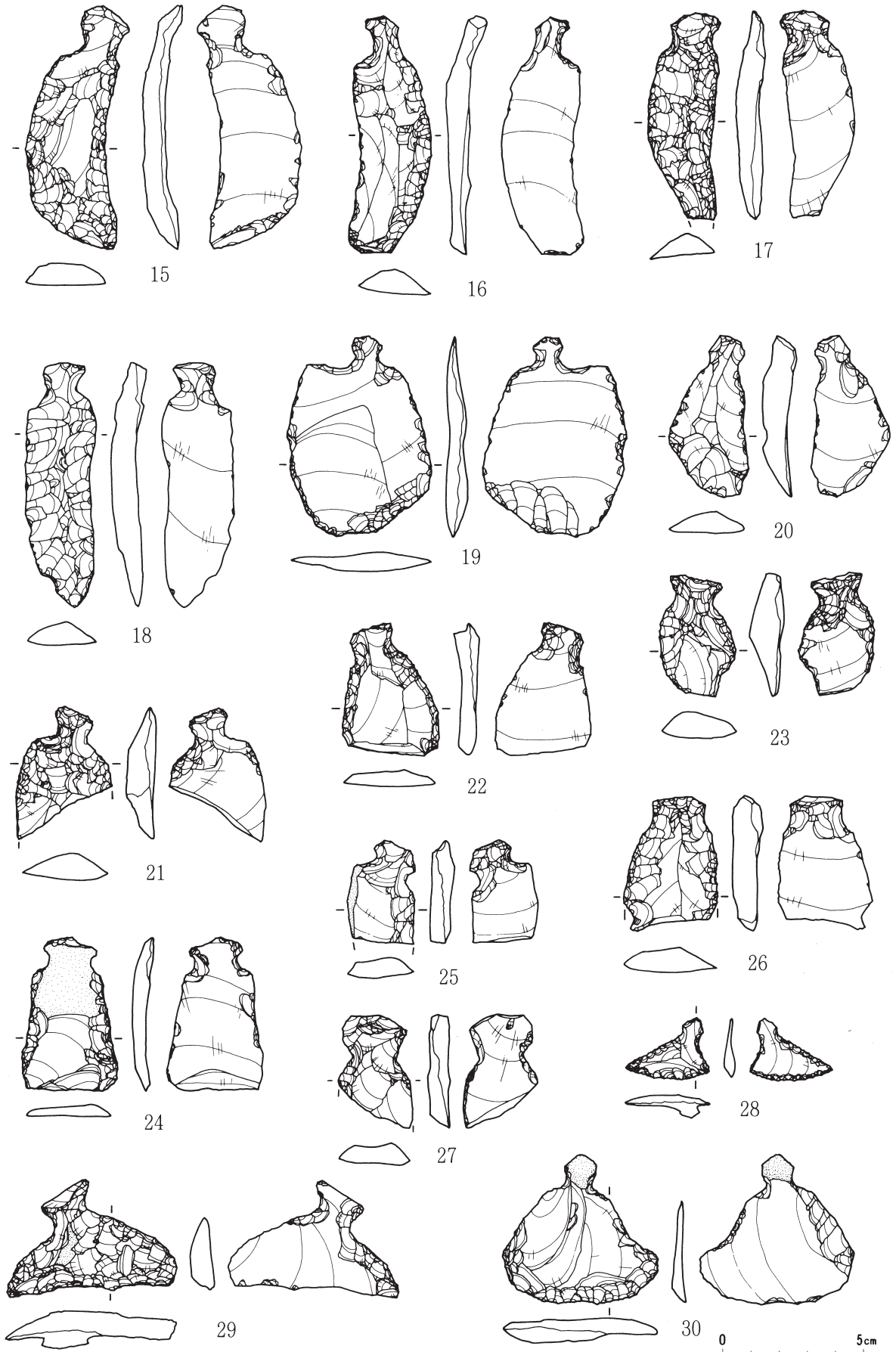


図97 石匙(2)

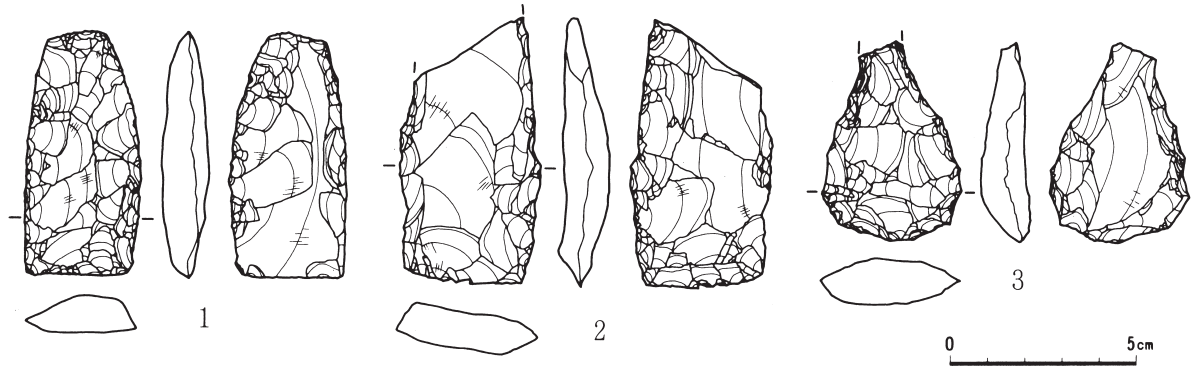


図98 石筈

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	石 質	器種	備 考
図96- 1	237	P-162	IV	91.0	15.0	7.5	9.7	珩質頁岩	石匙	
- 2	252	Q-164	IV	62.0	34.5	5.5	16.9	珩質頁岩	石匙	
- 3	220	P-162	IV	(52.0)	(31.5)	(9.5)	(13.2)	珩質頁岩	石匙	欠損
- 4	228	Q-162	IV	52.5	25.5	5.5	7.5	珩質頁岩	石匙	
- 5	211	Q-167	IV	86.0	32.5	8.0	20.8	珩質頁岩	石匙	先端錐状で光沢
- 6	210	P-162	IV	72.0	41.0	11.5	32.7	珩質頁岩	石匙	
- 7	217	R-166	II	(57.0)	(36.0)	(8.0)	(16.1)	珩質頁岩	石匙	欠損、縦割れ
- 8	223	P-161	IV	47.0	(34.0)	(11.0)	(10.4)	玉 髓	石匙	先端錐状
- 9	215	Q-162	IV	90.0	44.0	7.0	31.3	珩質頁岩	石匙	
-10	241	F-139		64.0	20.0	8.0	11.2	珩質頁岩	石匙	
-11	218	Q-163	IV	(62.0)	26.5	(9.5)	(14.8)	玉髓珩質頁岩	石匙	基部欠
-12	212	P-162	III	86.5	37.5	7.5	20.0	珩質頁岩	石匙	
-13	214	O-164	II	(84.5)	(35.5)	(12.0)	(32.0)	珩質頁岩	石匙	両端欠
-14	236	Q-166	IV	(88.5)	28.5	11.0	26.3	珩質頁岩	石匙	基部欠
図97-15	238	Q-165	IV	85.0	28.0	10.0	22.6	珩質頁岩	石匙	
-16	216	Q-162	IV	83.5	25.0	8.0	18.1	珩質頁岩	石匙	
-17	219	P-162	III	(72.5)	27.0	8.5	(14.7)	珩質頁岩	石匙	先端欠
-18	240	J-158		95.0	24.5	8.0	18.4	珩質頁岩	石匙	
-19	253	P-166	IV	69.0	49.5	7.5	21.4	珩質頁岩	石匙	
-20	233	Q-162	IV	56.0	27.5	8.0	11.7	珩質頁岩	石匙	
-21	231	Q-162	IV	(46.0)	(34.0)	(10.0)	(10.5)	珩質頁岩	石匙	基部片
-22	234	O-161	IV	(45.5)	33.5	5.0	11.1	珩質頁岩	石匙	刃部欠
-23	226	O-160	III	(41.0)	26.5	11.5	(9.6)	黒 曜 石	石匙	刃部欠
-24	213	P-162	III	(53.0)	34.0	7.5	(9.3)	珩質頁岩	石匙	欠損後再加工?
-25	230	Q-164	IV	(35.5)	(24.0)	(9.0)	(7.2)	玉髓珩質頁岩	石匙	基部片
-26	224	P-162	IV	(43.0)	(33.5)	(10.5)	(15.6)	珩質頁岩	石匙	基部片
-27	235	R-166	IV	(39.5)	(26.0)	(8.0)	(7.5)	珩質頁岩	石匙	基部片
-28	227	Q-164	IV	22.0	29.0	4.5	1.8	緑色細粒凝灰岩	石匙	
-29	221	P-161	III	40.5	59.5	8.5	15.9	珩質頁岩	石匙	
-30	222	Q-162	IV	51.0	54.5	4.5	14.5	珩質頁岩	石匙	
図98- 1	250	Q-167	IV	65.0	31.5	12.0	27.8	珩質頁岩	石筈	刃部角73度
- 2	251	Q-162	III	(71.0)	(37.5)	(10.5)	(37.1)	珩質頁岩	石筈	刃部角58度
- 3	225	G-120	II	(53.0)	37.5	12.0	(23.4)	珩質頁岩	石筈	刃部角74度

不定形石器（図99～図104）

不定形石器としたものは、143点出土した。分類にあたっては、機能を加味しつつ、器体の加工状態に重点を置いた。基準は次のとおりである。

A、何らかの定形石器の欠損品、または定形石器の可能性はあるが断定しえないもの。B、器体全面を整形しているもの。C、主に、器体の片面全面を整形しているもの。D、主に周縁を整形しているもの。E、使用目的部分だけを整形しているもの。F、ごく一部を整形しているもの。G、器体の整形は行わず、使用目的だけの調整を行っているもの（片側縁・両側縁・端部・一部に細分可能）。H、ごく一部分に連続した微細剝離を加えているもの。I、連続した刃こぼれが認められるもの。

A～F類は、器体整形後に使用目的の刃部調整を行っているものと明確な刃部をもたないものがある。後者には欠損品が多いことから、基部側の破片または未製品の可能性が考えられる。

1～5は石鏃または石錐の可能性のあるものである。6・7は石錐の可能性が高い。

8～15は石鏃の可能性も考えられるが、両側縁の調整が異なっていることと器厚に一定性がないことから、片側縁を刃部とした搔器とした。16～29は何らかの石器の欠損品である。

30～67・69～71はB類～F類に相当するものである。ただ、E・F類としたものの器体調整の痕跡は、刃部加工の前段階としての調整か、素材とした剝片そのものの形状か不明確な部分が多い。30～32は形状が三角形を呈し、側縁に刃部を持つ。31は先端部に尖頭状の剝離を加えている。33・34は円形の刃部を構成するものである。35は筥状石器の可能性も考えられるが、端部の調整が雑なことから側縁使用の搔器とした。36は石匙に形状が似ているが、つまみを明瞭に作出していないことやバルブ側を幅広の基部としていることから搔器とした。37～62は搔器の類と考えられる。44・45は器体に抉りを作成しており、51～53・55は先端を鋭利に作出している。63・64・67は未製品または基部片と考えられる。

68～98は、G類としたものであるが、前述のE・F類と同様に、前後するF・H類との明確な分離は困難である。99～123はH類、124～143はI類としたものである。

不定形石器を概観したところ、両極打法による楔型石器及び石核の存在が認められない。また、横型剝片を素材とするものが少ないことなどから、本類の石器は概ね縄文時代のものと考えられる。

これら不定形石器としたもののほかに、剝片が1000片ほど出土している。

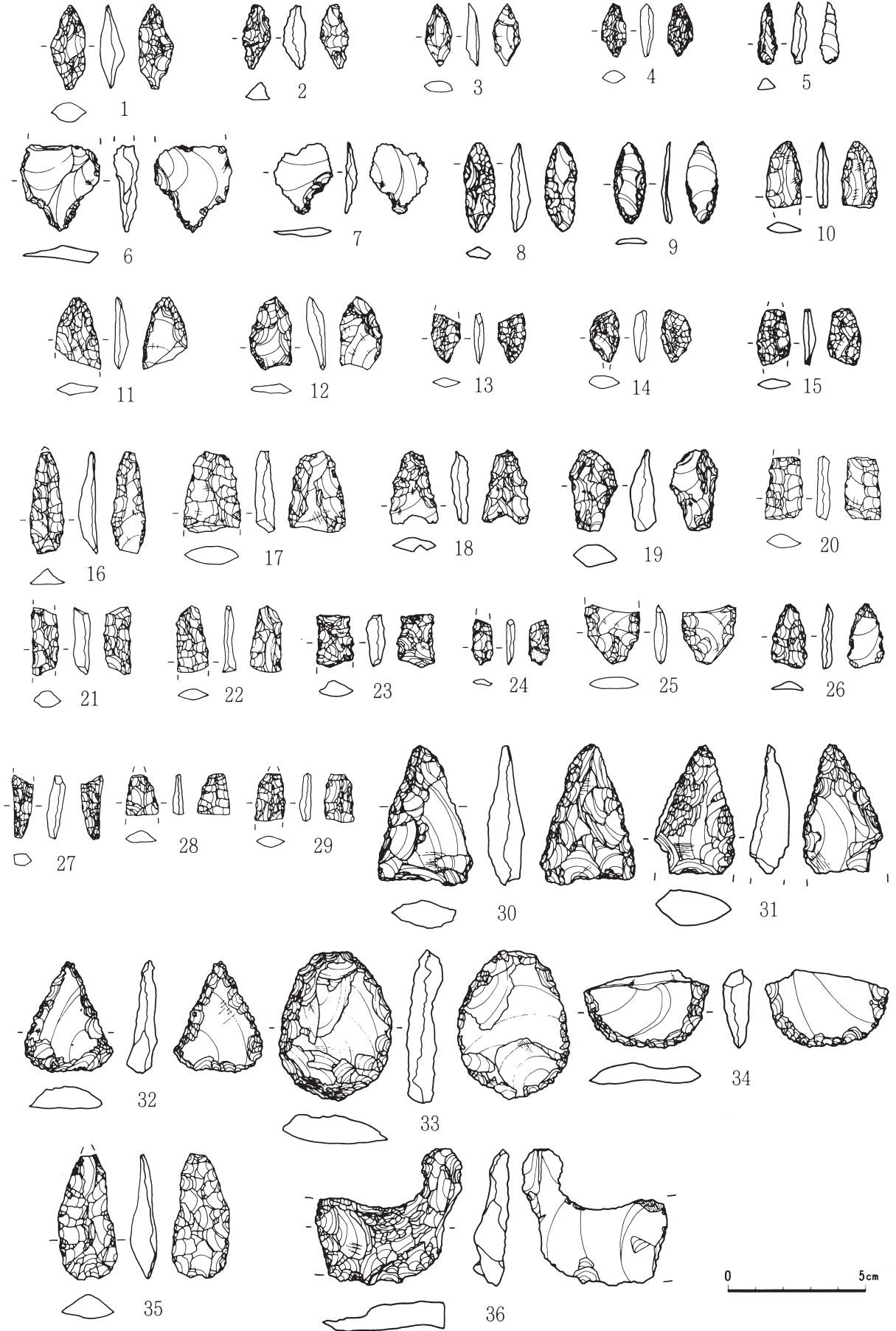


图99 不定形石器(1)



图100 不定形石器(2)

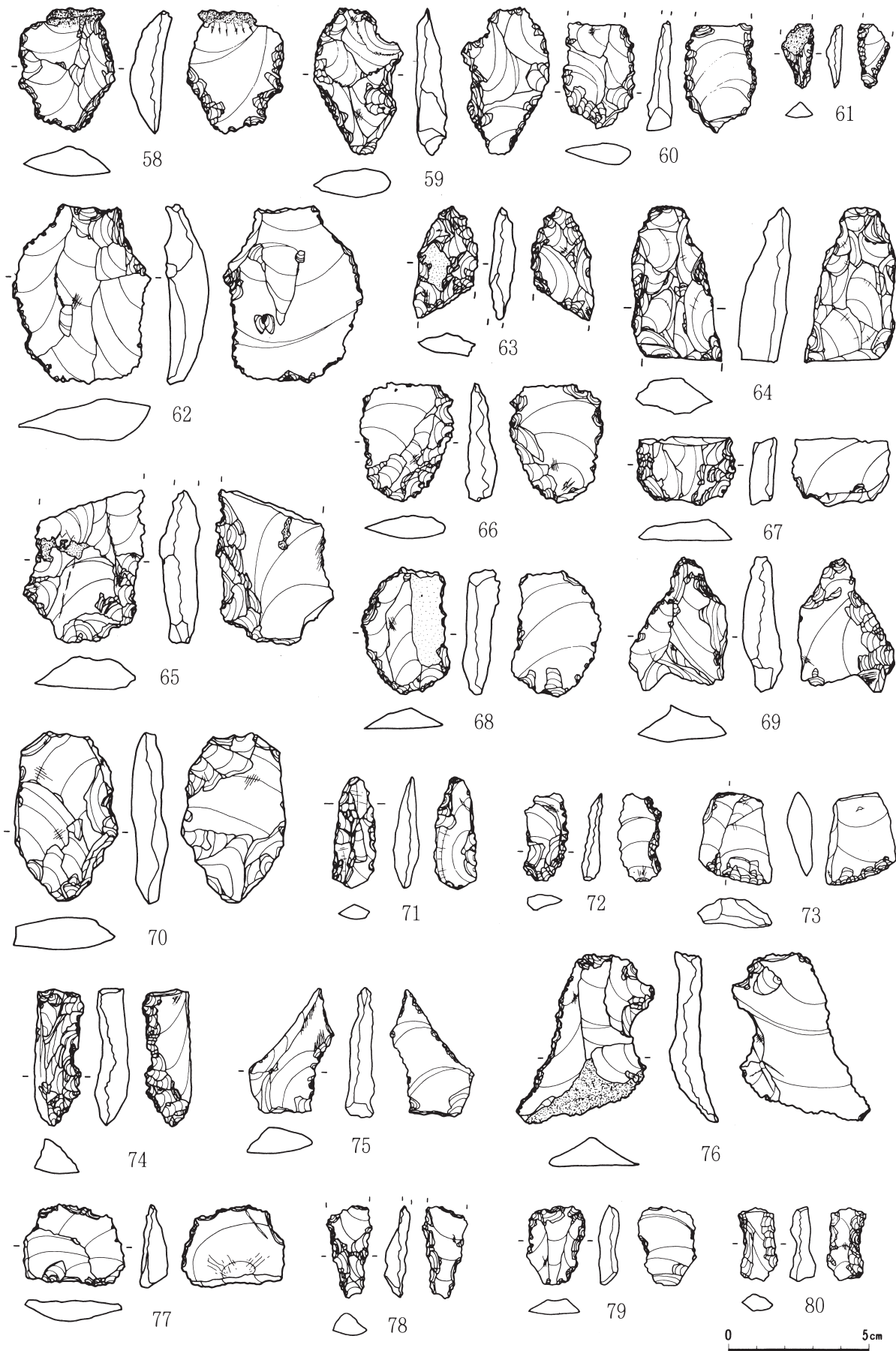


图101 不定形石器(3)



図102 不定形石器(4)

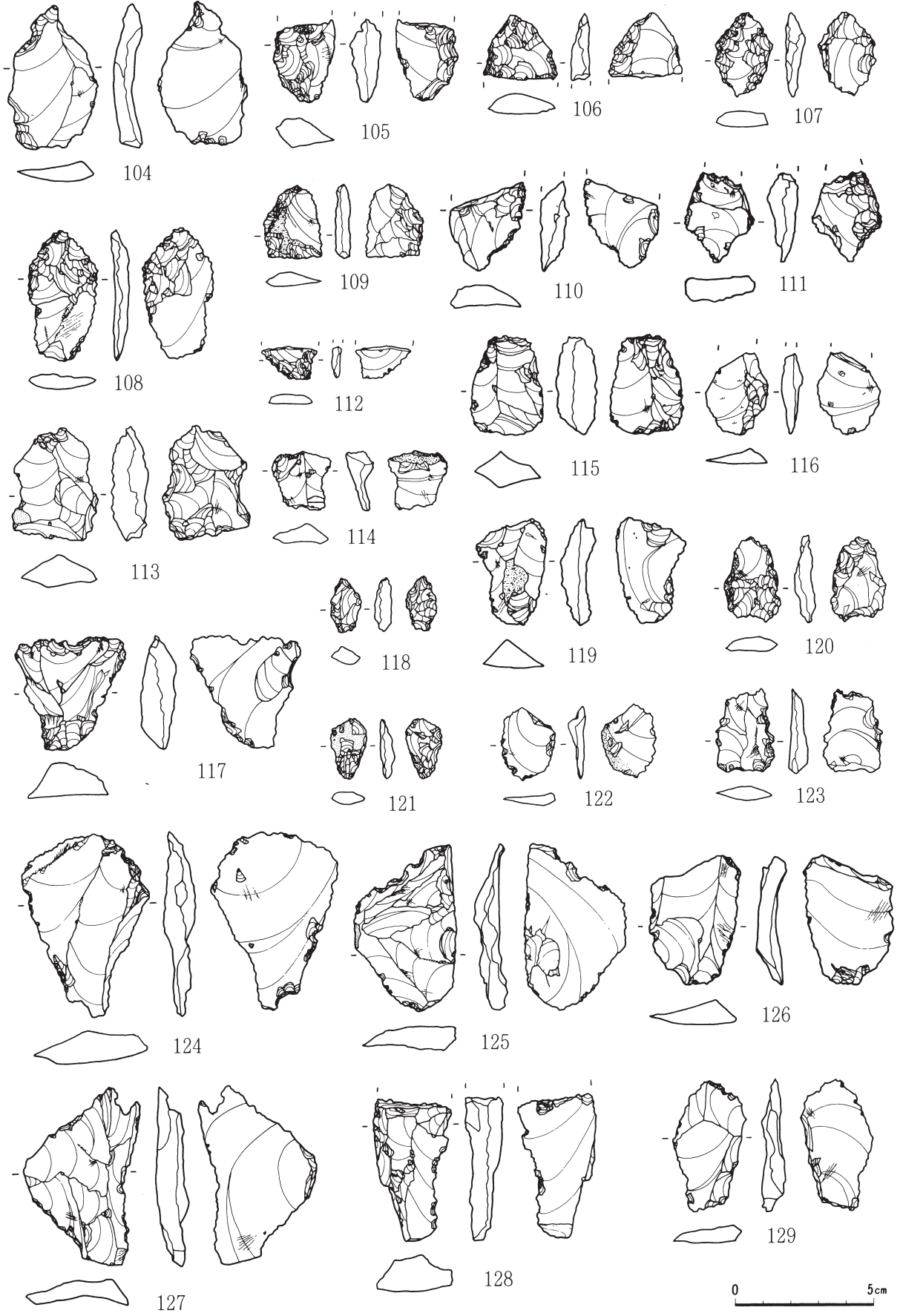


图103 不定形石器(5)

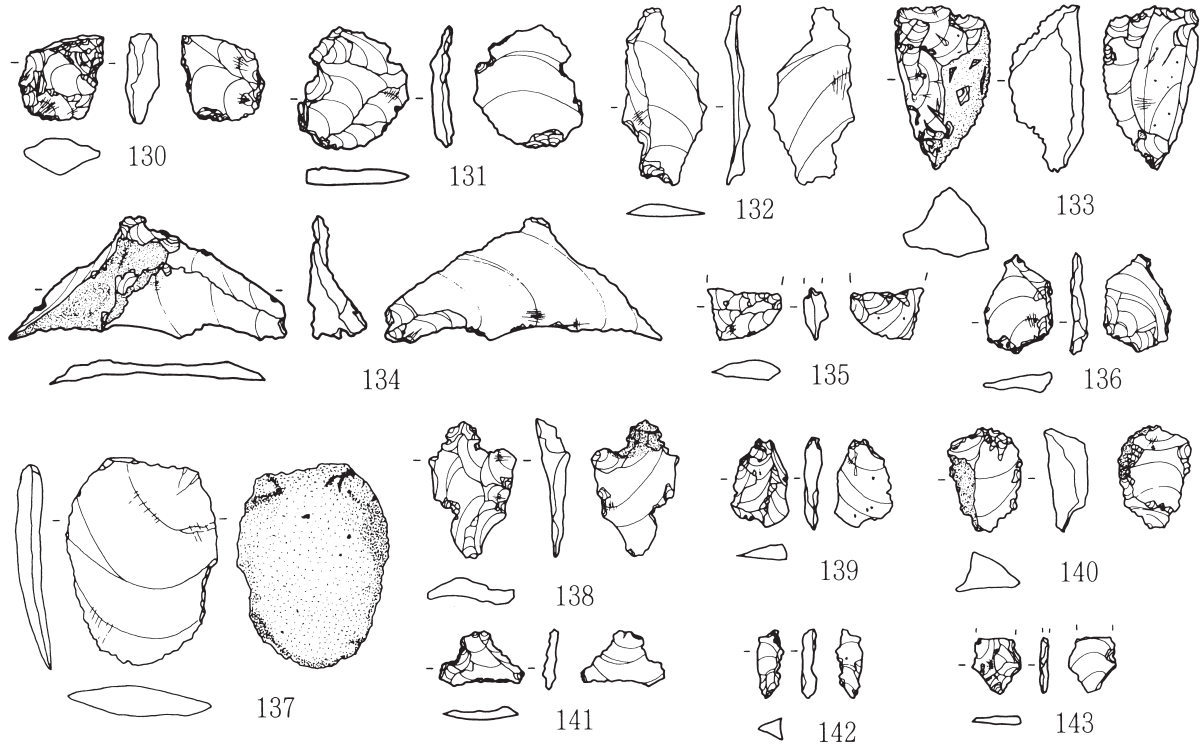


図104 不定形石器(6)

0 5cm

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	器種	備考	分類
図99-1	193	F-138		30.5	13.0	7.5	2.4	珪質頁岩	不定形		A
-2	396	Q-163	III	23.0	10.0	6.0	0.9	珪質頁岩	不定形		A
-3	106	Q-165	IV	23.0	9.5	4.0	1.7	珪質頁岩	不定形		A
-4	64	Q-165	III	(19.5)	9.0	5.0	(0.7)	珪質頁岩	不定形	先端欠、アスファルト	A
-5	323	Q-165	III	22.0	7.0	4.0	0.6	珪質頁岩	不定形		A
-6	334	Q-166	II	31.0	27.0	5.0	4.8	珪質頁岩	不定形		A
-7	392	Q-167	IV	25.0	21.0	3.0	1.0	珪質頁岩	不定形		A
-8	56	P-163	IV	32.0	11.5	7.0	1.6	珪質頁岩	不定形		B
-9	130	P-165	IV	30.0	12.0	3.0	0.8	玉髓	不定形		B
-10	174	F-139	I	(23.5)	12.5	4.0	(1.0)	珪質頁岩	不定形	基部欠	B
-11	122	Q-164	II	(25.5)	(16.0)	5.0	(1.6)	珪質頁岩	不定形	破片	B
-12	76	Q-164	IV	(26.0)	14.5	6.0	(1.5)	珪質頁岩	不定形	先端欠	B
-13	103	R-165	IV	(18.0)	(10.5)	(3.5)	(0.4)	珪質頁岩	不定形	破片	B
-14	126	Q-164	IV	(18.5)	11.0	4.5	(0.7)	珪質頁岩	不定形	両端欠	B
-15	175	F-139	I	(20.0)	12.0	4.0	(0.9)	珪質頁岩	不定形	両端欠	B
-16	125	Q-164	III	(36.0)	12.5	6.5	(1.7)	珪質頁岩	不定形	先端欠	A
-17	21	Q-164	IV	(28.5)	(20.5)	6.5	(3.5)	珪質頁岩	不定形	両端欠	A
-18	98	Q-164	IV	(23.0)	16.5	7.0	(1.7)	珪質頁岩	不定形	両端欠	A
-19	412			29.0	17.0	7.0	1.7	珪質頁岩	不定形		A
-20	42	Q-164	II	(22.0)	13.0	5.0	(0.9)	珪質頁岩	不定形	両端欠	A
-21	117	Q-165	III	(24.5)	9.5	6.0	(1.1)	珪質頁岩	不定形	破片	A
-22	120	Q-164	IV	(23.5)	11.5	4.0	(0.9)	珪質頁岩	不定形	破片	A
-23	86	Q-164	II	(18.5)	(13.0)	6.5	(1.1)	珪質頁岩	不定形	両端欠	A
-24	32	Q-163	III	(16.5)	7.5	2.5	(0.3)	珪質頁岩	不定形	両端欠	A
-25	54	Q-164	IV	(21.5)	(20.0)	4.5	(1.4)	珪質頁岩	不定形	両端欠	A
-26	336	Q-163	III	23.0	12.0	3.0	0.7	珪質頁岩	不定形		A
-27	197	F-139	I	(23.0)	(8.0)	(5.0)	(1.0)	珪質頁岩	不定形	破片	A
-28	108	Q-164	IV	(14.5)	(11.5)	(4.5)	(0.5)	珪質頁岩	不定形	破片	A

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石 質	器 種	備 考	分類
-29	129	P-162	IV	(17.0)	(10.5)	4.5	(0.6)	珪質頁岩	不定形	破片	A
-30	168	R-167	II	48.0	34.0	13.0	15.5	珪質頁岩	不定形		B
-31	316	Q-163	IV	46.0	29.0	12.0	11.7	珪質頁岩	不定形		B
-32	351	Q-164	III	39.0	27.0	8.0	9.7	珪質頁岩	不定形		B
-33	306	R-168	II	53.0	40.0	10.0	25.6	珪質頁岩	不定形		B
-34	405	Q-164	IV	28.0	40.0	7.0	10.4	珪質頁岩	不定形		C
-35	151	P-166	IV	(44.0)	20.5	9.0	(4.9)	珪質頁岩	不定形	先端欠	
-36	308	P-162	III	49.0	46.0	10.0	19.9	珪質頁岩	不定形		C
図100-37	388	Q-165	IV	40.0	26.0	5.0	7.2	珪質頁岩	不定形		D
-38	390	P-166	II	51.0	21.0	8.0	7.2	珪質頁岩	不定形		D
-39	254	I-148	I	51.0	23.0	6.0	7.9	珪質頁岩	不定形		D
-40	377	Q-164	IV	43.0	23.0	7.0	15.1	綠色細粒凝灰岩	不定形		D
-41	410			40.0	35.0	5.0	9.7	珪質頁岩	不定形		D
-42	385	Q-164	IV	36.0	23.0	9.0	9.3	珪質頁岩	不定形		D
-43	311	R-163	IV	79.0	37.0	11.0	35.8	珪質頁岩	不定形		D
-44	229	P-163	IV	53.0	36.0	9.5	14.8	珪質頁岩	不定形		D
-45	369	Q-165	IV	50.0	34.0	5.0	13.7	珪質頁岩	不定形		D
-46	307	Q-164	IV	53.0	28.0	10.0	11.1	珪質頁岩	不定形		D
-47	305	E-134	II	54.0	20.0	10.0	11.5	珪質頁岩	不定形		D
-48	398	P-165	IV	40.0	20.0	11.0	8.5	珪質頁岩	不定形		D
-49	413	G-136	I	47.0	13.0	7.0	4.5	珪質頁岩	不定形		D
-50	348	Q-163	III	25.0	20.0	7.0	3.3	珪質頁岩	不定形		D
-51	304	P-162	IV	49.0	25.0	7.0	7.8	玉 髓	不定形		D
-52	344	P-165	IV	51.0	18.0	8.0	5.7	珪質頁岩	不定形		D
-53	339	P-163	IV	37.0	20.0	7.0	3.7	珪質頁岩	不定形		D
-54	352	Q-163	IV	23.0	16.0	4.0	1.8	珪質頁岩	不定形		D
-55	389	P-161	IV	31.0	18.0	6.0	4.3	珪質頁岩	不定形		D
-56	312	Q-163	IV	62.0	53.0	13.0	35.2	珪質頁岩	不定形		D
-57	309	R-168	II	62.0	35.0	13.0	30.3	綠色細粒凝灰岩	不定形		D
図101-58	328	Q-163	III	44.0	32.0	10.0	14.8	珪質頁岩	不定形		D
-59	314	Q-163	IV	51.0	28.0	10.0	16.2	珪質頁岩	不定形		D
-60	346	Q-164	IV	38.0	24.0	7.0	5.2	珪質頁岩	不定形		D
-61	362	Q-163	IV	23.0	10.0	5.0	0.8	珪質頁岩	不定形		D
-62	326	Q-165	IV	62.0	48.0	14.0	41.4	珪質頁岩	不定形		D
-63	337	Q-165	III	40.0	21.0	7.0	5.6	珪質頁岩	不定形		F
-64	232	R-167	II	(55.0)	(28.5)	(13.5)	(23.8)	珪質頁岩	不定形		F
-65	379	O-162	II	54.0	36.0	11.0	24.5	珪質頁岩	不定形		E
-66	325	F-134	II	41.0	29.0	7.0	11.8	珪質頁岩	不定形		E
-67	367	P-162	IV	24.0	33.0	7.0	9.0	珪質頁岩	不定形		F
-68	333	Q-164	III	44.0	28.0	7.0	12.1	珪質頁岩	不定形		G
-69	329	Q-163	IV	47.0	32.0	13.0	13.1	珪質頁岩	不定形		G
-70	414	F-136	I	58.0	37.0	10.5	4.2	珪質頁岩	不定形		G
-71	4	Q-164	IV	39.0	15.0	10.0	3.8	珪質頁岩	不定形		G
-72	353	Q-165	III	31.0	13.0	4.0	1.5	珪質頁岩	不定形		G
-73	340	P-162	IV	26.0	30.0	9.0	7.3	珪質頁岩	不定形		G
-74	360	Q-164	IV	48.0	16.0	11.0	6.7	珪質頁岩	不定形		G
-75	341	Q-165	III	45.0	23.0	9.0	6.3	珪質頁岩	不定形		G
-76	400	Q-168	IV	59.0	32.0	10.0	17.3	珪質頁岩	不定形		G
-77	403	Q-163	II	29.0	34.0	7.0	8.7	珪質頁岩	不定形		G
-78	411			33.0	12.0	8.0	2.2	珪質頁岩	不定形		G
-79	406	E-129	II	28.0	19.0	5.0	3.6	珪質頁岩	不定形		G
-80	364	Q-163	III	26.0	11.0	5.0	2.7	綠色細粒凝灰岩	不定形		G
図102-81	407	Q-162	IV	49.0	20.0	9.0	9.0	珪質頁岩	不定形		G
-82	381	P-162	IV	45.0	24.0	7.0	7.7	珪質頁岩	不定形		G
-83	373	Q-163	IV	29.0	24.0	5.0	4.6	珪質頁岩	不定形		G
-84	415	E-138	I	25.5	24.0	6.0	2.5	珪質頁岩	不定形		G
-85	310	P-162	IV	51.0	27.0	5.0	7.8	珪質頁岩	不定形		G
-86	363	Q-165	III	45.0	18.0	4.0	3.0	珪質頁岩	不定形		G

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石 質	器 種	備 考	分類
-87	374	Q-162	Ⅳ	24.0	12.0	4.0	2.0	珩質頁岩	不定形		G
-88	376	Q-165	Ⅲ	29.0	12.0	8.0	2.4	珩質頁岩	不定形		G
-89	395	Q-164	Ⅲ	33.0	17.0	3.0	2.1	珩質頁岩	不定形		G
-90	397	Q-163	Ⅳ	20.0	18.0	5.0	2.0	珩質頁岩	不定形		G
-91	361	P-162	Ⅳ	15.0	15.0	3.0	1.4	珩質頁岩	不定形		G
-92	350	P-166	Ⅱ	51.0	26.0	13.0	21.2	珩質頁岩	不定形		G
-93	313	Q-164	Ⅳ	51.0	27.0	9.0	14.4	珩質頁岩	不定形		G
-94	301	Q-162	Ⅳ	73.0	50.0	13.0	43.9	珩質頁岩	不定形		G
-95	315	Q-165	Ⅲ	54.0	27.0	12.0	12.9	珩質頁岩	不定形		G
-96	380	Q-164	Ⅱ	52.0	44.0	8.0	13.3	珩質頁岩	不定形		G
-97	394	Q-163	Ⅳ	33.0	23.0	7.0	6.1	珩質頁岩	不定形		G
-98	335	Q-166	Ⅳ	35.0	21.0	2.0	2.3	珩質頁岩	不定形		G
-99	330	P-162	Ⅲ	49.0	23.0	7.0	7.1	珩質頁岩	不定形		H
-100	371	R-168	Ⅱ	60.0	30.0	7.0	14.7	珩質頁岩	不定形		H
-101	331	Q-164	Ⅳ	73.0	37.0	17.0	48.9	珩質頁岩	不定形		H
-102	399	P-162	Ⅳ	43.0	23.0	9.0	6.7	珩質頁岩	不定形		H
-103	365	Q-164	Ⅲ	37.0	25.0	6.0	8.4	珩質頁岩	不定形		H
図103-104	327	Q-166	Ⅲ	51.0	27.0	6.0	9.9	珩質頁岩	不定形		H
-105	378	Q-163	Ⅳ	29.0	21.0	10.0	4.3	珩質頁岩	不定形		H
-106	338	R-164	Ⅱ	23.0	24.0	7.0	3.1	珩質頁岩	不定形		H
-107	320	Q-165	Ⅲ	36.0	19.0	5.0	2.8	珩質頁岩	不定形		H
-108	357	P-163	Ⅳ	47.0	24.0	5.0	6.3	珩質頁岩	不定形		H
-109	386	Q-162	Ⅲ	26.0	19.0	5.0	2.8	珩質頁岩	不定形		H
-110	391	R-166	Ⅳ	32.0	25.0	7.0	3.9	珩質頁岩	不定形		H
-111	393	O-162	Ⅱ	32.0	24.0	7.0	5.7	黒曜石	不定形		H
-112	321	Q-164	Ⅳ	12.0	16.0	3.0	0.5	珩質頁岩	不定形		H
-113	342	Q-164	Ⅲ	40.0	27.0	11.0	12.8	珩質頁岩	不定形		H
-114	404	Q-167	Ⅳ	21.0	20.0	6.0	2.0	黒曜石	不定形		H
-115	401	Q-164	Ⅳ	35.0	25.0	13.0	8.6	珩質頁岩	不定形		H
-116	387	Q-163	Ⅳ	30.0	22.0	5.0	2.8	黒曜石	不定形		H
-117	345	H-136	Ⅱ	40.0	29.0	12.0	11.4	珩質頁岩	不定形		H
-118	347	Q-164	Ⅳ	19.0	10.0	6.0	1.0	珩質頁岩	不定形		H
-119	408	Q-164	Ⅲ	38.0	21.0	10.0	6.3	珩質頁岩	不定形		H
-120	343	Q-164	Ⅲ	30.0	19.0	5.0	3.1	珩質頁岩	不定形		H
-121	332	Q-165	Ⅲ	22.0	12.0	4.0	1.0	珩質頁岩	不定形		H
-122	409	Q-163	Ⅳ	26.0	19.0	3.0	1.5	珩質頁岩	不定形		H
-123	368	O-162	Ⅱ	30.0	20.0	5.0	2.6	珩質頁岩	不定形		H
-124	349	P-162	Ⅲ	65.0	42.0	11.0	19.9	珩質頁岩	不定形		I
-125	302	Q-164	Ⅳ	59.0	33.0	8.0	9.8	珩質頁岩	不定形		I
-126	355	Q-166	Ⅲ	46.0	32.0	8.0	11.4	珩質頁岩	不定形		I
-127	317	Q-164	Ⅳ	63.0	37.0	6.0	13.5	珩質頁岩	不定形		I
-128	356	Q-162	Ⅲ	51.0	26.0	13.0	11.1	珩質頁岩	不定形		I
-129	370	R-168	Ⅱ	46.0	24.0	5.0	6.7	珩質頁岩	不定形		I
図104-130	354	Q-163	Ⅳ	22.0	20.0	8.0	3.9	珩質頁岩	不定形		I
-131	318	Q-163	Ⅲ	32.0	28.0	4.0	3.8	珩質頁岩	不定形		I
-132	359	Q-164	Ⅳ	48.0	22.0	3.0	2.7	珩質頁岩	不定形		I
-133	382	Q-162	Ⅳ	43.0	23.0	19.0	17.1	黒曜石	不定形		I
-134	303	P-162	Ⅳ	32.0	58.0	3.0	7.1	珩質頁岩	不定形		I
-135	372	Q-164	Ⅳ	14.0	18.0	5.0	1.0	黒曜石	不定形		I
-136	319	Q-164	Ⅲ	26.0	18.0	4.0	1.6	珩質頁岩	不定形		I
-137	375	Q-164	Ⅳ	55.0	38.0	8.0	10.3	珩質頁岩	不定形		I
-138	366	Q-164	Ⅲ	36.0	23.0	5.0	2.7	珩質頁岩	不定形		I
-139	324	Q-164	Ⅳ	24.0	14.0	4.0	1.1	黒曜石	不定形		I
-140	358	Q-164	Ⅲ	27.0	18.0	10.0	4.7	珩質頁岩	不定形		I
-141	384	Q-163	Ⅳ	15.0	21.0	2.0	0.5	珩質頁岩	不定形		I
-142	402	Q-164	Ⅲ	13.0	7.0	5.0	0.4	黒曜石	不定形		I
-143	322	P-166	Ⅳ	15.0	13.0	2.0	0.4	珩質頁岩	不定形		I
図25-10	5	6号住居跡	覆土	45.0	16.0	8.0	5.9	珩質頁岩	不定形		

磨製石斧 (図105)

19点出土した。完形品2点、刃部片6点、基部片8点、部分破片3点である。

1は扁平な礫を剝離し敲打の後、全面にわたって研磨を行っている。素材そのものが、概ね器体の形状と合致していたと考えられ、成形痕は少なく自然面が多く残存する。やや円刃気味の両刃で、若干片寄りが認められる。

2は扁平な自然礫を素材として、刃部だけを研磨によって作出している。刃部は両刃で、著しい偏刃である。基部側の側縁部に一部研磨痕が認められる。

3～8は刃部片で、5・7は両刃の平刃、6・8は両刃の円刃、3・4は両刃の偏刃である。4は側縁を平坦に加工しておらず石質も軟質なことから、石刀等の石製品の破損品の可能性も考えられる。

9～16は基部片である。基部端(頭頂部)を平坦に加工したものは皆無であり、全体に丸みを帯びている。9・10・13は素材の形状を多く残しており、特に10はその傾向が著しい。14は器面全体が何に起因するかは不明であるが、異常なほどの光沢がみられる。石材中には鉄分が多く含まれ、すが多く認められる。16は、扁平礫の端部に敲打による潰れが認められるだけの破片であるが、形状及び2の出土例から石斧の基部破片とした。

17～19は部分破片である。

これら石斧中、擦切磨製技法によるものは、3・5・9・10～13・18の8点であり、これらは擦切痕が側面に残存している。また、8・17は側面に潰し成形時の敲打痕が残存することから、この可能性が高く、17は欠損後に素材となったようで、面に新たな擦切痕が認められる。

折損部の観察では、平面上で斜位に折損しているものが多く、アックス的用法によるものと考えられる。3は断面上で斜位に折損していることからアックス的な用法が考えられる。ただ、刃部の擦痕からは、刃部に対して直行または斜行するなど多方向の痕跡が認められ、また研ぎ直しなどによって観察できないものもあることから、断定し得ない。

今回出土の石斧中には、再利用または、転用品は認められない。

これら石斧の時期は、出土した土器から、両刃のもの及び大型のものは、縄文時代前期の可能性が高い。他のものについても時期的には同時代と考えられるが、断定し得ない。

15は、片側縁を丸く、他方を平坦に作出するという断面形状の特徴から、縄文時代晩期から弥生時代の石斧と考えられる。(斎野裕彦氏(仙台市富沢遺跡保存館主任)よりご教示を得た。)

当遺跡では、出土土器から弥生時代前期の砂沢式に伴ったものと考えられる。



図105 磨製石斧

スリ石（図106-1～4）

4点出土した。完形品1点、欠損品3点である。

1は断面が三角形の自然礫を素材にしており、最も狭い稜を機能面としている。面の幅は1.5～2cmで、面の側縁に一部使用による小剝離と、片減りが認められる。機能面以外の部分には加工痕跡は認められない。

3は三角柱状の自然礫を素材とし、1稜を機能面としている。機能面は湾曲気味で、平坦な面を構成していない。面の幅は1～1.5cmで、小規模な片減りが認められる。

2・4も三角柱状の自然礫を素材としており、2稜を機能面としている。2は一方の機能面の側縁に、使用に伴う連続した小剝離痕が認められる。その他には器体に加工の痕跡はみられない。面の幅は1.2～1.8cmと1.5～2.2cmで、両者ともに片減りが認められる。4も一方の機能面の側縁に小剝離痕が認められる。面の幅は2.1～2.5cmと1.8～2.2cmで、両者とも片減りが認められる。

石材は、すべて安山岩である。

断面形状が三角形の自然礫を素材として、器体加工を行わずに使用していることから、縄文時代早・前期の三角柱状磨石と考えられ、出土遺物の時期から円筒下層式に伴うと考えられる。

凹み石（図106-5～図107-14）

10点出土した。機能面の数で大別した。

1はやや偏平な自然礫を素材にして、平坦な1面を機能面としている。敲打痕がみられる面はやや広めであるが、2mmほどの浅いくぼみである。

6～10は2面を機能面としているものである。

6は最も使用頻度の高い器体であり、各くぼみは敲打の範囲が狭い割に、深くくぼんでいる。最も深い部分で、1センチほどである。また、9も使用頻度が高いものである。7は器端に、両面から石錘にみられるような剝離を行っており、10も片面から同様の剝離が認められる。8は器端に、敲打によるやや湾曲した潰しの痕跡が認められる。この類では10を除いて薄手である。

11～14は3面を機能面としており、平坦な両面と側面の一方を使用し、端部を使用しているものは認められない。全体にくぼみも浅めである。

石材は、ほとんど安山岩であるが、9・12は凝灰岩を素材としている。

器体は、くぼみが深くなればより軽くなることから、素材本来の重量は不明であるが、出土した本類の現在の重量は、約250g～510gで、片手で把握できる大きさである。

3点の器体に作出された石錘状の抉り及び潰しによる湾曲部は、把握用の加工と考えられる。

本類の石器は、用途的には台または敲打具のどちらかか、また、その両者であるかの判別がしにくいものである。ただ、前述の重量及び大きさ、抉りの作出や潰しによる湾曲部を持つ器体の存在から、本遺跡出土のものは敲打具の可能性が高い。

時期の面では、より縄文時代の特徴が強いものである。



図106 礫石器(1)

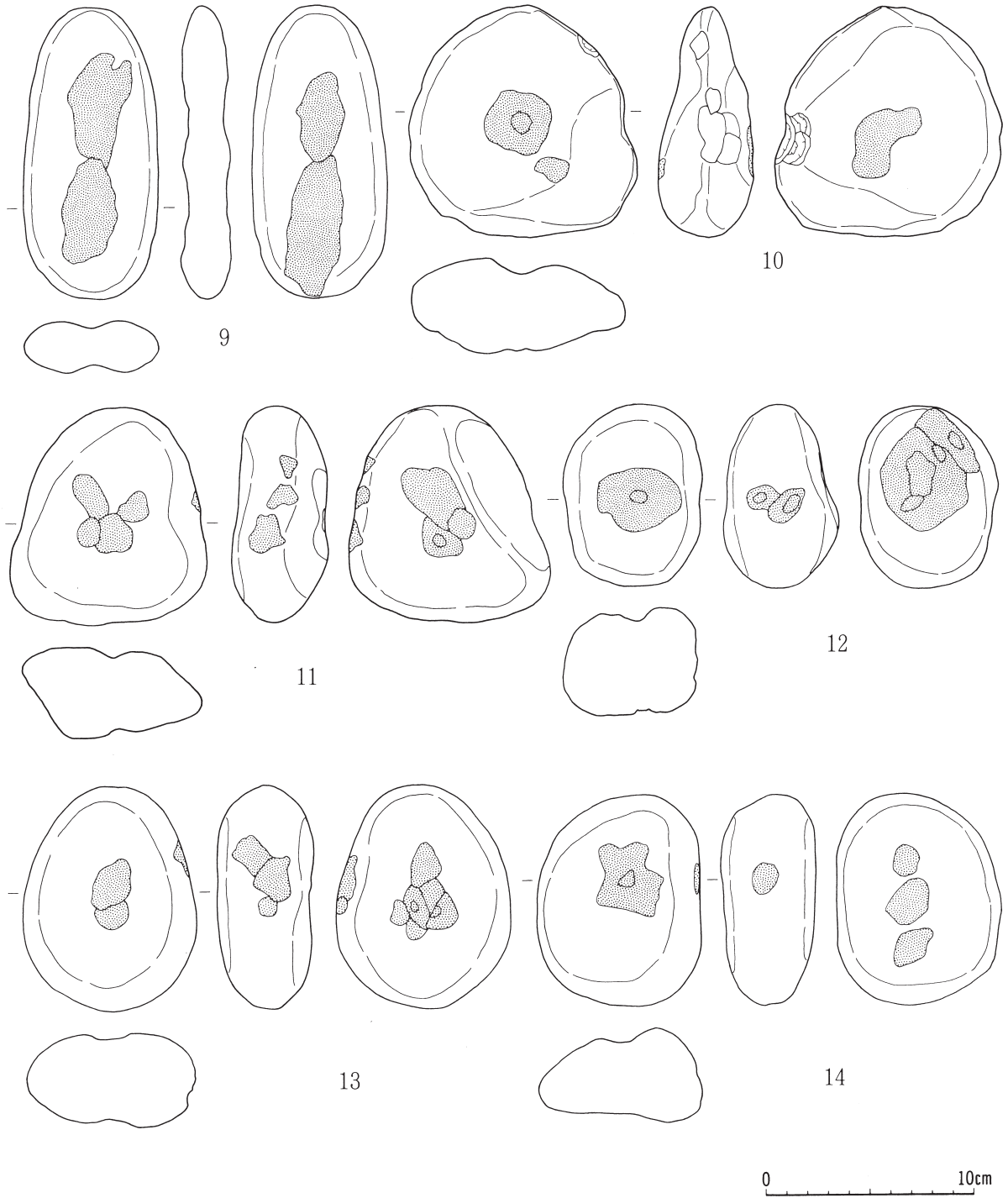


图107 礫石器(2)

図版番号	整理番号	出土地点	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	器種	備考
図105- 1	503	Q-163	Ⅳ	98.0	43.0	15.0	90.3	緑色凝灰岩	磨製石斧	
- 2	502	Q-166	Ⅳ	97.0	39.0	12.0	82.7	緑色凝灰岩	磨製石斧	
- 3	516	Q-167	Ⅳ	(78.0)	(61.0)	(34.5)	(232.3)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	刃部片
- 4	514	Q-165	Ⅳ	(64.0)	(29.0)	(15.5)	(39.2)	凝灰岩	磨製石斧	〃
- 5	509	Q-162		(48.0)	(58.0)	(17.0)	(78.1)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
- 6	520	N-158	I	(35.0)	60.0	24.0	(77.9)	頁岩	磨製石斧	〃
- 7	512	Q-165	Ⅱ	(49.0)	52.0	(14.5)	(56.9)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
- 8	515	Q-163	Ⅳ	(31.5)	(48.0)	(12.0)	(20.7)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
- 9	518	Q-165	Ⅳ	(115.0)	45.0	35.0	(350.7)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
-10	508	Q-162	Ⅳ	(73.5)	(37.0)	(42.0)	(62.3)	頁岩	磨製石斧	〃
-11	507	Q-163	Ⅳ	(72.0)	(34.0)	(10.0)	(38.8)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
-12	506	P-165	Ⅱ	(82.0)	(43.5)	(29.0)	(128.1)	緑色凝灰岩	磨製石斧	〃
-13	513	Q-166	Ⅱ	(60.0)	(32.0)	(13.5)	(34.5)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
-14	505	Q-164	Ⅱ	(90.0)	(39.0)	(27.0)	(135.7)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
-15	504	Q-164	Ⅳ	(72.0)	(42.0)	(31.5)	(139.1)	閃緑岩	磨製石斧	〃
-16	517	R-168	Ⅱ	(64.5)	42.0	(15.0)	(45.5)	凝灰岩	磨製石斧	〃
-17	511	Q-164	Ⅱ	(50.0)	(47.0)	(13.5)	(48.1)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
-18	519	N-158	I	(45.0)	23.0	12.0	(25.4)	頁岩	磨製石斧	〃
-19	510	Q-167	Ⅳ	(36.0)	(33.0)	(6.5)	(11.1)	緑色細粒凝灰岩	磨製石斧	〃
図106- 1	702	P-165	Ⅳ	(125.0)	60.0	40.0	(610.4)	安山岩	スリ石	1稜
- 2	705	D-135	I	(105.0)	55.0	50.0	(484.7)	安山岩	スリ石	D I 2 陵
- 3	701	D-135	I	(80.0)	60.0	50.0	(537.3)	安山岩	スリ石	1 陵
- 4	704	P-164	Ⅳ	(90.0)	70.0	60.0	(612.5)	安山岩	スリ石	2 陵
- 5	703	D-135	I	(120.0)	65.0	40.0	(511.9)	安山岩	凹み石	1 面
- 6	606	P-162	Ⅳ	120.0	100.0	25.0	362.8	安山岩	凹み石	2 面
- 7	607	E-136	I	100.0	85.0	35.0	330.6	安山岩	凹み石	2 面
- 8	603	Q-163	Ⅳ	110.0	70.0	28.0	282.4	安山岩	凹み石	2 面
図107- 9	601	P-164	V	141.0	65.0	24.5	267.0	凝灰岩	凹み石	2 面
-10	602	R-164	Ⅲ	105.0	100.0	45.0	501.6	安山岩	凹み石	2 面
-11	608	L-152	I	100.0	85.0	40.0	509.8	安山岩	凹み石	3 面
-12	604	L-139	I	85.0	60.0	45.0	246.6	凝灰岩	凹み石	3 面
-13	605	F-139	I	100.0	75.0	45.0	379.9	安山岩	凹み石	3 面
-14	609	G-136	I	85.0	75.0	45.0	314.0	安山岩	凹み石	3 面

出土石器の組成について

遺構外出土遺物は剥片石器358点、礫石器34点である。これまで器種別に概観してきたが、石器全般について、その組成についてみてみたい。

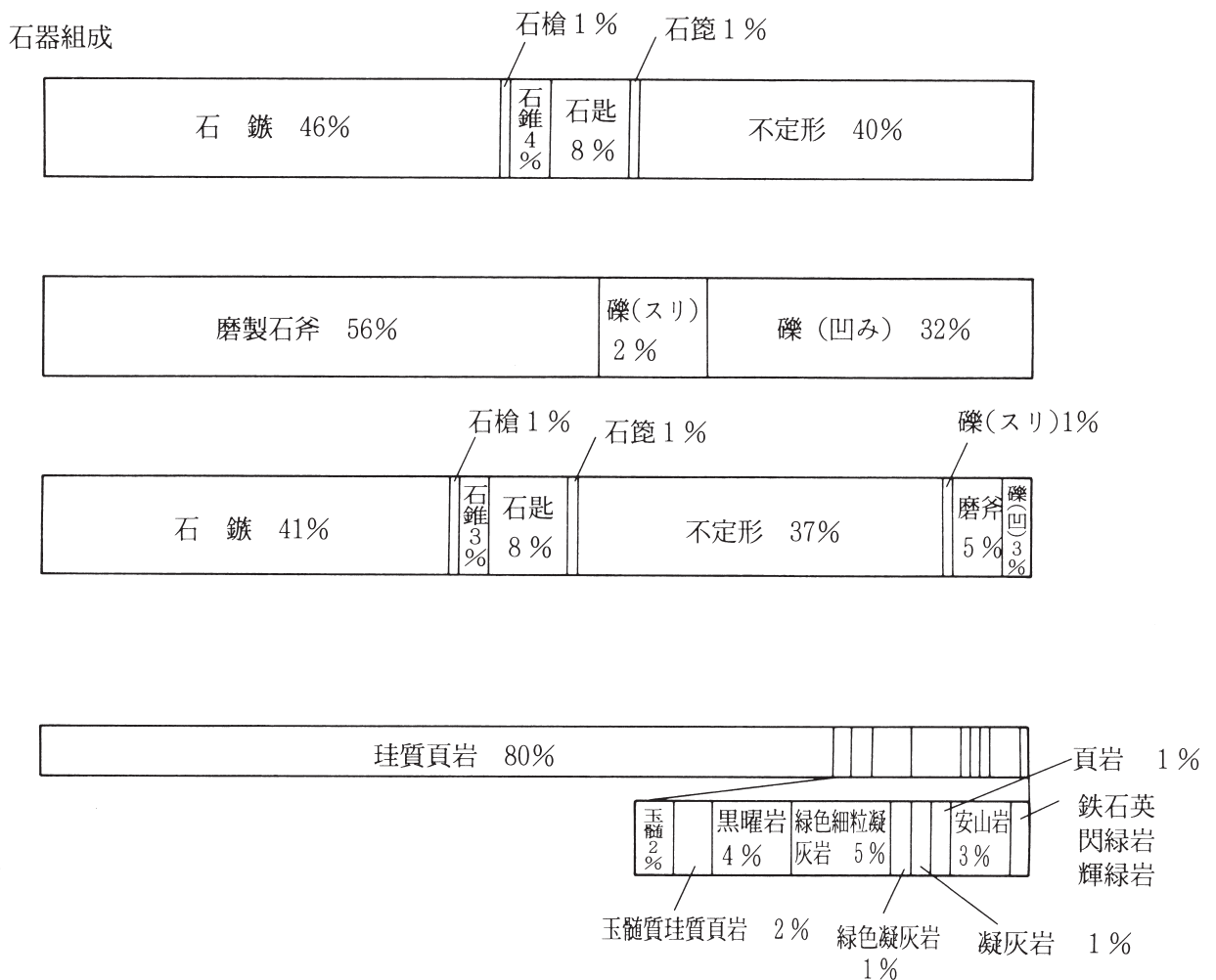
器種別の石器組成及び使用した石質の組成をグラフに示した。

器種では、定形石器の石鏃が164点と、不定形石器を上回る数量である。剥片石器中では46%を占め、全体でも41%を占めている。これに対し、ナイフ的機能をも含め持つ石匙は、剥片石器中에서도8%と少ない。機能を不定形石器の一部が肩代わりしていたと考えられる。

礫石器では、打製石器の出土がまったくみられない。また、調理具と考えられる日用雑器としての敲磨器類の出土数が全体で4%と非常に少ない。

出土石器はその帰属時期は断定できないものの、概ね縄文時代のもと考えられる。土器の出土している縄文時代前期にこれらの石器が伴うと仮定すれば、石器の組成からは、今回の調査区域は主体部からはずれていたか、または、狩猟を中心としたごく小規模な集落が存在したものと推察される。

(白鳥 文雄)



4 石製品 (図108—1～23・図23—25)

石刀 (図108—1)

1は、部分破片で、器体は若干湾曲している。全面を研磨して整形しており、外反側の側縁はやや丸みを帯びているが、内湾側はより鋭角に作出されている。破片のため全体形は不明であるが、刃部を内湾側にした内反り型の石刀と考えられる。

有孔石製品 (図108—2～20)

17点出土した。出土地点は、概ね接近しており、いずれもⅣ層からの出土である。

2は、曲玉状の形状をしているが、湾曲部はほとんど研磨されておらず、形状は素材に負うところが多い。他の部分は、ほぼ全面研磨されている。穿孔は両面からであるが、ほとんど片面から加工されている。

3は自然礫で、雨垂れ石様の自然穿孔による孔を有している。器面に加工痕は認められないが、有孔製品と同様の意図により搬入されたものとして、この類とした。

4は円形小型のもので、中央に両面からの穿孔による孔を有している。

5は小型円礫の一面を平坦に研磨し、一部に穿孔途中の深さ1mm程の孔を有する。有孔石製品の未製品と考えられる。

6～20は、P—162グリッドから14点が一括して出土したものである。すべて小型円形の玉で、中央に孔を有する。6cm程の長さで連結した状態での出土であったが、紐などは腐朽して残存していなかった。(出土状況は写真図版参照)

異形石器 (図108—21)

21は三叉状の異形石器で、横長剥片を素材として、3辺を剝離により調整している。先端2箇所は、錐状の調整剝離を施しており、残る一端は荒い剝離にとどまっている。

石冠 (図108—22)

頭頂部及び把握部を敲打によって整形し、軽微な研磨を行っている。底面の研磨面は非常に平滑である。底面の周縁部は湾曲気味で微細剝離が認められ、面自体も丸みを帯びている。

底面中央に破損部分が認められる。出土層位などから、縄文時代前期の円筒下層式土器に伴う可能性が高い。

多頭石斧 (図108—23)

4頭の高頭石斧で、頭部は十文字ではなく、X字状に作出されている。敲打による潰し成形の後に研磨がなされている。孔は両面からの穿孔であるが、器面寄りには敲打痕が多く認められることから、ある程度まで敲打によるくぼみを作成し、その後に錐揉みした可能性が高い。孔の中心部は非常になめらかであり、器体中もとても光沢がある。

さらに縁辺部では、この研磨面を打ち欠く剝離が認められ、4頭部の抉り部分も研磨面を両面から切り込んでいる痕跡がみられる。また、器面の研磨と抉り部の研磨が異質なことから、もともと環状石斧であったものを、破損などを起因にして多頭石斧に作り替えたものと考えられる。ただ、剝離の状態などから未成品の可能性が高い。

孔中に軸木等を固定装着したと考えられるが、孔中心部の状態から、孔中で軸を回転させた可能性も考えられる。他の出土遺物などから、弥生時代(砂沢期)の可能性が高い。(白鳥 文雄)

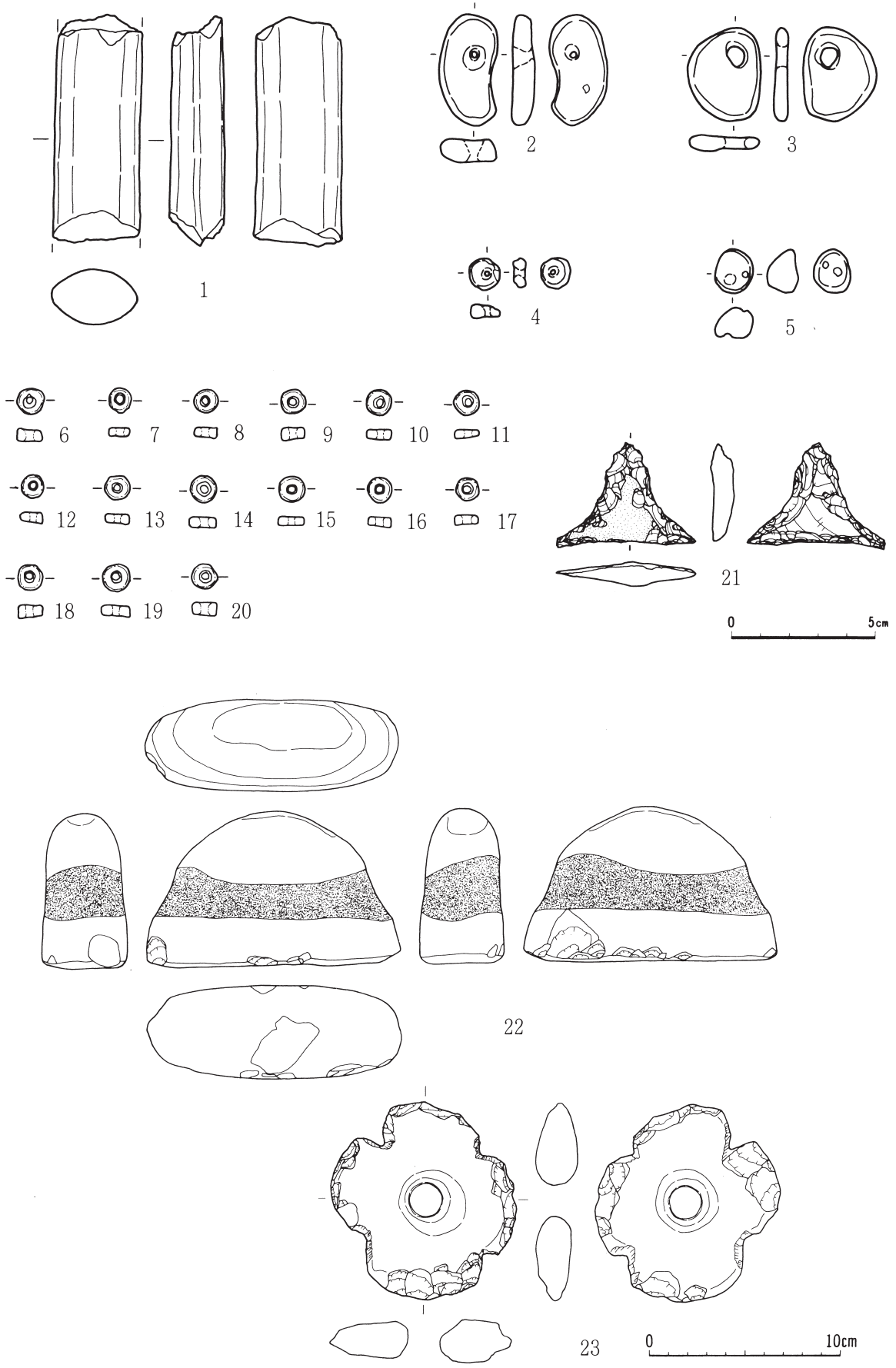


图108 石製品

表7 石製品計測表

図版番号	出土地点	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	備考
図108-1			79.5	30.0	19.0	65.0	砂岩	石刀
-2	Q-163		38.0	20.0	8.0	9.2	珪質頁岩	有孔石製品
-3	Q-165		32.0	25.0	5.5	5.8	凝灰岩	〃
-4	Q-165		11.0	10.0	4.5	0.5	〃	〃
-5	Q-164		15.0	13.0	11.0	2.9	翡翠	〃
-6	P-162		9.0	4.5	5.0	0.5	〃	〃
-7	〃		8.0	4.0	3.0	0.2	〃	〃
-8	〃		8.0	4.0	3.5	0.3	〃	〃
-9	〃		8.0	4.0	4.5	0.4	〃	〃
-10	〃		8.5	3.5	4.0	0.3	〃	〃
-11	〃		8.5	4.0	3.5	0.3	〃	〃
-12	〃		7.5	3.0	4.0	0.3	〃	〃
-13	〃		8.5	3.5	3.0	0.2	〃	〃
-14	〃		9.0	5.0	4.0	0.5	〃	〃
-15	〃		9.0	3.5	3.0	0.3	〃	〃
-16	〃		8.5	3.5	3.5	0.3	〃	〃
-17	〃		8.0	3.5	3.5	0.3	〃	〃
-18	〃		9.0	3.5	5.0	0.2	〃	〃
-19	〃		9.5	4.0	4.5	0.5	〃	〃
-20	〃		8.5	4.0	4.5	0.3	〃	〃
-21	Q-163		36.0	48.0	8.5	5.7	珪質頁岩	異形石器
-22	P-165	V	80.0	132.0	45.0	216.1	閃緑岩	石冠
-23	Q-166	III	102.0	96.5	22.0	216.1	凝灰岩	多頭石斧
図23-25	4号竪穴住居	床直	(180.0)	(175.0)	18.0	236.4	安山岩	環状石斧

第3節 自然科学的分析調査の結果

1 火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

1) はじめに

火山灰は土器のように焼き固められている訳ではないので、地層に堆積中に周辺の土壌によって汚染される場合がある。また、粒子が細かいため、火山灰と粘土を間違える場合もある。このような場合に、新鮮な火山灰であるかどうかを知る上でNa因子は役立つ。Na因子は風化に敏感で、風化を受けると、分析値はすぐ減少する。Na因子で火山灰であることかわかれば、あとはK、Ca、Rb、Srの4因子によって、白頭山火山灰か十和田a火山灰かを判断できる。本報告では、宇田野(2)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析結果

分析値は、表1にまとめられている。はじめ、K、Na因子を点検してみよう。新鮮であれば、白頭山火山灰も十和田a火山灰も、Naの分析値は1以上の値をもつ。これに対して、今回分析した試料のNaの分析値はいずれの試料もある程度風化を受けたものであることを示している。このうち、No.1の試料の分析値は、0.970と1に近く、比較的新鮮な火山灰試料であるが、No.2、3、5、6の4点は、いずれもNaの分析値は低く、この値をみる限り粘土試料に近い。以上のデータから、今回分析した試料のK、Ca、Rb、Sr、Feの分析値はかなりばらつくことが予想される。

図1には、主成分元素同志で組み立てられたK—Ca分布図を示す。No.1は、白頭山火山灰に対応するとみられるが、他の5点の試料は、白頭山領域には対応しない。5点の試料はかなり風化を受けた試料ではあるが、そのうち、No.3、4、6の3点は十和田a領域の近くに分布し、十和田a火山灰の可能性はあることを示す。しかし、No.2、5の2点は主成分元素であるK、Ca因子すらどの領域にも全く対応せず、粘土である可能性もある。火山灰とはいえないだろう。

図2にはRb—Sr分布図を示す。No.1は白頭山領域によく対応する。他の試料のうち、No.3、4、6の3点は一応、十和田a領域に対応し、風化試料ではあるが、十和田a火山灰であったことを示している。No.2、5はRb、Srでも十和田a領域に対応しない。

図3には、Fe因子を比較してある。いずれの試料もある程度風化を受けているので、Fe因子でもよい対応は示さない。かろうじて、No.1のみは白頭山領域に対応するのみである。

以上の結果、今回分析した試料はNo.1は白頭山火山灰、No.3、4、6は十和田a火山灰と推定されるが、No.2、5の2点は火山灰でないと判断された。

宇田野(2)遺跡出土火山灰の蛍光X線分析データ

試料番号	出土遺構	層位	K	Ca	Fe	Rd	Sr	Na	分析結果
1	4号住居跡	覆位	0.909	0.310	2.920	0.836	0.221	0.970	白頭山火山灰
2	6号住居跡	覆位	0.253	0.423	1.670	0.324	0.600	0.354	火山灰ではない
3	11号住居跡	覆位	0.254	0.790	2.110	0.214	0.963	0.480	十和田a火山灰
4	12号住居跡サンプル1	床面	0.200	0.888	2.160	0.135	0.946	0.667	十和田a火山灰
5	12号住居跡サンプル2	床面	0.350	0.449	2.310	0.465	0.773	0.379	火山灰ではない
6	10号土坑	覆位	0.273	0.830	1.980	0.248	0.946	0.470	十和田a火山灰

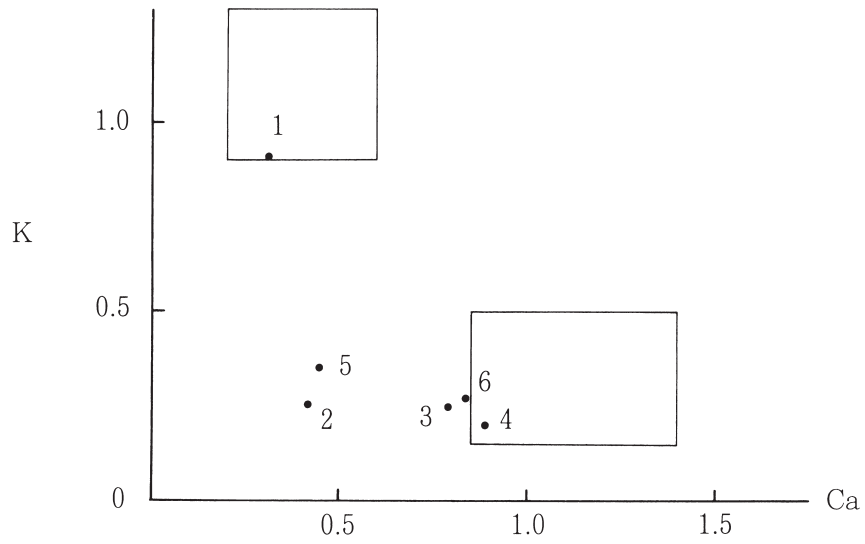


図1 K-Ca分布図

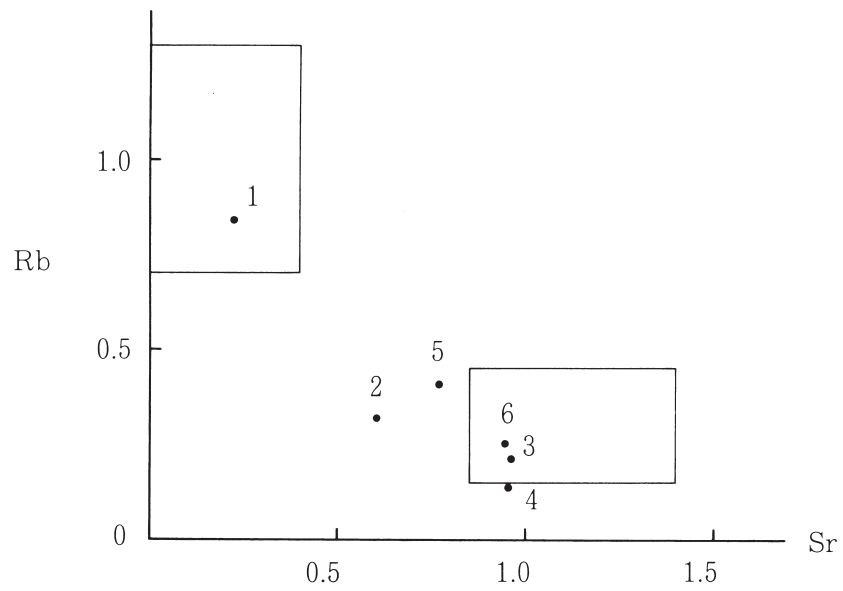


図2 Rb-Sr分布図

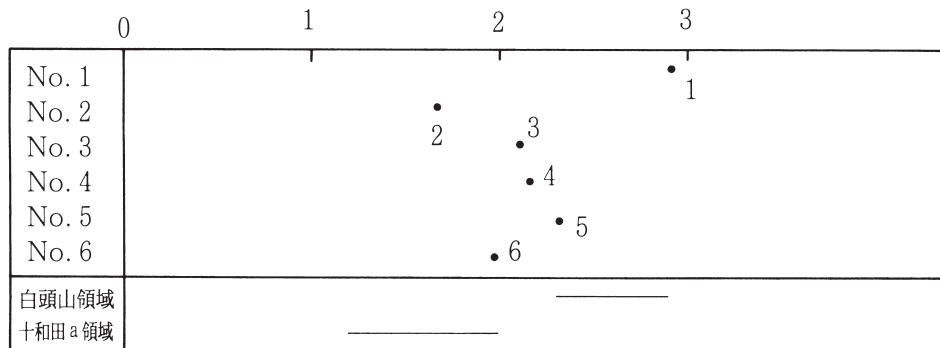


図3 Fe因子の比較

2 炭化材の年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

学習院大学教授 木越邦彦

1996年3月5日

1995年12月18日受領いたしました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期としてL I B B Yの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERNSTANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

CodeNo	試料	年代 (1950年よりの年)
Gak-19159	炭化材 from青森県弘前市宇田野(2)遺跡	1110 \pm 80
	No.1 7号住居跡の床面上(サンプル4) 遺構確認面より、20cm下部で採取	A.D.840
Gak-19160	炭化材 from青森県弘前市宇田野(2)遺跡	1180 \pm 70
	No.2 7号住居跡の床面上(サンプル6) 遺構確認面より、20cm下部で採取	A.D.770
Gak-19161	炭化材 from青森県弘前市宇田野(2)遺跡	1030 \pm 70
	No.3 4号住居跡の床面上 遺構確認面より、30cm下部で採取	A.D.920
Gak-19162	炭化材 from青森県弘前市宇田野(2)遺跡	1130 \pm 80
	No.4 4号住居跡の床面上 遺構確認面より、30cm下部で採取	A.D.820
Gak-19163	炭化材 from青森県弘前市宇田野(2)遺跡	970 \pm 100
	No.5 8号住居跡の床面上 遺構確認面より、30cm下部で採取	A.D.980
Gak-19164	炭化材 from青森県弘前市宇田野(2)遺跡	1030 \pm 90
	No.6 12号住居跡の床面上(サンプル7) 遺構確認面より、30cm下部で採取	A.D.920

第4節 まとめ

宇田野(2)遺跡の発掘調査の結果、本遺跡は、縄文・弥生・平安時代の3時期にわたる複合遺跡であることが確認された。

以下に、調査の結果と成果を時代ごとにまとめてみた。

(1) 縄文時代

- ・検出した遺構は、住居跡1軒(第5号住居跡)と土坑1基(第9号土坑)である。
 - ・遺構内出土遺物は、前期の円筒下層式及び中期の円筒上層式土器に比定される、深鉢形土器の口縁及び胴部の破片が少量出土した。
 - ・第5号住居跡から、土器埋設炉が検出され、構築に使用していた土器片は円筒上層c式に相当する。
 - ・谷の遺物密集地点からは、主に円筒下層a式土器が多量に出土した他、円筒上層a・c・d式土器の破片も若干数出土した。また、同時期と思われる石器も多量出土した。
- *縄文時代について…検出遺構数に対して遺物量が圧倒的に多い。しかも、検出遺構は中期であるが、出土遺物の中心は前期に相当し、時期的にも異なる。したがって、今回の調査区内では、集落の全容は明らかにされなかったが、この周辺には、縄文時代前期及び中期の集落が存在していた可能性が高い。

(2) 弥生時代

- ・検出した遺構は、土坑5基(第1～5号土坑)である。
 - ・検出した土坑は、その配列や規模、出土遺物などから、墓域の一部と捉えた。
 - ・遺構内出土遺物は、1号土坑内から出土した28点の石鏃(内、23点が黒曜石製)である。この他に、第2・5号土坑内から、赤色顔料(ベンガラ)が検出できた。いずれも副葬品であると思われる。
 - ・谷の遺物密集地点からは、主に縄文時代晩期終末～弥生時代の土器片が多量に出土した他、ほぼ同時期と思われる土偶・土版・土製品・石器・石製品なども多量に出土した。
 - ・土坑墓域の約20m南側に、小穴群を検出したが、上部の削平が著しく不明な点も多いが、同時期に機能した可能性も考えられる。
- *弥生時代について…検出遺構や出土遺物などから、周辺には弥生時代の集落が存在していた可能性が高い。特に、本遺跡の約2km北方には、砂沢遺跡(弥生時代前期)が位置し、この遺跡出土の遺物と同時期の土器や土製品が近くの谷から多数出土していることから、本遺跡は同じ文化圏内に属するものと思われるため、砂沢遺跡の文化圏の分布を知る上で貴重な資料が得られたことになる。

なお、土坑内から黒曜石製の石鏃が多数出土した本県の例として、川内町板子塚遺跡が挙げられる。この遺跡からは、弥生時代の土坑墓が9基検出され、石鏃や装身具、黒曜石剝片などが多数出土している。特に、石鏃は253点出土した。本遺跡の第1号土坑と類似するが、相伴土器などの出土がなく、時期の比較はできない。

(3) 平安時代

- ・検出した遺構は、住居跡15軒(第1～4・6～16号住居跡)で、そのうち4軒は、掘立柱建物跡が付属する。その他、土坑5基(第6～8・10・11号土坑)を検出した。
- ・遺構内出土遺物は、土師器を中心として須恵器や鉄製品などが多数出土した。

- ・第4号住居跡出土の土師器の坏の一つに、灯明具として利用されたのが確認できた。
 - ・谷の遺物密集地点からは、土師器及び須恵器の破片が数点出土した。
 - ・住居跡に掘立柱建物跡が伴うもの（第6・7・12・15住居跡）は、いずれも、カマドが位置する方向に掘立柱建物跡が隣接する。本県出土の例として浪岡町野尻(2)・(3)・(4)遺跡や山本(3)遺跡などが挙げられ、これらの遺跡では、竪穴部と掘立部分を囲むように外周溝が検出されているが、本遺跡出土のものには、外周溝は伴わない。しかし、調査区外に存在する可能性もある。
 - ・第12号住居からは、出入口と思われるスロープ状の施設を検出した。本県の出土例として上尾駸(1)遺跡C地区の第3及び4号住居跡が挙げられる。規模や形状は本遺跡出土のものと同様である。しかし、上尾駸(1)出土のものは、カマドが構築されている壁の隅寄りに位置するのに対し、本遺跡出土のものはカマド位置とは別の壁に構築されている点で異なる。
 - ・焼失家屋が数軒検出できたが、中でも第4号住居跡の炭化物の遺存状態がよく、構築部材を知る上で貴重な資料を得ることができた（腰板が住居内に倒れかかるような状態のまま検出したことなど）。
 - ・住居跡の平面形状は方形を呈し、規模は1辺が2～3mの小規模なもの、4～5mの中規模なもの、6～7mの大型のものと、3タイプに分類できた。
 - ・土製のサイコロが1点出土したが、平安時代のものだとすれば、当時の生活文化を知る上で貴重な資料である。
- *平安時代について…検出遺構や出土遺物の特徴から、9世紀末～10世紀初頭の集落と考えられる。本集落の中心地は、北側へはそれほど延びず、地形などから想像すると、東西方向へ延びるものと思われる。

以上のように、本遺跡は、縄文時代前期～中期・弥生時代前期・平安時代（9世紀末から10世紀初頭）と断続的ではあるが、3時期にわたって営まれた複合遺跡であることがわかった。

縄文時代については、前期の円筒下層a式土器がまとまって出土する例は少なく、貴重な資料といえよう。

弥生時代については本遺跡の約2km北方に前期の砂沢遺跡が位置し、この遺跡出土の遺物と同様の遺物が多数出土していることから、本遺跡は同じ文化圏内に属するものと考えられ、砂沢遺跡の文化圏の分布を知る上で貴重な資料が得られたことになる。

平安時代については、カマドなどの遺存状態が良好で、住居の構造にいくつかのタイプが見られ、この時期の生活を知る上で、貴重な資料を得ることができた。

なお、問題点もいくつか挙げられる。1つは、調査区が狭長なため、各集落の全容が把握できないこと。もう一つは、谷地区の遺物密集地点に関してである。ここからは、遺物が大量に出土したが、りんご園造成時の削平と盛土などで大きく攪乱を受けていたので、その多くが混在して出土した。このため、層位的な把握が不可能であり、本報告書では「遺構外出土遺物」として一括して掲載している。

（執筆者一同）

引用参考文献

- 村越 潔 1974「円筒土器文化」考古学選書10 雄山閣
- 山内 清男 1997「日本先史土器の縄紋」先史考古学会
- 加藤晋平・小林達雄・藤本強 1994「縄文文化の研究3 縄文土器1」雄山閣
- 須藤 隆 1973「土器組成論」考古学研究第19巻第4号
- 須藤 隆 1976「亀ヶ岡土器の終末と東北地方における初期弥生式土器の成立」考古学研究第23巻第2号
- 工藤 竹久 1987「是川・剣吉荒町遺跡の遠賀川系土器」考古学ジャーナル273
- 工藤 竹久 1978「東北北部における弥生時代の諸問題」北奥古代文化第10号
- 新谷 雄蔵 1975「津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究」北奥古代文化第7号
- 石井 雅男 1993「論苑考古学」坪井清足さんの古稀を祝う会
- 芹沢 長介 1960「石器時代の日本」
- 佐原 真 1986「縄紋／弥生・東北地方における遠賀川系土器の分布の意味するもの」
(日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨及び基調講演資料)
- 日本考古学会 1987「考古学雑誌」第72巻第4号
- 弘前大学考古学研究室 1981「牧野II遺跡出土遺物について(1)」弘前大学考古学研究室第1号
- 市川金丸・木村鐵次郎 1984「青森県松石橋遺跡から出土した弥生時代前期の土器」考古学雑誌第69巻第3号
- 季刊考古学第10号 1987「弥生土器は語る」雄山閣
- 青森県教育委員会 1980「松元遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第46集
 “ 1980「大平遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第52集
 “ 1981「山本遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第105集
 “ 1988「茶毘遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第110集
 “ 1988「上尾駁(1)遺跡C地区発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第113集
 “ 1988「上蛇沢遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第117集
 “ 1988「館野遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第119集
 “ 1994「山元(3)遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第159集
 “ 1995「山元(2)遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第171集
 “ 1995「野尻(2)遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第172集
 “ 1995「板子塚遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第180集
 “ 1996「野尻(2)II(3)(4)遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第186集
 “ 1996「畑内遺跡III発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財報告書第187集
- 青森県立郷土館 1988「名川町剣吉荒町遺跡(第2地区)」青森県立郷土館調査報告第22集考古一7
 “ 1995「木造町田小屋野貝塚—岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書」
- 青森県弘前市教育委員会 1988「砂沢遺跡発掘調査報告書 図版編」
 “ 1991「砂沢遺跡発掘調査報告書 本文編」
 “ 1992「弘前の文化財 砂沢遺跡」弘前の文化財シリーズ第15集
- 青森県八戸市博物館 1986「弥生時代—米づくりの始まる頃」

第4章

宇田野（3）遺跡の出土遺物

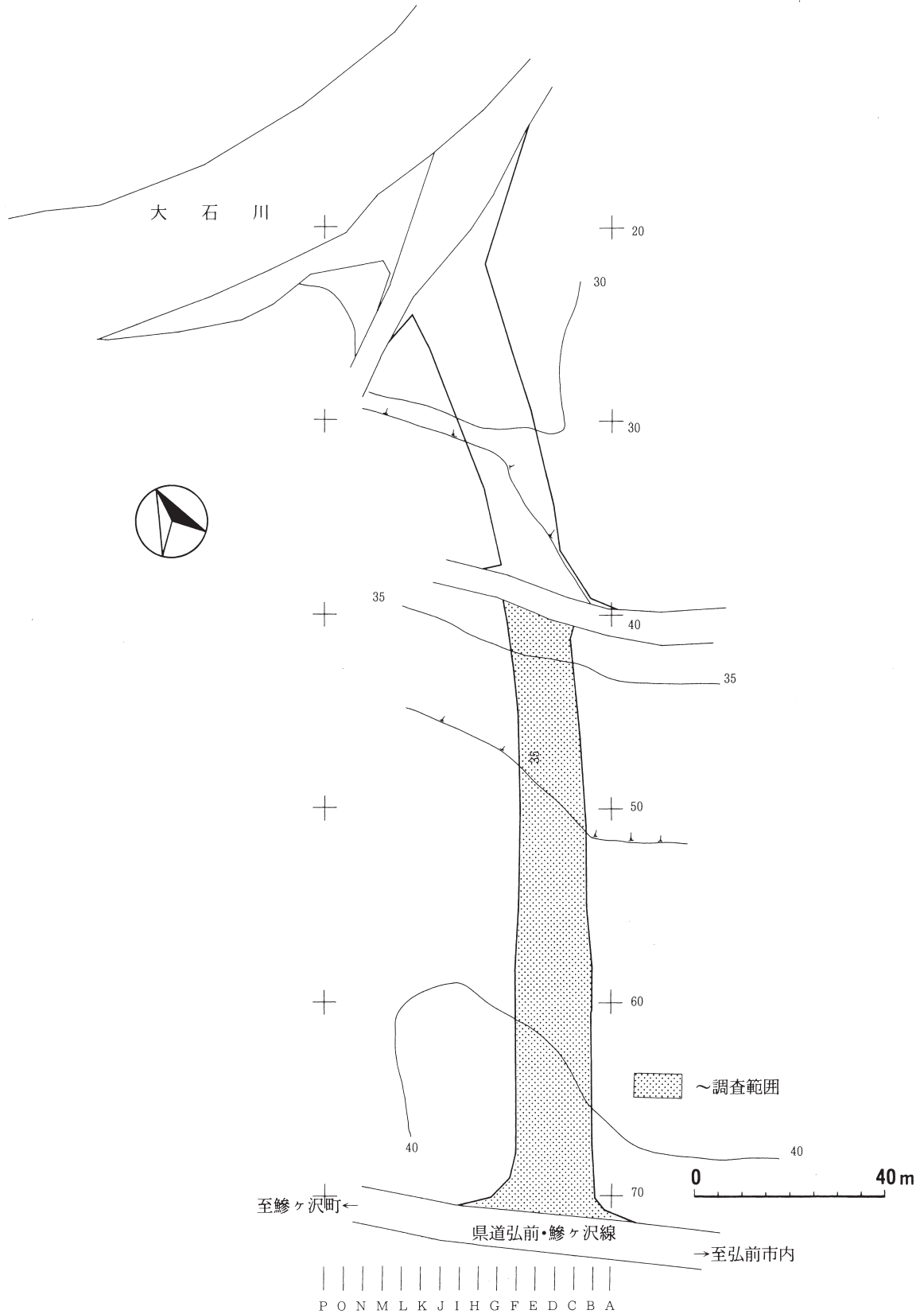


図1 宇田野(3)遺跡地形図

第1節 出土遺物

本遺跡は、りんご畑の造成に伴い削平及び盛土が行われており、今回の調査区内では遺構は検出されなかった。

1 土器 (図2—1～13)

出土した土器は、全て破片で13点である。いずれも小破片で磨耗が激しい。主に縄文時代中期に相当するものであるが、他にも、土師器の破片2点と須恵器の破片1点が出土した。

1は、深鉢形土器の口縁部の一部で、折り返し口縁上に隆帯を縦位に貼り付け、山形状に縄目の圧痕を施文している。また、口唇部直下には、棒状工具によると思われる2条の平行沈線を横位に施文している。これは、縄文時代中期の円筒上層d式土器に比定されると思われる。

2も、深鉢形土器の口縁部の一部で、折り返し口縁上に縦位に縄目の圧痕を施文している。これも1と同様、縄文時代中期の円筒上層d式土器に比定されると思われる。

3～10は、深鉢形土器の胴部破片で、中でも8～10は同一個体と思われる。いずれも縄文を施文しているが、磨耗が激しく、文様構成などについてはよくわからない。

11・12は、土師器甕の破片である。11は胴部、12は底部の破片であるが、外面及び底面をヘラ状工具のナデで整形している。12の内面には火ばねの痕が認められる。いずれも、色調は内外面ともにぶい黄橙色である。

13は、須恵器の胴部破片で、外面に叩き目を施している。内面には、当て具痕が認められる。色調は、須恵器特有の灰褐色ではなく、内外面とも浅黄橙色である。 (山内 実)

2 石器 (図3—1・2)

2点出土した。

1は、珪質頁岩を素材とした石匙で、刃部は大きな主に弧状を呈している。主に片面から器体整形を行っているが、抉り部分及び刃部は両面からの調整を行っている。刃部湾曲部の背面側に3cm程に渡って使用によるものと思われる破損が認められる。また、刃部先端部にかけて刃の潰れが認められる。全体に油脂上の光沢が見られる。

2は、凹み石で、一端が肥厚する礫を素材とし、両面に一箇所ずつの凹みを有している。また、両端には敲打痕が認められる。石質は安山岩である。

(白鳥 文雄)

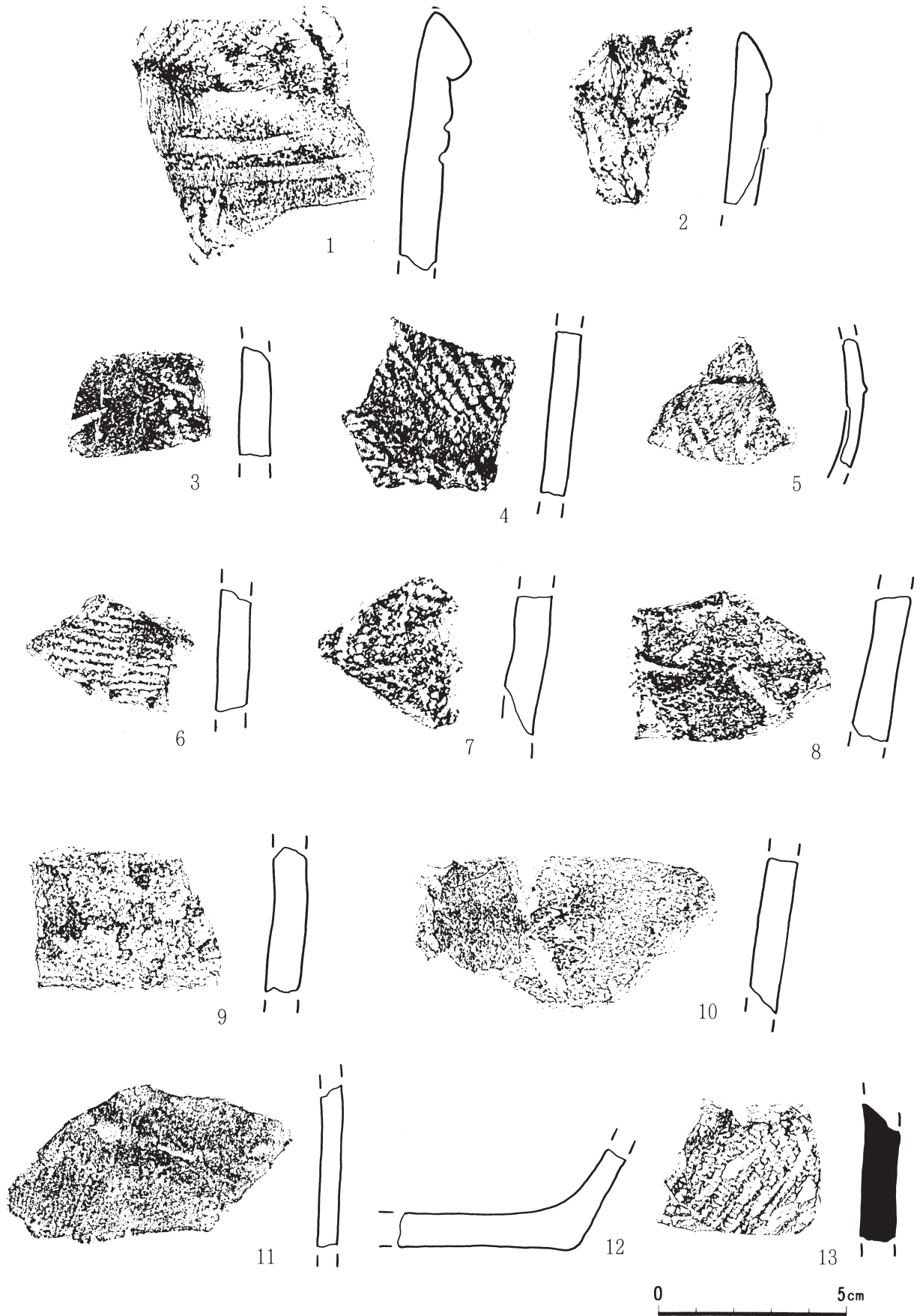


图2 出土土器

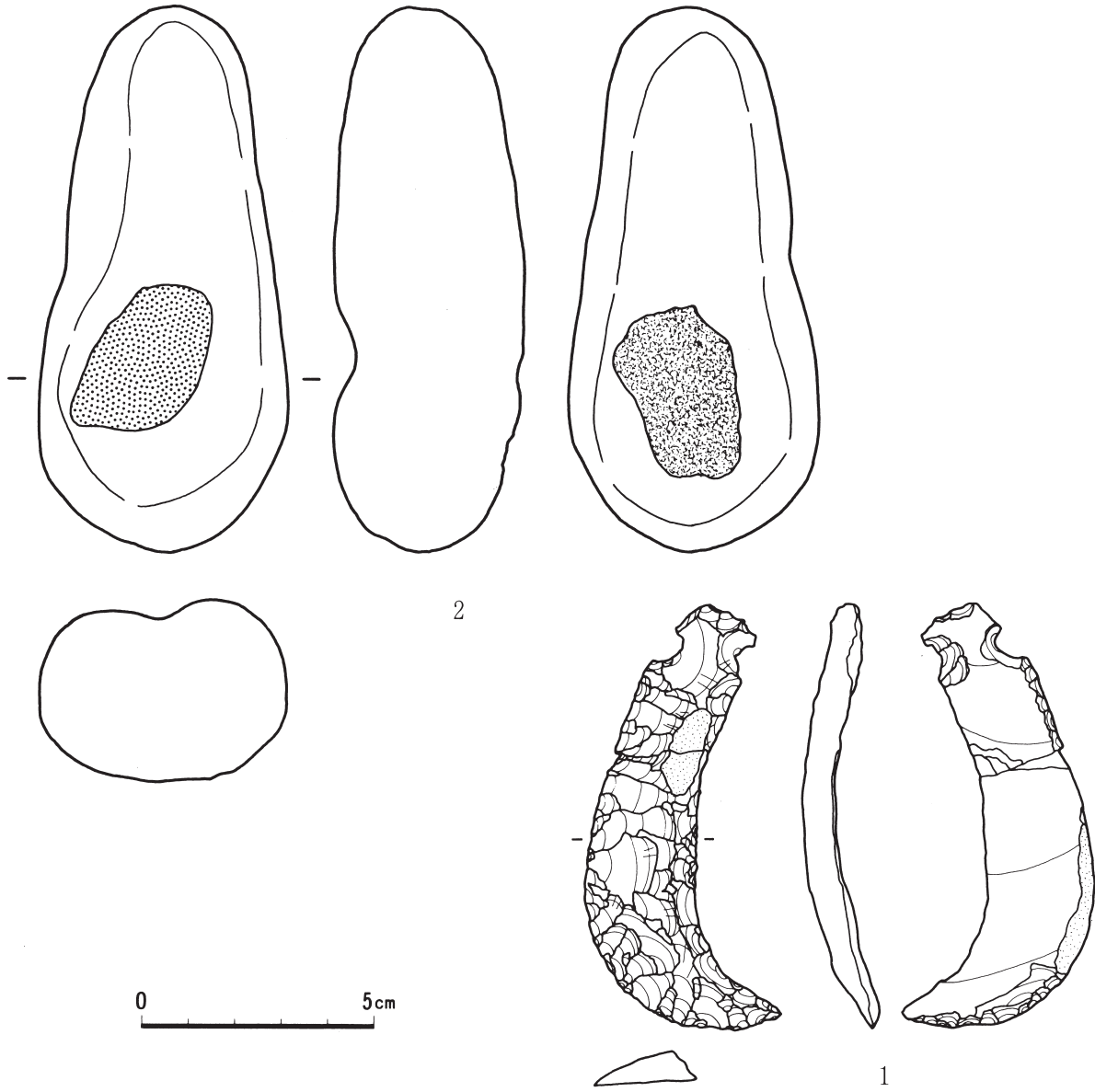


図3 出土石器

第2節 まとめ

今回の調査では、遺構は検出されなかったが、縄文時代中期の土器及び石器が出土していることから、この周辺には縄文時代中期の集落が存在することが推定される。

また、平安時代の土師器や須恵器の破片も数点出土しており、この周辺には平安時代の集落も存在する可能性がある。

(1) 今回の調査は、南北に延びる延長100m、幅14m程が対象であった。また、大石川を挟んで北側には、宇田野(2)遺跡が存在する。

(2) 今回の発掘調査で検出された遺構は、全くなかった。

(3) 遺物は、縄文土器片十数点、石器2点が出土した。時期は主に、縄文時代中期と思われる。

また、平安時代の土師器や須恵器の破片も数点出土している。

(4) この周辺には、縄文時代中期及び平安時代の集落が存在することが推定される。

(山内 実)

表1 土器観察表

図版番号	出土位置	層位	器形	部位	文様構成	時期	備考
図2-1	D-41	II	深鉢	口縁	折り返し口縁、口縁部に2条の沈線文	縄文時代中期	円筒上層d式
-2	D-60	II	〃	口縁	〃 口縁上に縦位の縄目圧痕	〃	〃
-3	D-35	I	〃	胴部	縄文	〃	
-4	D-40	I	〃	胴部	〃	〃	
-5	D-41	II	〃	胴部	〃	〃	
-6	D-60	II	〃	胴部	〃	〃	
-7	D-60	II	〃	胴部	〃	〃	
-8		I	〃	胴部	〃	〃	
-9	D-36	I	〃	胴部	〃	〃	
-10	D-36	I	〃	胴部	〃	〃	
-11	D-60	II	甕	胴部	内外面をヘラナゲで整形	平安時代	土師器
-12		I	〃	底部	〃 内面に火ばね痕	〃	〃
-13	C-45	II	〃	胴部	外面に叩き目、内面に当て具痕	〃	須恵器

表2 石器観察表

図版番号	出土位置	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	器種	備考
図3-1	F-35	I	90.5	42.0	16.5	18.1	珪質頁岩	石匙	
-2	F-37	I	117.5	53.0	41.0	260.6	安山岩	凹石	

第5章

草薙（3）遺跡の検出遺構と出土遺物

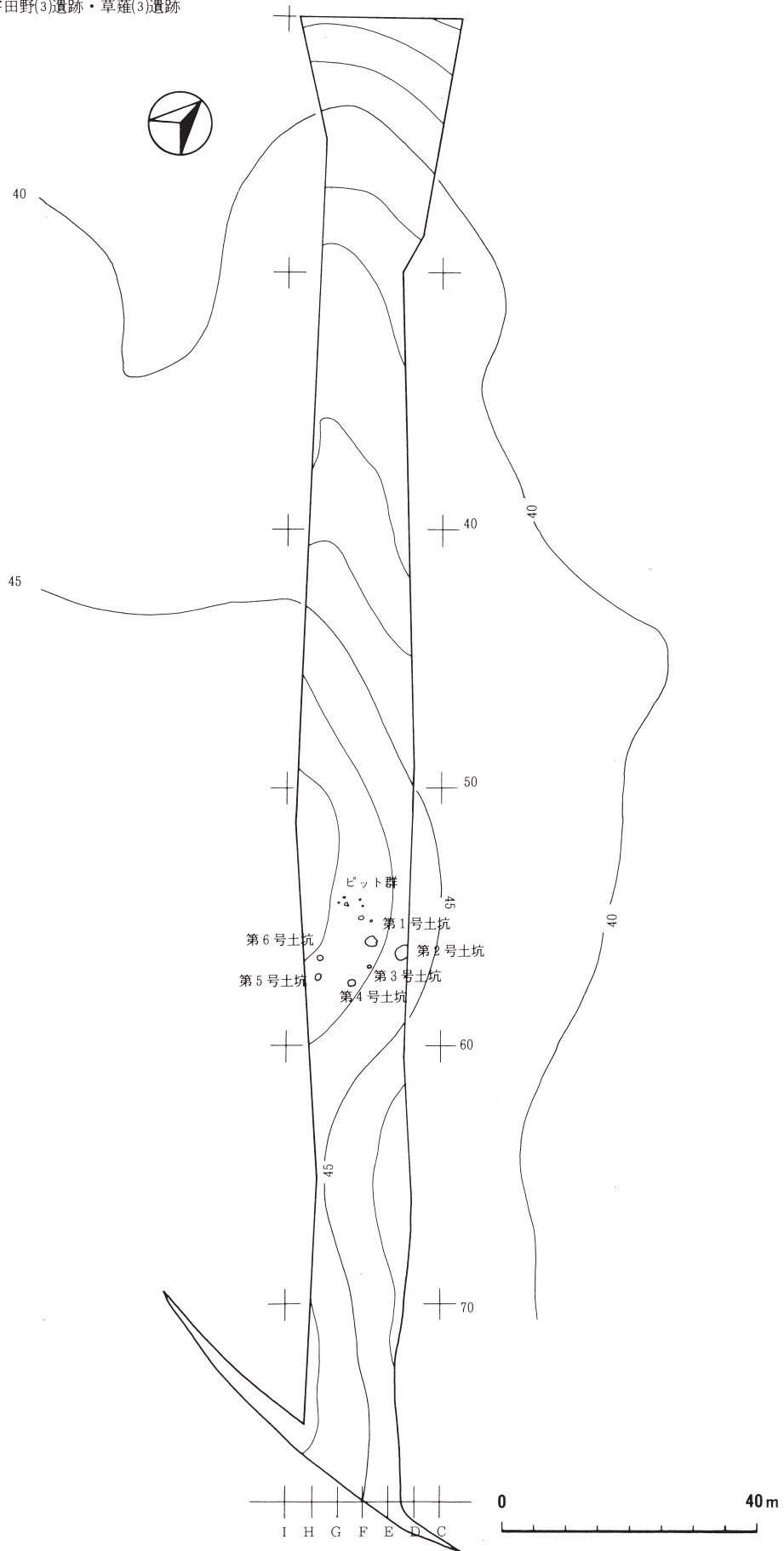


図1 草薙(3)遺跡 遺構配置図

第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

本遺跡の調査で検出した遺構は、縄文時代の土坑6基及び時期不明のピット群である。遺物では、縄文時代の土器を中心として段ボール箱2箱相当の土器、石器が出土した。以下、これらの遺構及び出土遺物についてまとめて記述する。なお、遺構内出土遺物についての詳細は、出土遺物の項で、遺構外出土遺物も含めて記載する。

1 土坑(図2～5)

本調査で検出された土坑は、6基である。土坑番号は検出順とした。土坑内出土遺物については、各遺構別に分けて一括して掲載した。(図4・5)

第1号土坑

[位置] F-56グリッドに位置し、第IV層上面で径160cm程の暗褐色土の落ち込みを確認した。

[規模・形状] 開口面は長軸165cm×短軸140cmの楕円形、底面は長軸165cm×短軸160cmのほぼ円形、深さは確認面から約95cmで、断面形状はフラスコ状を呈する。

[壁・底面] 地山(第V層)を壁及び底面としており、フラスコ状に掘り込まれている。壁及び底面とも緻密で、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 8層に分層できた。褐色土を基調としており、全体にローム粒及び炭化物粒を混入している。断面観察等から、人為的堆積と考えられる。

[出土遺物] 堆積土中から、縄文時代前期の土器片が数十点出土した。主に、推定口径45cm・器高約50cmの深鉢形土器が1個体である。その他にも、これとは別個体の土器破片が数点出土した。

[小結] 本土坑の構築時期は、出土した土器から縄文時代前期以降と思われる。

第2号土坑

[位置] E-57グリッドに位置し、第IV層上面で径120cm程の黒褐色土の落ち込みを確認した。

[規模・形状] 開口面は長軸128cm×短軸98cmの楕円形、底面は長軸118cm×短軸80cmのほぼ楕円形、深さは確認面から約25cmである。

[壁・底面] 地山(第V層)を壁及び底面としている。壁は、底面から開口部にかけて緩やかに立ち上がり、開口部が広がる。壁及び底面とも緻密で、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調としており、全体にローム粒を混入している。断面観察等から、人為的堆積と考えられる。

[出土遺物] なし

[小結] 構築時期は不明である。

第3号土坑

[位置] F-57グリッドに位置し、第IV層上面で径70cm程の黒褐色土の落ち込みを確認した。

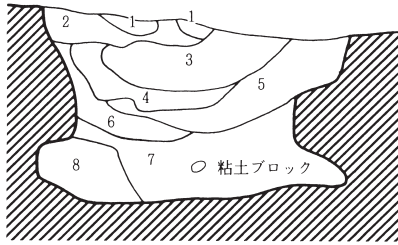
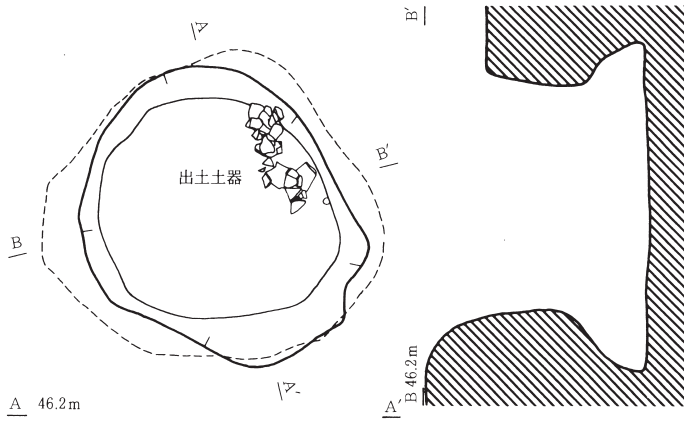
[規模・形状] 開口面は長軸70cm×短軸67cmのほぼ円形、底面は長軸58cm×短軸45cmの楕円形、深さは確認面から約25cmである。

[壁・底面] 地山(第V層)を壁及び底面としている。底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が広がる。壁は壁及び底面とも緻密で、底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。褐色土を基調としており、全体にローム粒及び炭化物粒を混入して

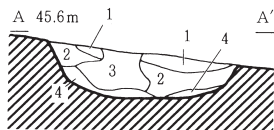
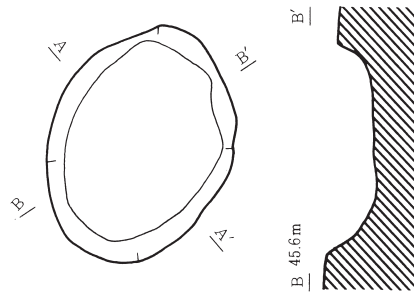


F-56



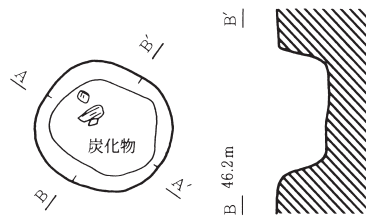
第1号土坑

- | | | | |
|-----|------|---------|---------------------|
| 第1層 | 黄褐色土 | 10YR5/8 | ローム層。草木根微量。 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 焼土粒・炭化物微量。 |
| 第3層 | 黒色土 | 10YR2/1 | 少礫微量。 |
| 第4層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒微量。 |
| 第5層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | L.B・ローム粒微量。 |
| 第6層 | 褐色土 | 10YR4/6 | ローム層。 |
| 第7層 | 褐色土 | 10YR4/4 | ローム粒中量、炭化物少量、粘土粒微量。 |
| 第8層 | 黄褐色土 | 10YR5/6 | 炭化物微量。 |

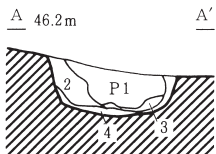


第2号土坑

- | | | | |
|-----|------|---------|---------------|
| 第1層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒微量、草木根混入。 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒少量。 |
| 第3層 | 黒色土 | 10YR2/1 | 炭化粒・ローム粒微量。 |
| 第4層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | ローム粒少量。 |



F-57



第3号土坑

- | | | | |
|-----|------|---------|------------------------------|
| 第1層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 炭化粒・粘土・粘土粒少量。焼土粒・ローム粒微量、根混入。 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 炭化粒・ローム粒少量、粘土粒微量。 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒少量。 |
| 第4層 | 褐色土 | 10YR4/4 | ローム粒多量。 |



図2 土坑(1)

いる。断面観察等から、人為的堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中から、縄文時代前期の円筒下層b式に比定される土器が数点出土した。

〔小結〕 本土坑の構築時期は、出土した土器から縄文時代前期と思われる。

第4号土坑

〔位置〕 F-57グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で径120cm程の黒褐色土の落ち込みを確認した。

〔規模・形状〕 開口面は長軸125cm×短軸130cmのほぼ円形、底面は長軸220cm×短軸205cmのほぼ円形、深さは、確認面から約150cmで、断面形状はフラスコ状を呈する。

〔壁・底面〕 地山(第Ⅴ層)を壁及び底面としており、フラスコ状に掘り込まれている。壁及び底面とも緻密で、底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 14層に分層できた。褐色土を基調としており、全体にローム粒及び炭化物粒を混入している。全体にしまっていて、ほとんどが混合土的な様相を呈する。人為的堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中から、縄文時代中期の円筒上層c式と思われる土器が数点出土した。その他にも、石冠、凹み石が各1点出土した。

〔小結〕 本土坑の構築時期は、出土した土器から縄文時代中期と思われる。

第5号土坑

〔位置〕 H-57グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で径100cm程の褐色土の落ち込みを確認した。

〔規模・形状〕 開口面は長軸110cm×短軸105cmのほぼ円形、底面は長軸122cm×短軸120cmのほぼ円形、深さは、確認面から約30cmである。

〔壁・底面〕 地山(第Ⅴ層)を壁及び底面としている。壁は、底面から開口部にかけて内傾しながら直線的に立ち上がっている。また、底面のほぼ中央に径約60cm、深さ10cmの落ち込みを確認した。壁及び底面とも緻密で、底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に分層できた。黒褐色土を基調としており、全体にローム粒及び炭化物粒を混入している。断面観察等から、人為的堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔小結〕 構築時期は不明である。

第6号土坑

〔位置〕 H-58グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で径80cm程の暗褐色土の落ち込みを確認した。

〔規模・形状〕 開口面は長軸85cm×短軸80cmのほぼ円形、底面は長軸92cm×短軸90cmのほぼ円形、深さは確認面から約20cmである。

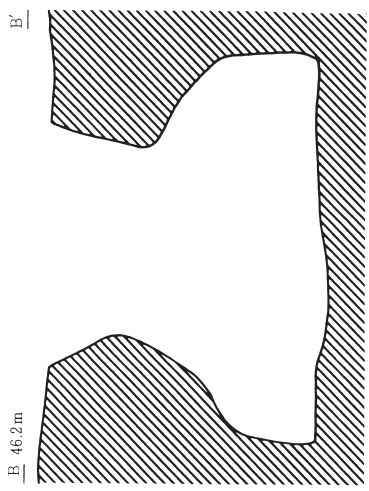
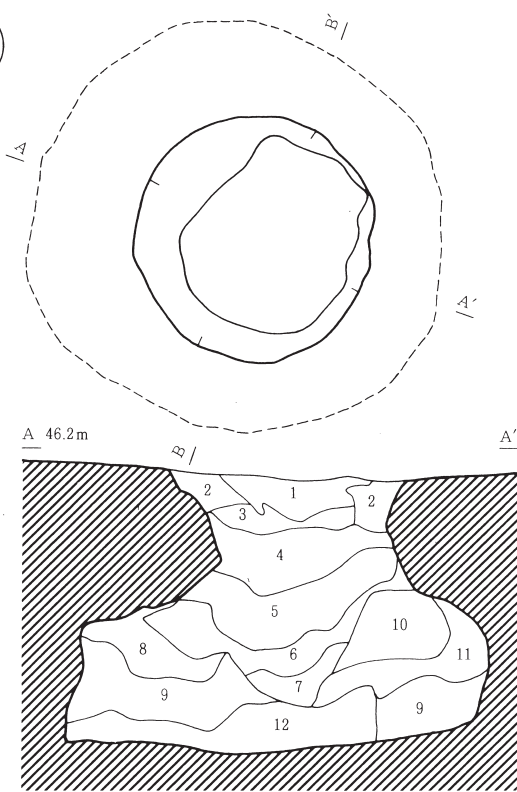
〔壁・底面〕 地山(第Ⅴ層)を壁及び底面としている。壁は、底面から開口部にかけて内傾しながら直線的に立ち上がっている。壁及び底面とも緻密で、底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に分層できた。褐色土を基調としており、全体にローム粒を混入している。人為的堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 覆土中から、凹み石が1点出土した。

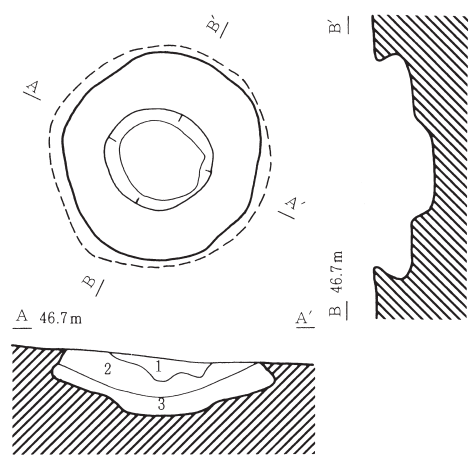
〔小結〕 構築時期は不明である。

(山内 実)



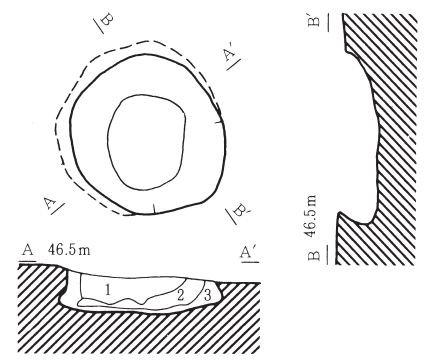
第4号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR1.7/1 炭化粒・ローム粒少量、根混入。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量、炭化粒微量。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒多量、炭化粒微量。
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 L.B・ローム粒中量、炭化粒微量。
- 第5層 黒褐色土 10YR3/2 炭化粒多量、ローム粒少量、焼土微量。
- 第6層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物・ローム粒少量。
- 第7層 暗褐色土 10YR3/4 炭化粒・ローム粒少量。
- 第8層 褐色土 10YR4/6 炭化物・ローム粒少量。
- 第9層 黄褐色土 10YR5/8 炭化粒少量、L.B混入。
- 第10層 黄褐色土 10YR5/8 炭化粒微量。
- 第11層 黄褐色土 10YR5/6 炭化粒少量。
- 第12層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物・ローム粒少量。



第5号土坑

- 第1層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒微量。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物・ローム粒・粘土粒微量。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物・ローム粒・粘土粒微量。



第6号土坑

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 L.B・ローム粒微量。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒微量。
- 第3層 褐色土 10YR4/6 ローム粒微量。

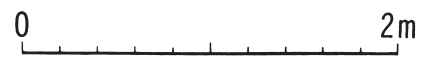


图3 土坑(2)

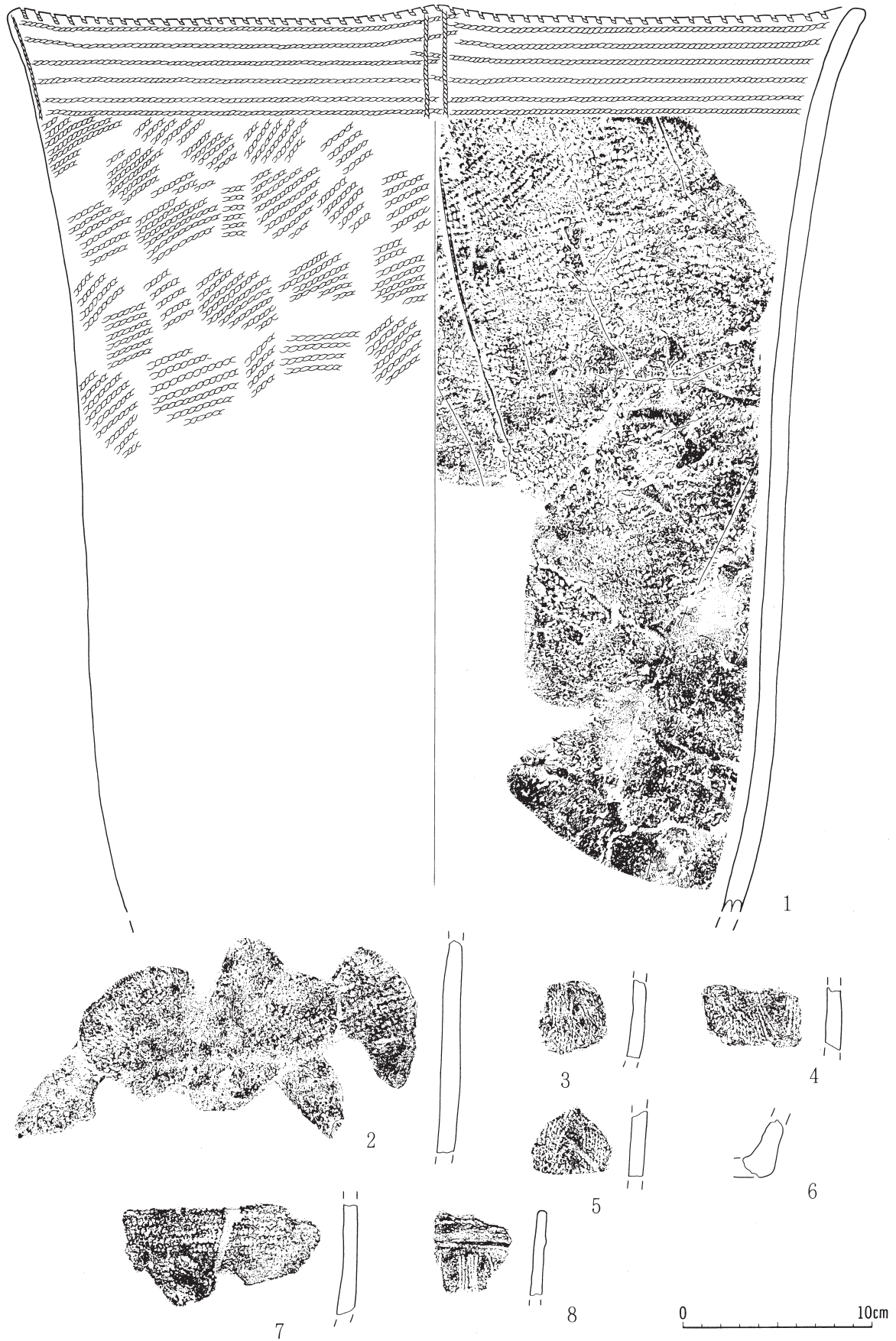


图4 土坑出土遺物(1)

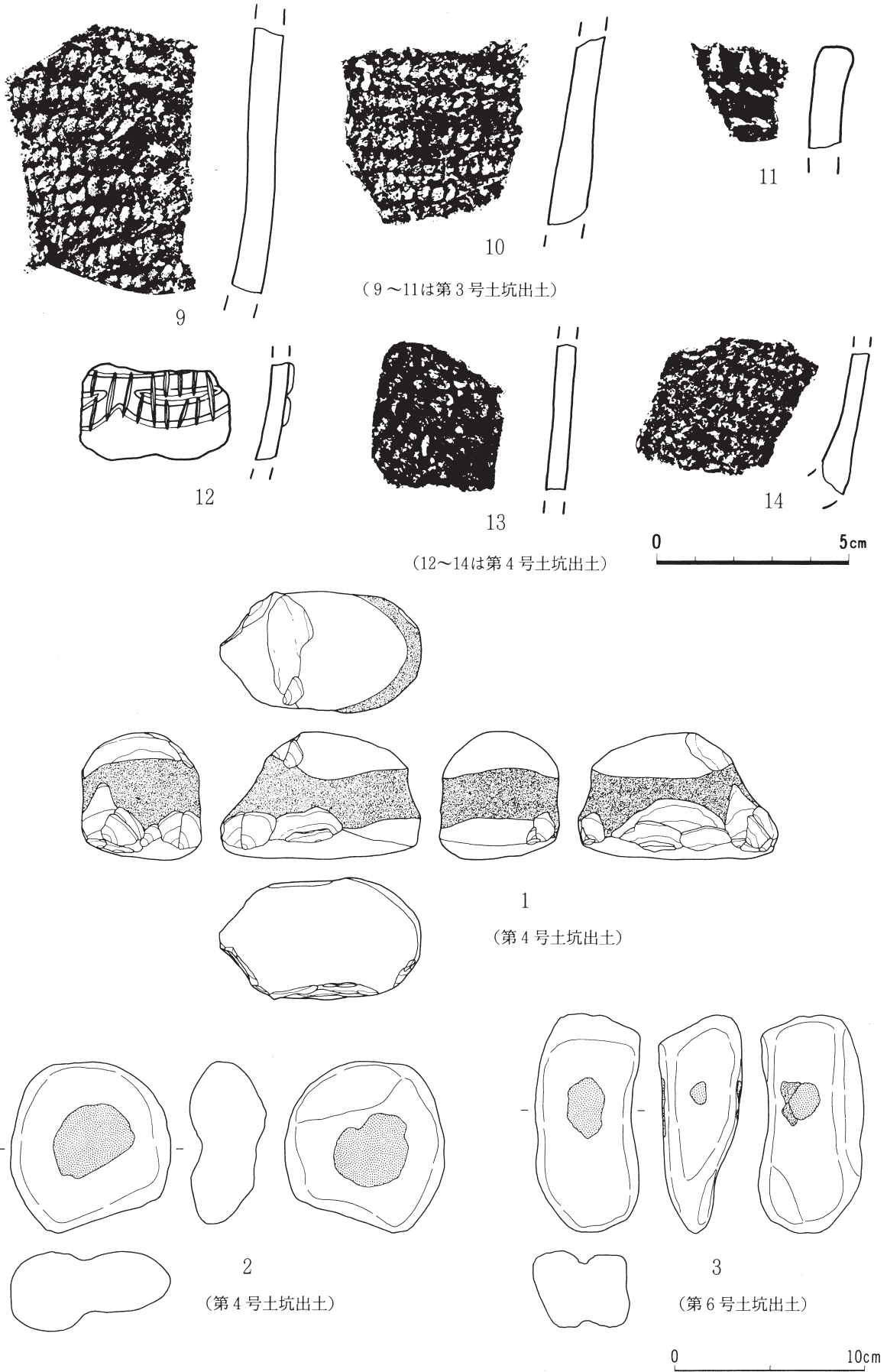


図5 土坑出土遺物(2)

2 ピット群

土坑群の西側から7個のピットを検出した。検出面は第V層上面である。これらは、E～G—55グリッドの範囲に位置する。ピットの平面形状は楕円形と円形である。開口面の直径は最大で50cm、最小で20cm程であり、深さは検出面から最深20cmであるが、大半は10cm前後と非常に浅い。また、相互の位置関係などについての規則性は特に見られない。周辺からの出土遺物も全くない。したがって、時期についても不明である。新しい時期の可能性も考えられる。(山内 実)

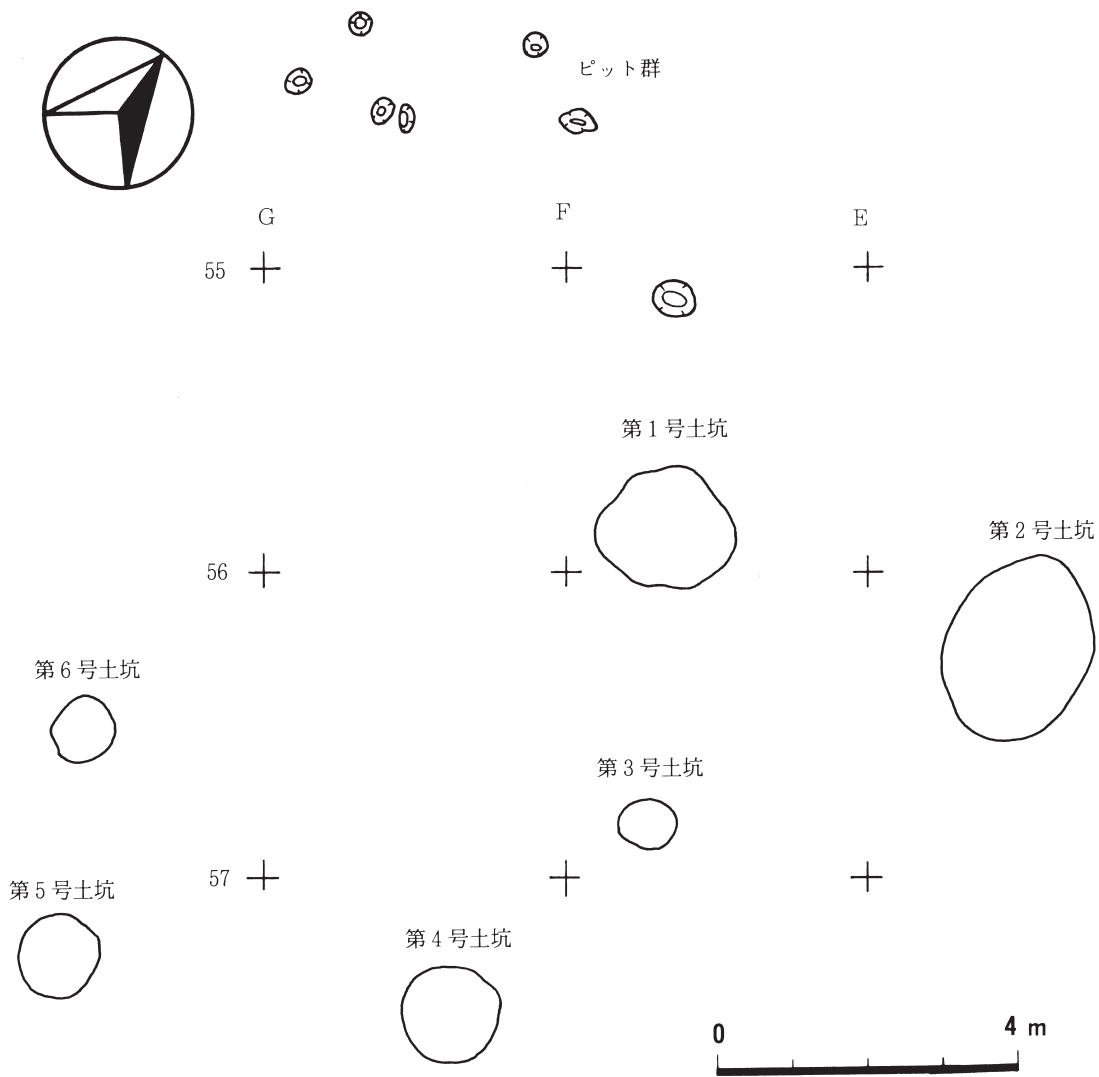


図6 ピット群

第2節 出土遺物の観察

ここでは、遺構内出土遺物及び遺構外出土遺物をあわせて記述する。

1 土器 (図4・5・7)

本遺跡から出土した土器は、深鉢形土器1個体の他は、全て破片である。そのうち、破片3点は遺構外からの出土であるが、それ以外は全て土坑から出土したものであり、遺構内出土遺物の項では詳細を記述できなかつたため、あわせて記述する。

1～8 (図4—1～8) は、第1号土坑から出土した土器である。土坑の北寄りの覆土からまとまって出土した。1は、推定口径45cm、器高約50cmの深鉢で、口縁は緩やかな波状口縁を呈し、口唇部には撚糸圧痕を連続して施文し、口縁部文様帯には撚糸圧痕を横位に6条施文した後、波状突起部直下に縦位に撚糸圧痕を2条施文して区画している。胴部には底部付近までLR縄文を回転押捺している。これは、縄文時代前期の円筒下層b式土器に比定されると思われる。

2は、1と同一個体の胴部破片である。

3～5は同一個体と思われる胴部破片で、木目様撚糸圧痕を施文している。

6もほぼ同時期の底部破片であろう。

7は、深鉢形円筒土器の胴部破片であり、横位に縄文を施文している。

8は、胴部破片で、上記の破片とは時期が異なるものである。口縁部破片であり、口縁と平行に撚糸圧痕を3本施し、その直下に縦位に撚糸圧痕を6本施文具している。

9～11 (図5—9～11) は、第3号土坑からの出土である。9・10は、円筒土器の胴部破片であり縄文を施文している。11は、口縁部の破片であり、平口縁と思われ、口唇部に撚糸圧痕を施文している。

12～14 (図5—12～14) は、第4号土坑からの出土である。12は、縄文時代中期の円筒上層c式土器の口縁の破片と思われ、粘土紐を張り付けた上に、刻みを加えている。13・14は、ほぼ同時期の胴部破片であろう。

15・16 (図7—15・16) は、遺構外からの出土である。同一個体と思われる胴部破片で、節の細かい斜縄文が施されている。縄文時代晩期か弥生時代のもと思われる。

17 (図7—13) は、遺構外からの出土である。口縁部破片で、口縁と平行に横位に撚糸圧痕が施文されている。縄文時代前期の円筒下層b式土器と思われる。 (山内 実)

2 石器 (図5・7)

今回の調査では、総計6点の石器が出土した。うち、3点は第4・6号土坑からの出土であるが、遺構内出土遺物の項では詳細を記述できなかつたため、あわせて記述する。

1 (図5—1) 第4号土坑出土の石冠である。底面及び底部から把握部までの間を研磨して整形している。他の部分はすべて敲打による整形である。器体2箇所には大きな破損がみられるが、折損部にも研磨痕が認められることから、欠損後にも、使用または再加工したものと考えられる。

2 (図5—2) 1と同様に第4号土坑出土で、不整形の円礫を素材とした凹み石である。両面の中央に一箇所ずつの大きな凹みを有している。

3 (図5-3) 第6号土坑出土の凹み石で、不整形の角柱状の礫の4面に一箇所ずつの凹みを有している。このうちの幅広の2面の凹みは鋭角的な深いものである。

4 (図7-4) 遺構外からの出土である。小判型の小円礫の1端を両面から剥離し、抉りを作成している。石錘の可能性が高いが、対応する抉りが作出されていないことや石材自体の表面が非常に滑らかな事から断定できない。側縁加工。錐中途までいいから整形時は錐つくってた。その欠損使用による欠損ではない。

5 (図7-5) 遺構外出土の不定形石器で、側縁に片面から調整が行われている。先端から欠損しているため全体形を知り得ないが、基部及び刃部の形状から、錐の欠損品の可能性が高い。

6 (図7-6) 遺構外出土の不定形石器で、縦長剥片の側縁に片面からの剥離が施されている。折損部分からスクレーパー類の欠損品と考えられる。 (白鳥 文雄)

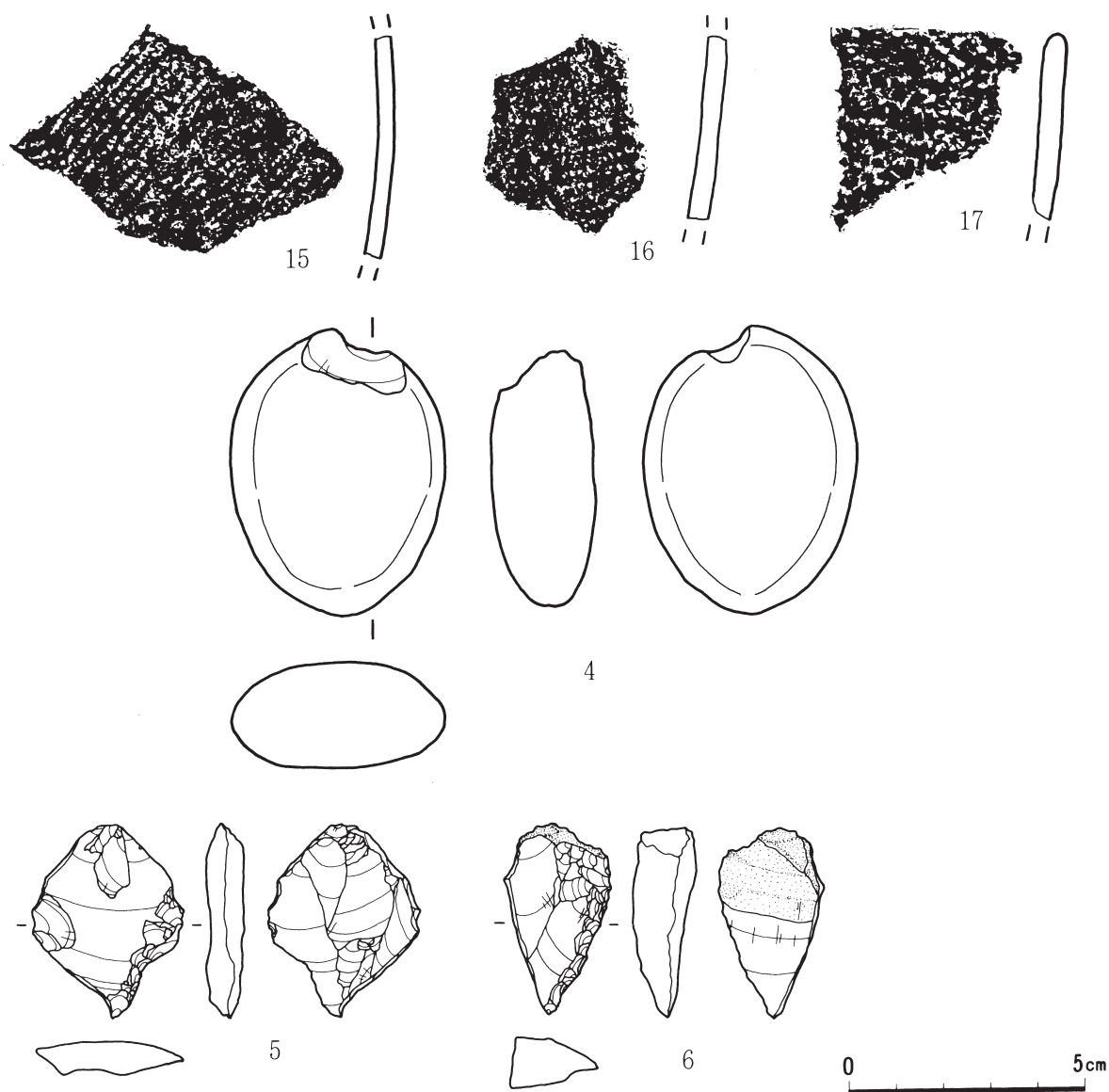


図7 遺構外出土遺物

第3節 まとめ

調査の結果、調査区の北西側斜面はリング園整地のため削平されており、遺構は検出されなかった。丘陵部には、土坑が6基検出され、縄文時代前～中期の土器片や石器が出土していることから、周辺には縄文時代の集落が存在するものと推定される。

また、縄文時代晩期～弥生時代の土器片も数点出土しており、周辺には同時期の集落が存在する可能性もある。

- (1) 今回の調査は、南北に延びる延長130m・幅15m程の丘陵地頂部が対象であった。
- (2) 今回の発掘調査で検出された遺構は、土坑6基とピット群である。
- (3) 土坑の時期については、縄文時代前～中期と思われるが、ピット群については不明である。
- (4) 遺物は、土器と石器を合わせて、段ボール箱で2箱相当分が出土した。時期は、縄文時代前期～同中期のものが出土している。これらのうち、主体となるのは、縄文時代前期の円筒下層式である。また、縄文時代晩期～弥生時代の土器片も数点出土している。 (山内 実)

表1 土器観察表

図版番号	出土位置	層位	器形	部位	文様構成	時期	備考
図5-1	第1号土坑	覆土	深鉢	口～胴	平口縁、撚糸圧痕、LR縄文	縄文前期	円筒下層b
-2	〃	〃	〃	胴部	LR縄文	〃	〃
-3	〃	〃	〃	〃	木目様撚糸圧痕	〃	
-4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
-5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
-6	〃	〃	〃	底部		〃	
-7	〃	〃	〃	胴部	横位に縄文	〃	
-8	〃	〃	〃	口縁	縦位に撚糸圧痕	縄文中期?	
-9	第3号土坑	〃	〃	胴部	縄文	〃	
-10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
-11	〃	〃	〃	口縁	平口縁	〃	
-12	第4号土坑	〃	〃	〃	粘土紐張り付け上に刻目	縄文中期	円筒上層c
-13	〃	〃	〃	胴部	LR縄文	〃	〃
-14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
図7-15	E-39	II	〃	〃	節の細かい斜縄文	縄文晩期?	
-16	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
-17	H-55	II	〃	口縁	横位に撚糸圧痕	縄文前期	円筒下層b

表2 石器計測表

図版番号	出土地点	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石質	器種	備考
図5-1	第4号土坑	覆土	66.0	105.5	63.0	646.7	安山岩	石冠	
-2	〃	〃	88.5	83.5	41.5	282.3	砂岩	凹石	
-3	第6号土坑	〃	113.0	55.0	44.0	328.8	安山岩	凹石	
図7-4	G-56	I	60.0	45.0	22.0	83.0	閃緑岩	石錘	
-5	F-55	〃	40.5	31.0	8.0	10.5	珪質頁岩	不定形	
-6	E-56	〃	40.0	22.0	13.0	9.6	緑色細粒凝灰岩	不定形	